

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要24

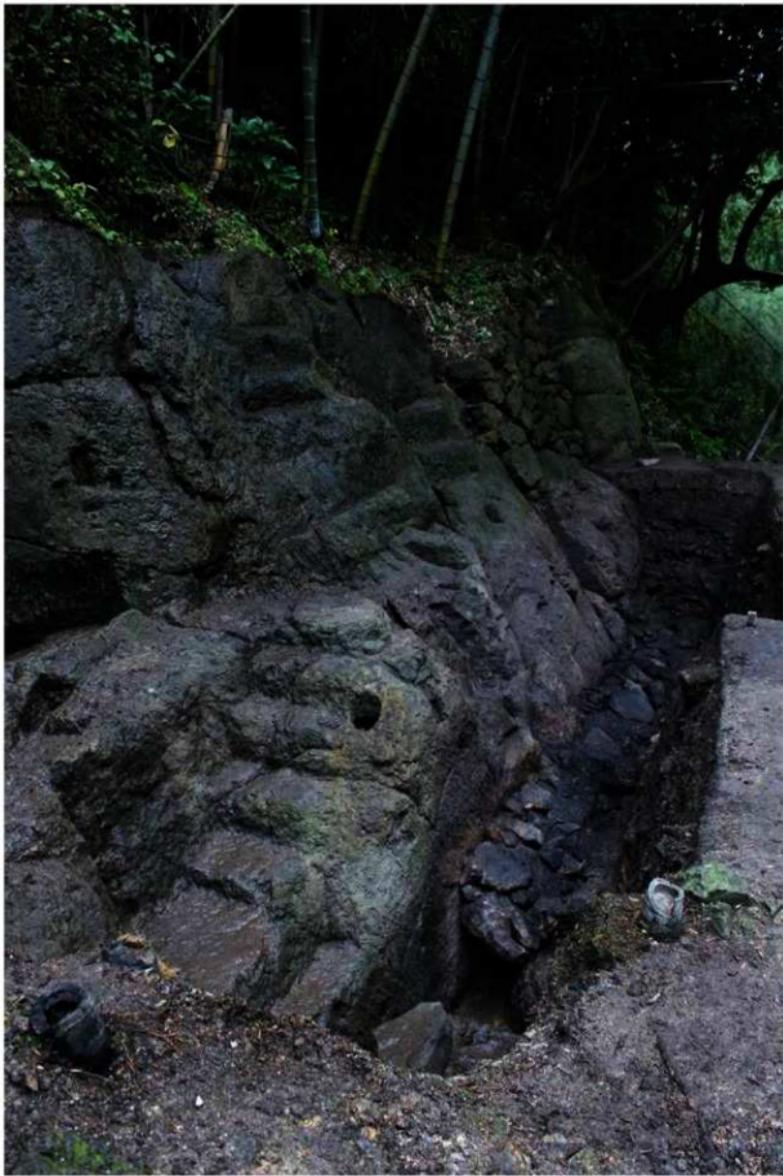


－昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点－

2016年3月

島根県大田市教育委員会

卷頭図版 1



昆布山谷地区第5地点 SX 02 全景（南東より）



卷頭図版 2



布山谷地区第6地点 SX 20 全景（北東より）



昆布山谷地区第7地点 SX 21・22 全景（南東より）





豊栄神社地点 3T SD 01 (北東より)



# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要24



－昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点－

2016年3月

島根県大田市教育委員会



# 序

石見銀山遺跡は 16 世紀から 20 世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡を中心として、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ 2 本の街道、銀鉱石・銀の積み出しや諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡であり、前近代鉱山の総体を示す遺産として、2007 年にユネスコ世界遺産に登録されました。

遺跡の発掘調査は 31 年目となり、銀山地区内の昆布山谷地区と豊栄神社地点、伝建地区内の宗岡家地点の発掘調査などを実施したところです。

今年度に実施した昆布山谷地区の発掘調査は 6 年目となり、昨年度に引き続き岩盤加工遺構の詳細な調査を進め、周囲との関連性も確認を行いました。

宗岡家地点においては、修理整備事業に先立ち平成 26 年度から発掘調査を実施しており、本年度は江戸時代初期とみられる積石遺構や宗岡家住宅以前の建物に関連するとみられる礎石や石列を確認したところです。

豊栄神社地点では、環境整備事業に先立ち、昭和 18 (1943) 年に発生した土石流の影響や地下遺構の確認調査を実施し、境内を区画する玉垣の基礎部分や埋没していた石組の溝を検出し、土石流で埋まった石造物の石材がそのまま残存していることも判明しました。

こうした基礎資料を基に調査研究が着実に進むことを期待し、併せて調査にご協力いただきました関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成 28 年 3 月

島根県大田市教育委員会

教育長 大國晴雄

# 例 言

1. 本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 本書は、平成27年度の昆布山谷地区、宗岡家地点、豊栄神社地点及び、伝統的建造物群保存地区、世界遺産指定範囲内で実施した調査の概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

## 〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）	黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
高安克己（島根大学名誉教授）	田邊征夫（(公財)大阪府文化財センター理事長）
田中哲雄（元東北芸術工科大学芸術学部教授）	中塙 弘（DOWAホールディングス㈱取締役）
仲野義文（石見銀山資料館館長）	中村俊郎（中村ブレイス㈱代表取締役社長）
村田信夫（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）	
和上豊子（石見銀山ガイドの会前会長）	

## 〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）	大橋泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）	黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
田邊征夫（(公財)大阪府文化財センター理事長）	中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野義文（石見銀山資料館館長）	原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上 隆（京都美術工芸大学教授）	

## 〔事 務 局〕 大田市教育委員会石見銀山課

〔調査員〕 山手貴生・新川 隆・尾村 勝（大田市教育委員会石見銀山課）

〔遺物整理〕 高村玲子・井上伸子・浅野美貴

〔調査指導〕 文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、島根県教育委員会

5. 採図の縮尺は、図中に示した。
6. 採図中の座標は、昆布山谷地区は世界測地系を、宗岡家地点と豊栄神社は旧日本測地系の座標を使用した。  
また、レベル高は標高を示す。
7. Fig.1・Fig.2は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。
8. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。  
SD-溝跡 SK-土坑 SW-石垣・石積み SX-炉跡、特殊遺構
9. 採図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。
10. 発掘調査に当たっては大橋泰夫氏より、現地指導を賜った。
11. 本書の執筆は第4章、第6章第3節、第6章第4節の一部を新川が、それ以外を山手が行った。本文中の採図は造構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、造構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。
12. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

# 凡 例

## 1. 図版の表現

遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

[遺構]



被熱土壤



岩盤



炉壁



黄色粘土



灰白色粘土



灰色土

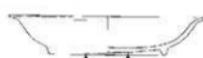
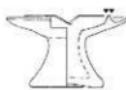


カラミ (精錬滓)



黒色土 (炭層)

[遺物]



煤



膜状付着物



炭化物



被熱部分

図中の▼印あるいは一点鎖線 (図中↑箇所) は施種範囲の境界を示す。

## 2. 本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ リ・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物をいう

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カラミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

# 本文目次

## 第1章 遺跡の概要

第1節	遺跡の位置と概要	1
第2節	平成27(2015)年度の調査	2

## 第2章 昆布山谷地区の調査

第1節	調査地の周辺環境	5
第2節	調査の概要	5
第3節	第5地点	5
第4節	第6・7地点	14
第5節	小結	21

## 第3章 宗岡家地点の調査

第1節	調査の概要	22
第2節	調査の成果	22
第3節	小結	32

## 第4章 豊栄神社地点の調査

第1節	調査の概要	33
第2節	調査の成果	33
第3節	小結	47

## 第5章 本年度の試掘・立会調査

第1節	平成27年度の調査地点	50
第2節	上市恵比須社地点の試掘調査	50

## 第6章 総括

第1節	昆布山谷地区	53
第2節	宗岡家地点	53
第3節	豊栄神社地点	54
第4節	まとめ	57

# 挿図目次

Fig. 1	石見銀山遺跡位置図 (S = 1 / 100,000) .....	1
Fig. 2	石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 25,000) .....	4
Fig. 3	昆布山谷地区調査地点位置図 (S = 1 / 1,500) .....	6
Fig. 4	昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図 (S = 1 / 70) .....	7
Fig. 5	昆布山谷地区第5地点I区平面図・立面図・断面図 (S = 1 / 70) .....	9
Fig. 6	昆布山谷地区第5地点S X17・18・19平面図・断面図 (S = 1 / 20) .....	10
Fig. 7	昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 I (S = 1 / 1、1 / 2、1 / 3) .....	12
Fig. 8	昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 II (S = 1 / 6) .....	14
Fig. 9	昆布山谷地区第6・7地点平面図 (S = 1 / 140) .....	15
Fig.10	昆布山谷地区第6地点平面図 (S = 1 / 80) .....	16
Fig.11	昆布山谷地区第6地点立面図 (S = 1 / 60) .....	17
Fig.12	昆布山谷地区第7地点平面図 (S = 1 / 80) .....	18
Fig.13	昆布山谷地区第7地点立面図 (S = 1 / 60) .....	19
Fig.14	昆布山谷地区第6・7地点採集遺物実測図 (S = 1 / 3) .....	21
Fig.15	大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点 (S = 1 / 10,000) .....	23
Fig.16	宗岡家地点調査区配置図 (S = 1 / 1,000) .....	24
Fig.17	宗岡家地点検出遺構配置図 (S = 1 / 120) .....	25
Fig.18	宗岡家地点第V区検出遺構配置図 (S = 1 / 50) .....	26
Fig.19	宗岡家地点下層確認トレチ平面図・断面図 (S = 1 / 30) .....	27
Fig.20	宗岡家地点サブトレチ断面図 (S = 1 / 50) .....	28
Fig.21	宗岡家地点SW01立面図 (S = 1 / 50) .....	28
Fig.22	宗岡家地点SW02平面図・立面図 (S = 1 / 25) .....	28
Fig.23	宗岡家地点出土遺物実測図 (S = 1 / 3) .....	30
Fig.24	豊栄神社地点周辺地形図 (S = 1 / 1,000) .....	34
Fig.25	豊栄神社地点トレチ配置図 (S = 1 / 200) .....	35
Fig.26	豊栄神社地点トレチ平面図・断面図 I (S = 1 / 50) .....	37
Fig.27	豊栄神社地点トレチ平面図・断面図 II (S = 1 / 50) .....	39
Fig.28	豊栄神社地点トレチ平面図・断面図 III (S = 1 / 50) .....	41
Fig.29	豊栄神社地点トレチ平面図・断面図 IV (S = 1 / 50) .....	43
Fig.30	豊栄神社地点出土遺物実測図 I (S = 1 / 3) .....	44
Fig.31	豊栄神社地点出土遺物実測図 II (S = 1 / 6) .....	46
Fig.32	豊栄神社地点出土遺物実測図 III (S = 1 / 6) .....	47
Fig.33	豊栄神社地点採集遺物実測図 (S = 1 / 6) .....	48
Fig.34	上市恵比須社地点位置図 (S = 1 / 25,000) .....	50
Fig.35	上市恵比須社地点周辺地形図 (S = 1 / 2,500) .....	51
Fig.36	上市恵比須社地点平面図・断面図 (S = 1 / 40) .....	52

# 表目次

Tab.1	石見銀山遺跡調査一覧表 .....	3
Tab.2	昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 .....	13
Tab.3	昆布山谷地区第6・7地点採集遺物一覧表 .....	21
Tab.4	宗岡家地点出土遺物一覧表 .....	31
Tab.5	豊栄神社地点出土遺物一覧表 .....	49

# 図版目次

卷頭図版 1	昆布山谷地区第5地点S X02全景 (南東より)	同	北壁断面 (南西より)
卷頭図版 2	昆布山谷地区第6地点S X20全景 (北東より)	同	南壁断面 (北東より)
	昆布山谷地区第7地点S X21・22全景 (南東より)	PL.15	豊栄神社地点3 トレンチ完掘状況 (南西より)
卷頭図版 3	豊栄神社地点3 T SD01 (北東より)	同	S D01完掘状況 (北西より)
PL. 1	昆布山谷地区第5地点調査前全景 (東より)	PL.16	豊栄神社地点3 トレンチSD01完掘状況 (南西より)
	同 S X02全景 (東より)	同	S D01九太村出状況 (南西より)
PL. 2	昆布山谷地区第5地点第2面検出状況 (南西より)	同	SD01胴木立壇端部 (東より)
	同 第3面検出状況 (南西より)	同	南壁断面 (北東より)
	同 第2・3面検出状況 (西より)	同	SD01東壁 (北西より)
	同 第3面検出状況 (西より)	同	SD01西壁 (南東より)
	同 第3面検出状況 (南西より)	同	SD01西壁剥木 (南東より)
	同 第3構構面検出状況 (南西より)	同	SD01東壁剥木 (北西より)
PL. 3	昆布山谷地区第5地点SD02-②検出状況 (北西より)	PL.17	豊栄神社地点3 トレンチ完掘状況 (北東より)
	同 SD02-②蓋石横出状況 (北西より)	同	東半部完掘状況 (東より)
	同 SD02-②ペルト上面 (北東より)	同	硬化面積出状況 (東より)
	同 SD02-②ペルト断面 (北西より)	同	石列検出状況 (南より)
PL. 4	昆布山谷地区第5地点SX18・19検出状況 (北東より)	同	硬化面積出状況 (北西より)
	同 SX17半截断面 (南西より)	PL.18	豊栄神社地点4 トレンチ完掘状況 (北西より)
	同 SX18半截断面 (南西より)	同	西壁断面 (東より)
	同 SX19横出状況 (南西より)	豊栄神社地点5 トレンチ西壁断面 (南東より)	豊栄神社地点5 トレンチ西壁断面 (南東より)
	同 SX19半截断面 (南西より)	同	完掘状況 (南西より)
PL. 5	昆布山谷地区第5地点東壁断面 (南より)	同	玉垣基礎出状況 (南東より)
	同 東壁断面北半 (南より)	同	灯篭基礎 (北西より)
	同 北壁断面 (南東より)	PL.19	豊栄神社地点6 トレンチ完掘状況 (北西より)
	同 東壁断面硬面化 (南より)	同	豊栄神社地点7 トレンチ完掘状況 (南西より)
	同 東壁断面ヨコカス堆積部分 (北西より)	同	完掘状況 (北東より)
PL. 6	昆布山谷地区第6地点S X20全景 (北東より)	同	西壁断面 (南東より)
	同 S X20階段状構造 (南東より)	同	北端部完掘状況 (東より)
PL. 7	昆布山谷地区第7地点SX21・22全景 (南東より)	PL.20	豊栄神社地点8 トレンチ完掘状況 (南西より)
	同 SX22・23全景 (北東より)	同	完掘状況 (北東より)
	同 SX22全景 (北東より)	同	北半部西壁断面 (東より)
	同 SX23外観 (南東より)	同	玉垣出土状況 (北西より)
	同 SX23内部 (東より)	同	南半部西壁断面 (南より)
PL. 8	宗家地区第V区調査区設定状況 (南東より)	同	石造物出土状況 (南東より)
	同 完掘状況 (南東より)	PL.21	豊栄神社地点8 トレンチ作業風景 (北より)
PL. 9	宗家地区第V区SW01全景 (北東より)	豊栄神社地点9 トレンチ西壁断面 (南より)	豊栄神社地点9 トレンチ完掘状況 (南西より)
	同 SW01東部 (北より)	豊栄神社地点10 トレンチ完掘状況 (北東より)	豊栄神社地点10 トレンチ完掘状況 (北東より)
	同 SW01中央部 (北より)	同	北半西壁断面 (北東より)
	同 SW01西部 (北より)	同	南半西壁断面 (北西より)
	同 東西断面 (南東より)	PL.22	豊栄神社地点11トレンチ完掘状況 (西より)
	同 東西断面東半 (北東より)	同	東壁断面 (北西より)
	同 南北断面南半 (東より)	同	東壁断面 (西より)
	同 南北断面北半 (東より)	豊栄神社地点12トレンチ完掘状況 (南西より)	豊栄神社地点12トレンチ完掘状況 (南西より)
PL.10	宗家地区第VI区下層確認トレンチ完掘状況 (北東より)	同	西壁断面 (南東より)
	同 SW02完掘状況 (東より)	同	南端部完掘状況 (北東より)
	同 下層確認トレンチ北壁断面 (南より)	PL.23	豊栄神社地点13トレンチ完掘状況 (南西より)
	同 下層確認トレンチ西壁断面 (東より)	同	西壁断面 (南東より)
	同 下層確認トレンチ東壁断面 (西より)	同	西壁断面 (北東より)
PL.11	宗家地区第VI区SW02構築面検出状況 (西より)	豊栄神社地点14トレンチ完掘状況 (南西より)	豊栄神社地点14トレンチ完掘状況 (南西より)
	同 SW02上面砂層検出状況 (北西より)	同	西壁断面 (南東より)
	同 SW02上面砂層検出状況 (大字し、北より)	PL.24	上市恵比須社地点全景 (東より)
	同 サブトレンチ①完掘状況 (南東より)	同	完掘状況 (南より)
	同 サブトレンチ①北壁断面 (南東より)	同	土層断面 (南東より)
	同 サブトレンチ①北壁西壁断面 (東より)	同	南部石列 (北東より)
	同 サブトレンチ①北壁東壁断面 (南西より)	同	作業風景 (南より)
PL.12	豊栄神社地点本殿・拜殿 (東より)	PL.25	昆布山谷地区出土遺物 I
	同 境内地内調査前状況 (北より)	PL.26	昆布山谷地区出土遺物 II
PL.13	豊栄神社地点1 トレンチSD01完掘状況 (北より)	宗家地区出土遺物 I	宗家地区出土遺物 I
	同 SD01南半部完掘状況 (南より)	PL.27	宗家地区出土遺物 II
	同 SD01中央部完掘状況 (南東より)	豊栄神社地点出土遺物 I	豊栄神社地点出土遺物 I
	同 北部西壁断面 (東より)	PL.28	豊栄神社地点出土遺物 II
	同 中央部南壁断面 (北東より)	同	出土瓦
PL.14	豊栄神社地点2 トレンチSD01完掘状況 (北西より)	PL.29	豊栄神社地点出土・採集瓦
	同 SD01西壁 (南東より)		
	同 SD01東壁 (北西より)		

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の位置と概要

### 第1項 石見銀山遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は島根県中央部の大田市に位置する鉱山遺跡である。遺跡の中心部は日本海から直線距離で約6kmの内陸部に位置する。遺跡の周辺には大江高山火山群の一角である仙ノ山や要害山などの海拔400～500mの山々が連なり、山間には深い谷と水系が発達している。山地から海岸に至るまでに平地は極めて少なく、銀を運んだ街道は中小の丘陵や台地、谷間

の水系の間に縫って設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が展開し、港の奥部には狭い谷が発達している。

本遺跡は16世紀から20世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ2本の街道、銀鉱石・銀の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出に至る鉱山開発の社会構造及び社会基盤施設の総体を示すこれ

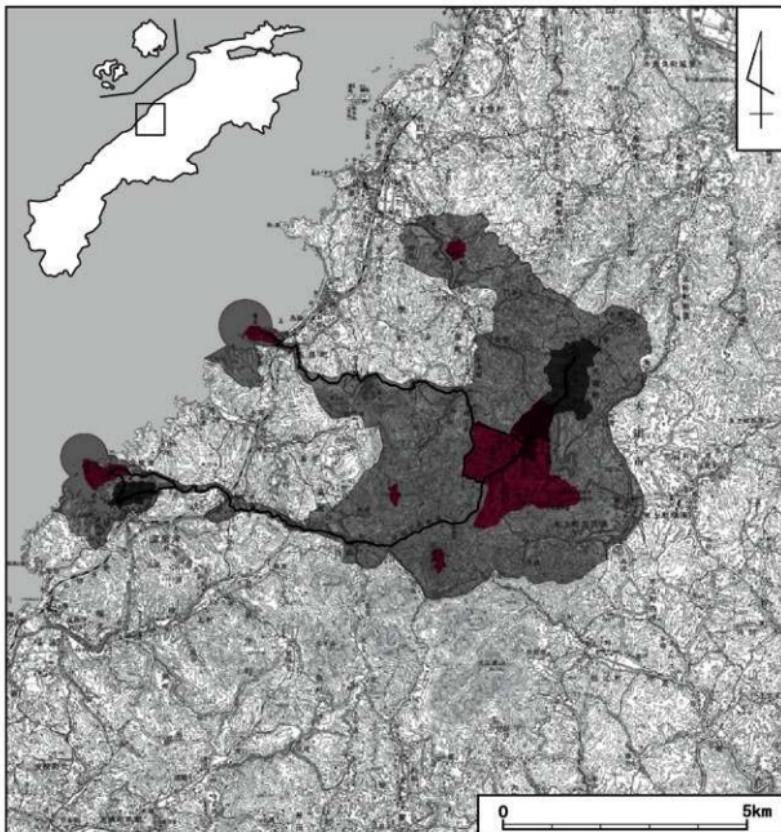


Fig.1 石見銀山遺跡位置図 ( $S = 1 / 100,000$ )

らの良好な遺跡群は、銚山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在の土地利用の在り方に伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成 19 (2007) 年にユネスコ世界遺産に登録された。

## 第2項 調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、昭和 58 (1983) 年度から昭和 60 (1985) 年度にかけて島根県教育委員会（以下「県教委」と）と大田市教育委員会（以下「市教委」）が策定した「石見銀山遺跡総合整備計画」と同時に開始された。昭和 63 (1988) 年からは県教委と市教委が共同で、平成 18 (2006) 年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8 (1996) 年度からは石見銀山遺跡総合調査が開始し、平成 14 (2002) 年にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的とした史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成 20 (2008) 年には、史跡指定面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過は Tab. 1 のとおりである。

## 第2節 平成 27 (2015) 年度の調査

石見銀山遺跡の調査研究は平成 27 年度で 31 年目となった。平成 27 年度は、昆布山谷地区と伝統的建造物群保存地区内の豊栄神社地点・宗岡家地点の発掘調査を実施した。また、伝建地区内及び世界遺産指定範囲において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘・立会調査を随時実施し、遺構・遺物の確認及び記録を行なった。

昆布山谷地区は、石見銀山の開発初期から利用が始まったとされる地域である。石見銀山の開発と居住の様相を明らかとすることを目的として、平成 22 (2010) 年から発掘調査を継続して実施しており、本年度で 6 年目となる。本年度の発掘調査は、昨年度に引き続き第 5 地点と、本年度から新たに設定した第 6・7 地点を対象として実施した。第 5 地点においては、昨年度の発掘調査によって岩盤加工遺構 (S X 02) が、江戸時代前半期には利用されていたことが明らかとなっていた。本年度は S X 02 束側にトレーナーを設定して発掘調査を実施した。発掘調査によって、硬化面

が複数検出され、江戸時代前半期において何處か地表面を貼り替えていたことや、造成などによる地形の改変が行われていたことが明らかとなった。また、造成に際してはズリが利用されていたことが明らかとなつた。S X 02 の最下部付近では、昨年度の調査で検出されていた溝状遺構 S D 02-②が平面的に検出された。第 6・7 地点は以前より地表面上に岩盤加工遺構が確認されていた地点で、本年度は遺構の内容と周辺地形の確認を目的として測量調査を実施した。

宗岡家地点においては、修理保存事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的とする発掘調査を平成 26 (2014) 年度から実施している。本年度は敷地内の南部で、主屋と離れに面した庭部分を第 V 区として発掘調査を実施した。第 V 区では現存の宗岡家住宅の構築面からは、昨年度に裏庭で検出されていた内露地や石列などの庭に面する施設の遺構は検出されなかつたが、調査区内西部に設定した下層確認トレーナーでは江戸時代初期頃の石積遺構 (S W 02) が検出された。主屋床下では、修理整備の過程において床下が露出した段階で地表面での遺構の確認を行なつた。調査の結果、床下部には宗岡家住宅が建つ以前の建物に面するとみられる礎石や石列が確認された。宗岡家住宅が建つ以前の史料には福本家と記載されたものもあり、福本家に面する遺構の可能性がある。ただし、本年度は遺構の確認までに止め、本格的な調査は平成 28 (2015) 年度に実施することとした。

豊栄神社地点では、環境整備事業に先立ち、事業に必要な情報の収集と地下遺構の確認を目的とする調査を実施した。調査により、玉垣の基礎が検出されて境内の範囲が明らかとなつたほか、本殿と拝殿の間からは幅約 1 m の石組の溝が検出され、完全に埋没して不明となっていた溝の存在も明らかとなつた。また、境内内には昭和 18 (1943) 年に発生した土石流による土砂が多く残っており、土石流により流失した石材も撤去されず、災害時の状況で残っていることも判明した。

立会・試掘調査は、本年度は石見銀山街道温泉津沖泊道沿いで、温泉津町西田に位置する上市恵比須社地点で実施した。上市恵比須社は岩盤の上に建つ社とされてきたが、今回の調査により岩盤ではなく巨大な転石であることが判明した。

Tab.1 石見銀山遺跡調査一覧表

年 度	西 历	調 査	調 査 地 点	備 考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④藏泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑤龍源寺間歩	
平成 元 年	1989	発掘調査	藏泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑥上市場	
2 年	1990	発掘調査	藏泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑫石銀千骨敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千骨敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千骨敷	
8 年	1996	発掘調査	⑬石銀藤田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑭宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑩柄畑谷、石銀藤田、⑯於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田、	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷地区	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑮本谷、町並み保存地区（阿部家、熊谷家）	
14 年	2002	分布調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区（阿部家、熊谷家）	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	分布調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区（岡家）	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区（宗岡家）	
19 年	2007	発掘調査	⑯安原谷、下河原、町並み保存地区（渡辺家）	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区（柳原家、渡辺家）、⑯清水谷製鍊所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区（杉谷家、渡辺家）、清谷水谷製鍊所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、昆布山谷	
23 年	2011	発掘調査	⑯昆布山谷、石銀、町並み保存地区（旧大住家）	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、宗岡家	
27 年	2015	発掘調査	昆布山谷、宗岡家、⑯豊榮神社	

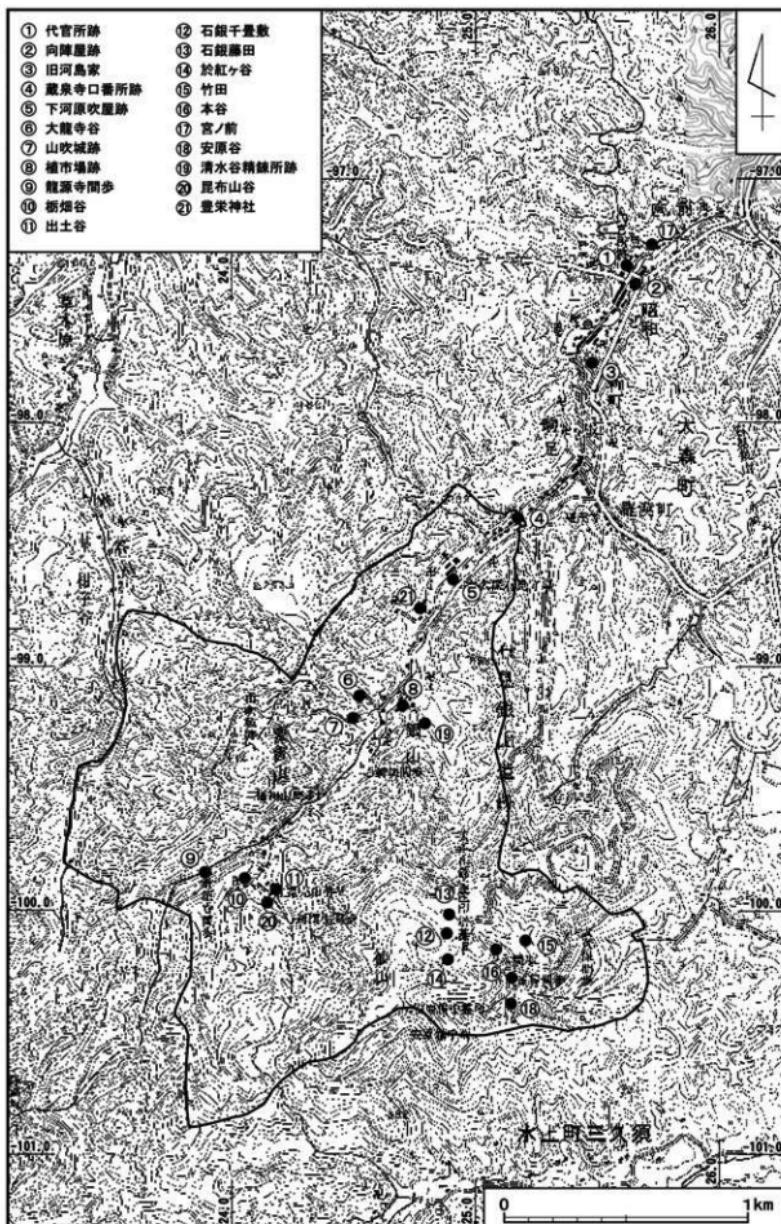


Fig.2 石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 25,000)

# 第2章 昆布山谷地区の調査

## 第1節 調査地の周辺環境

昆布山谷は仙ノ山の西側を南北方向に延びる谷である。「銀山柵内」の範囲の中では南西部に位置し、柄畠谷地区に接している。谷の入口には佐毘売山神社が所在し、谷筋や周辺の尾根上には長楽寺跡や虎岸寺跡などの寺跡や墓地が点在している。墓石には、紀年銘が天正年間（1573～1593年）まで遡るものも含まれている。

昆布山谷は石見銀山の開発当初から居住が始まっていたことが文献史料から窺え、近代においても藤田組によって開発されるなど、石見銀山開発初期から大正期の休山に至るまで継続して利用されていた谷である。これまでの発掘調査によっても江戸時代の前半期から近代に至るまで、断続的に利用された様相が確認できている。以上のように、昆布山谷は石見銀山の開発から隆盛、近代における再開発のいずれにも深く関わっており、石見銀山における鉱業活動や生活を知る上で重要な谷といえる。

## 第2節 調査の概要

### 第1項 調査の経緯と成果

昆布山谷地区の近辺ではこれまでに佐毘売山神社を挟んで東側の出土谷地区や、隣接する柄畠谷地区で発掘調査を実施しており、16世紀後半に遡る遺構・遺物や、18世紀後半の銅製錬にも関わる遺構が検出されている。昆布山谷地区の発掘調査は、平成22（2010）年度から開始し、平成27（2015）年度で6年目である。これまでに5地点の調査を実施し、谷の広い範囲で18世紀後半から近代にかけての遺構・遺物が見つかっている。平成26（2014）年度からは谷の中ほどに設定した第5地点の調査に着手し、江戸時代後半から近代にかけて利用された3棟の礎石建物が検出されたほか、調査区内の一部を深く掘り下げたところ、調査地点の西部に位置する岩盤加工遺構（SX02）が17世紀前半には利用されていたことなどが明らかとなった。本年度は昨年度の調査で一部が検出されたSX02の東側にトレントを設定して発掘調査を

行なった。また、第4地点と第5地点の中ほどに第6・7地点を新たに設定し、測量調査を実施した。

### 第2項 調査区の設定

平成27年度は第5地点（大森町二270番地1）と第6・7地点（大森町ホ359番地、ホ363番地2、ホ365番地）を対象として調査を実施した。第5地点においてはSX02の東側で、昨年度設定したI-a・c区に相当する範囲を対象とした。第6・7地点は地表面における遺構の残存状況を確認するために測量調査を実施した。

### 第3節 第5地点

#### 第1項 調査の概要

昆布山谷地区第5地点は昆布山谷の中ほどである。調査地点の南側には新横相上坑が、山道を挟んで東側には新横相間歩と呼ばれる坑口が所在する。第5地点は平成24（2012）年度から平成25（2013）年度にかけて断続的に実施した昆布山谷地区内の分布調査の際に、近代の遺物がほとんど確認できなかった地点である。加えて、現地表面上に岩盤加工遺構や石垣・礎石等の遺構が確認されていたことから、開発初期の様相までを明らかにできる可能性が考慮されたため、平成26年度から発掘調査を開始した。本年度の調査では、平成26年度の発掘調査で検出されたSX02と、造成によって形成された平坦面の様相を明らかにすることを目的として調査を行なった。

#### 第2項 層序（Fig. 5）

トレント調査により確認できた堆積状態について報告する。調査によって、地表面として機能していた面は3面確認されたが、第2面では明確な遺構は検出されなかったため、遺構面は第1面と第3面の2面である。各整地面の様相はFig. 5のとおりである。第1遺構面は4層上面である。昨年度の発掘調査で出土した遺物から、幕末まで利用されていた面とみられる。遺構としてはSB01が検出されている。第1遺構面から第2面まではズリなどを利用した造成土が約1m堆積しており、第1遺構面が形成された時期には土

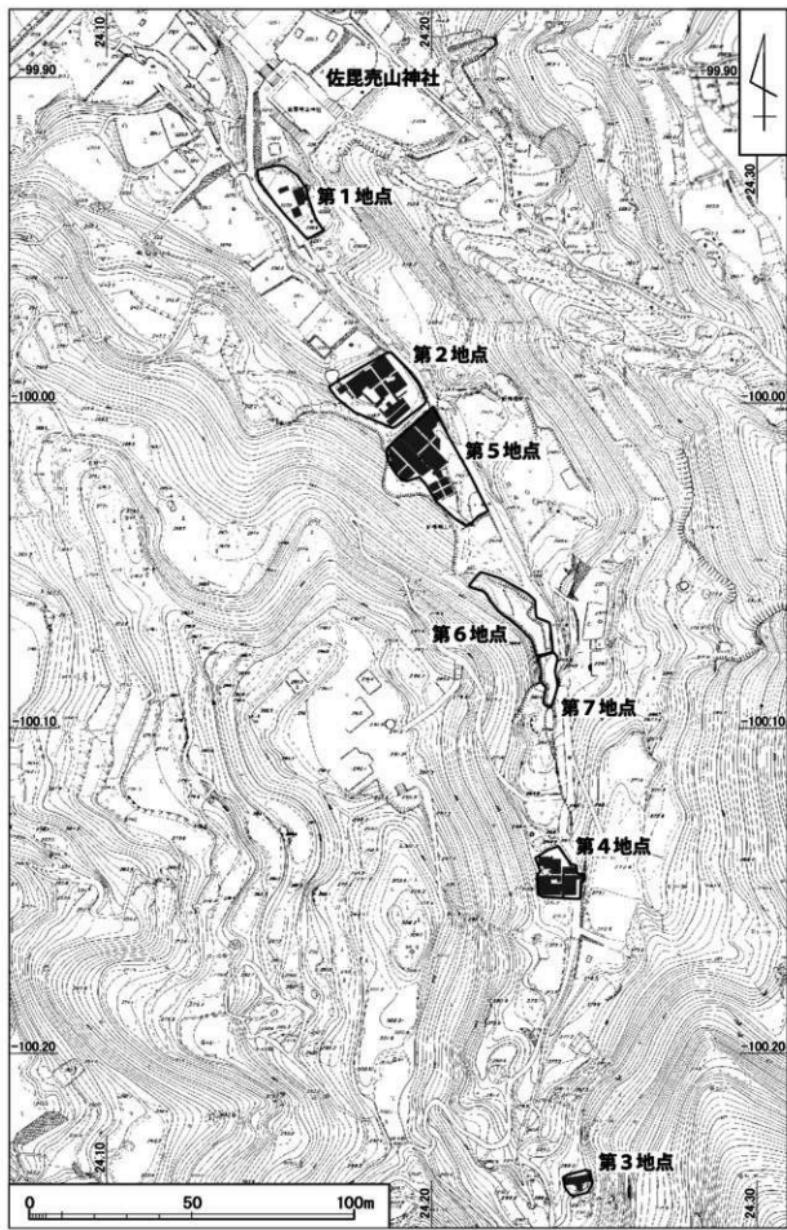


Fig.3 昆布山谷地区調査地点位置図 ( $S = 1/1,500$ )

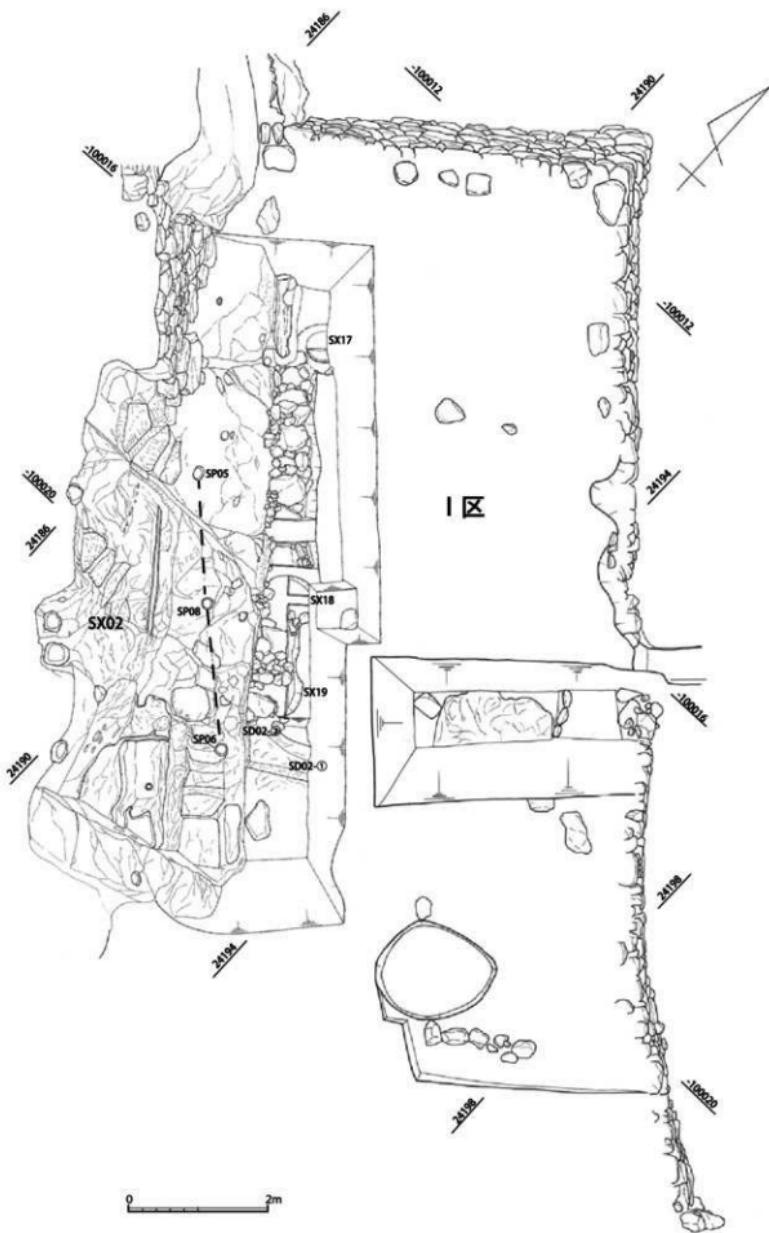


Fig.4 昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図 (S = 1 / 70)

地の大幅な改変があったものと想定される。昨年度の調査では造成土内から18世紀後半の外青磁が出土し、造成の時期を示す資料としていた。本年度の出土遺物にもそれよりも新しいものは含まれていなかったため、18世紀後半以降に造成がなされたとみられる。

第2面は第9層上面である。第9層がトレチの広い範囲で面的に検出されたことから、その上面が一時は地表面であったことが想定される。ただし、上面は硬化しておらず、明確な造構も検出されなかつたため、積極的な利用はされていなかったようである。

第3造構面は第17層上面で、第2面から20～30cm下位である。造構面上の一部には42～44層のようにユリカスとみられる堆積層があるが、第3造構面が機能していた時期に廃棄されて集積したものと想定される。また、45層や46層などの硬化面が一部にあることから、部分的な替が何度か行われていたようである。堆積層内からはコンニャク印判による文様が施された磁器碗（Fig. 7-14）が出土しており、18世紀前半頃まで利用されていたものと見られる。

### 第3項 検出造構（Fig. 4）

第5地点では、昨年度検出されていたSX02の中で調査の及んでいなかった北半部について、加工の内容や範囲が明らかとなつたほか、SX02の最下部で確認されていたSD02-②は全面に礫を蓋石として暗渠状になっていることが確認できた。第3造構面では、粘土を円形に敷いてその中に炭化物を詰めたが跡状の造構が3基検出された（SX17～19）。また、明確に造構と判断できる状態ではないが、第2面（Fig. 5、第9層）から建物の礫石の可能性がある礫が1点検出された。

以下では、検出された造構について個別に記載する。  
【SX02】

SX02は平成26年度の発掘調査によって検出された、調査区の西側にそびえる岩盤に階段や水溜め状造構、溝などが掘り込まれた岩盤加工造構である。平成26年度の調査の際に造構の南端部に下層確認トレチを設定して一部を掘り下げた結果、江戸時代の前半期には利用が始まったことが確認されていた。本年度は下層確認トレチを拡張して調査を実施したことにより、平成26年度には確認できなかつた北半部下

部の様相が明らかとなつた。また、昨年度検出されていたSP05・06の間にSP08があることが確認できた。

SX02の北半部の下位では、梁を架けるなどの機能が想定される凹み（以下、梁穴とする）がいくつか確認できたが、上位ほど積極的には加工されていなかつた。ただし、標高242.5m付近と標高243.0m付近ではそれぞれ4つと3つ以上の梁穴がほぼ等間隔で並んでおり、岩盤に沿って建物が建っていたか屋根が架けられていたことが想定される。標高242.1m付近では梁穴が等間隔で北へ続いていることが昨年度の調査によって確認されていたが、本年度の調査によりSX02の北端部まで続くことが推定できるようになった。この梁穴は、SD02-②の蓋によって塞がれることから、SD02-②が暗渠となる前に機能していたものと想定される。また、平成26年度の調査で加工された時期が問題となつた段階状造構①は、243.7m付近以下には続いていなかつことから、第1造構面に伴うことがほぼ確実となつた。SP08はSX02の標高243.5m付近で検出された柱穴とみられる円形の造構である。昨年度検出されていたSP05・06のはば中間で、SP05との距離は1.85m、SP06との距離は2.05mである。SP05・06・08は間隔や標高がそろっていることから、一連の造構である可能性が高い。

#### 【SD02-②】

SD02は平成26年度の調査により、SX02の最下部で検出された溝状造構で、岩盤に対して直行する東西方向のものをSD02-①、岩盤に沿って南北方向のものをSD02-②としていた。平成26年度の調査では、SD02-①は開渠で、SD02-②は溝の上に礫が蓋石として置かれ、暗渠状となっていることが確認されていた。本年度の調査によって、蓋石はSD02-②の全体に及ぶことが確認された。本年度の調査では蓋石が全体に及ぶことを確認する程度でとどめ、溝内部の様相については来年度調査区を拡張した際に整地層との関連を確認しながら調査することとした。

#### 【SX17～19】

SX17～19はSD02が整地などによって埋設されたのちに形成された土坑状の造構である。SX

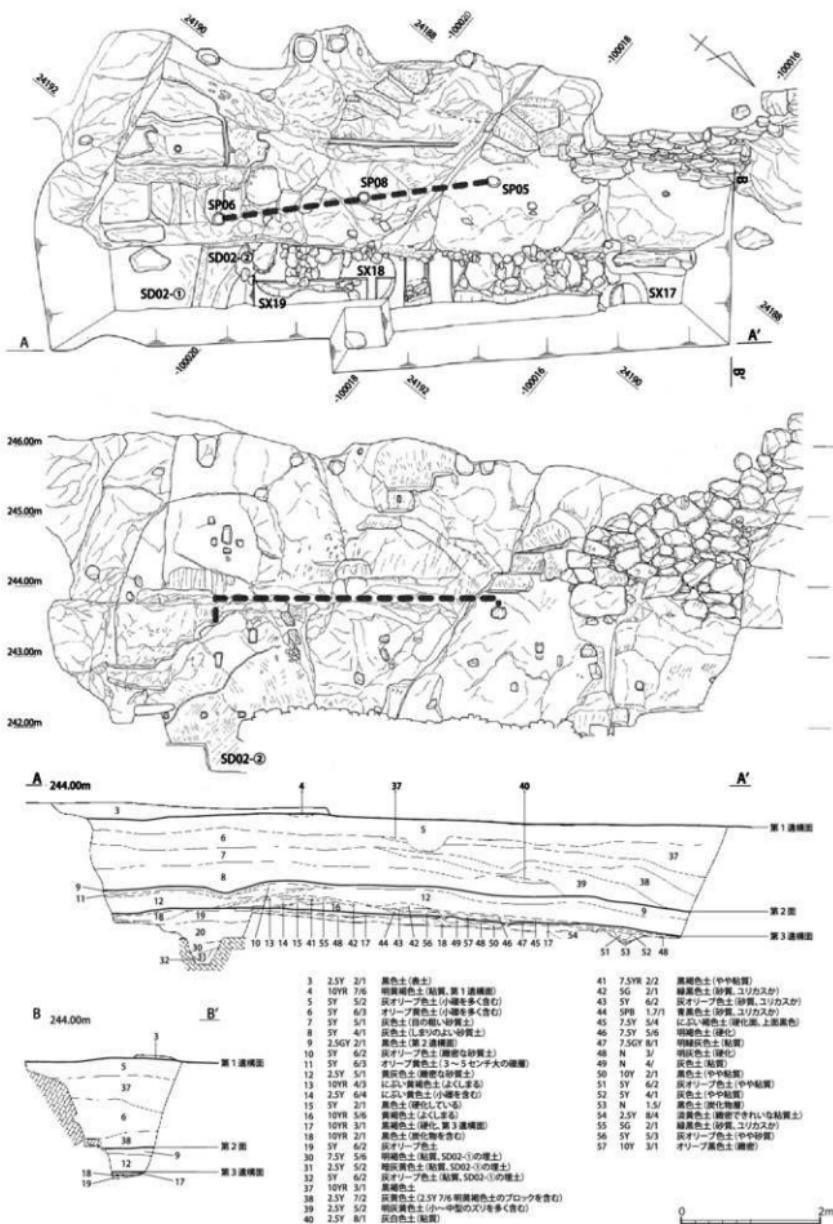
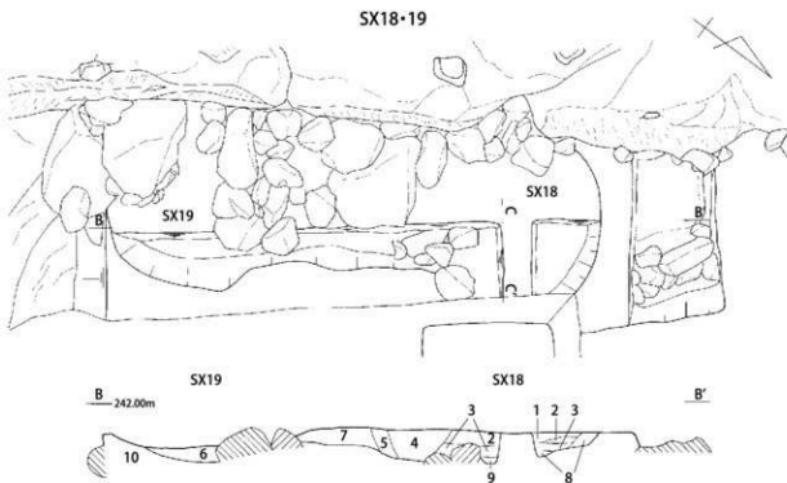
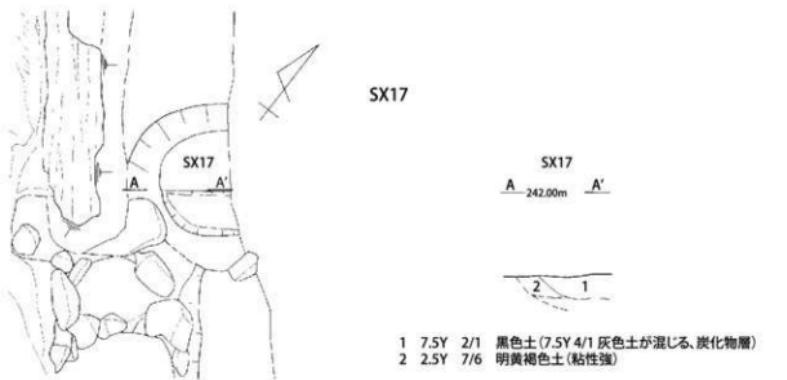


Fig.5 昆布山谷地区第5地点I区平面図・立面図・断面図 (S = 1 / 70)



<b>C-C'</b>	242.00m	<b>C'</b>
3	2	9
1 N 1.5/	黑色土(炭化物層)	
2 SPB 3/1	暗青灰色土(炭化物を多く含み、N 8/白色粒子を含む)	
3 2.5Y 3/1	黒褐色土(炭化物を含む)	
4 SY 3/1	オリーブ黒色土(オリーブ黄色土を含み、炭化物を含む)	
5 2.5Y 8/3	淡黄色土(粘性強)	
6 N 2/	黒色土(炭化物層)	
7 SY 8/3	淡黄色土(砂質と粘質が混じる)	
8 2.5Y 8/2	灰白色土(粘性強)	
9 SYR 5/6	明赤褐色土(燒土)	
10 SY 7/2	灰白色土(火を受けて変質)	

0 1m

Fig.6 昆布山谷地区第5地点 S X 17・18・19 平面図・断面図 (S = 1 / 20)

17は下層確認トレンチの北端部で検出された。東半が調査範囲外のため全体は検出していないが、直径約25cm、深さ約10cmの円形の遺構である。厚さ約10cmで碗状の明黄褐色粘土質の中に炭化物を多く含む黒色土が詰まっている。また、遺構の周囲は被熱し、変色していた。

S X 18は下層確認トレンチの南部で検出された。S X 19との境が分かりにくいが、円形とするならば直径約60cm、深さは約10cmである。皿状の灰白色粘土の中に黒色の炭化物層と炭化物の混じる粘土層が詰まっていた。S X 18の下には被熱痕があり、火を使用した活動に伴う遺構とみられる。炭化物層内からはカラミや炉壁が出土していることは、炉跡の可能性を示している。出土したカラミには銅が酸化した錆跡を吹いているものも含まれていた。

S X 19はSD 02-②の南端部で検出された。やはりS X 18との境が判然としないが、平面形及び断面形より、直径80cm程度とみられる。被熱による変色が見られる灰白色粘土を皿状に敷き、その中に粘土質土と砂質土の混じった淡黄褐色土と炭化物が詰まっていた。また、周囲の炭化物層からはカラミや炉壁が出土した。検出状況や周囲で出土した遺物から、炉跡の可能性がある。

S X 17～19は先述したように、SD 02-②が整地によって埋設された後に形成された遺構で、SD 02-②の蓋石の直上に位置する。S X 17～19の機能については、粘土を敷いてその中に炭化物を詰めるといった検出状況や、埋土やその周囲からカラミや炉壁が出土したことから製錬炉の可能性が高いが、今年度は評価を保留しておき、来年度の課題としたい。S X 17～19はいずれもSD 02-②蓋石の上に構築されていることから、火を扱う際に溝による防湿効果を狙って構築された可能性も考えられる。

#### 第4項 出土遺物 (Fig. 7・8、Tab. 2)

##### 【陶磁器類】

1はSD 02上の整地層から出土した肥前陶器の呉器手碗である。外面の広い範囲が被熱し、断面にはススが付着している。器形より17世紀後半に比定できる。

2は第3遺構面の堆積層から出土した、内外に灰釉

が施された肥前陶器の碗である。器形より、17世紀後半頃に比定できる。

3～13は第1遺構面と第2面に挟まれた造成土内から出土した。4・8は肥前陶器である。4は皿で、内外に灰釉が施されているが、底部は露胎し、三日月高台を持つ。8は内外に灰釉が施され、内面見込み部に砂目があり、外面底部に重ね焼きした際の砂が付着している。9は瀬戸・美濃で、内外に褐釉が施されているが、全体に被熱して色味が変わっている。底部付近は露胎している。7は小型の香炉である。外面体部と頸部に灰釉が、口縁部に銅緑釉が施されているが、内面には釉がかかっていない。肥前陶器の可能性がある。頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外側へ水平に開く。13は関西系陶器の碗である。胴部が外側にやや張る器形で、内外に透明釉が施されている。4・8は17世紀初頭に、9は17世紀から18世紀に、7・13は18世紀後半にそれぞれに比定できる。3・6は肥前磁である。3は内外に青磁釉が施され、外面底部には蛇の目釉剥ぎがみられる。高台と体部の繋ぎ目付近が竹節状になっている。器形が筒状のため、火入れとみられる。6は碗である。残存部分のみではあるが、團線が口縁部外面に1条、口縁部内面に2条、体部内面下部に2条ある。体部外面の中央部には算木文があり、体部下部にも文様があるが欠損により判別できない。3は17世紀後半、6は18世紀後半に比定できる。5は白磁である。口縁部が外側に反する器形で、端反碗E-1類に相当する。10は関西系陶器の碗で、内外に暗緑褐色の灰釉が施されている。12は在来系陶器の皿で、内面に橙褐色の長石釉が施され、外側は口縁部付近を除いて露胎している。11は備前の壺・甕である。

14は第2面の整地土層内 (Fig. 5、9層) から出土した、肥前磁器の碗である。器形は高台から上方にほぼまっすぐ伸びている。内外に透明釉が施されているが、高台の脛付けは釉剥ぎされ、重ね焼きをした際の砂が付着している。外面には高台と体部のつなぎ目の内外に1本ずつ、体部最下部に1本團線が引かれ、体部中央にコンニャク印版による鶴と松が交互に配されている。また、高台内にも文様が見られる。時期は18世紀前半に比定できる。

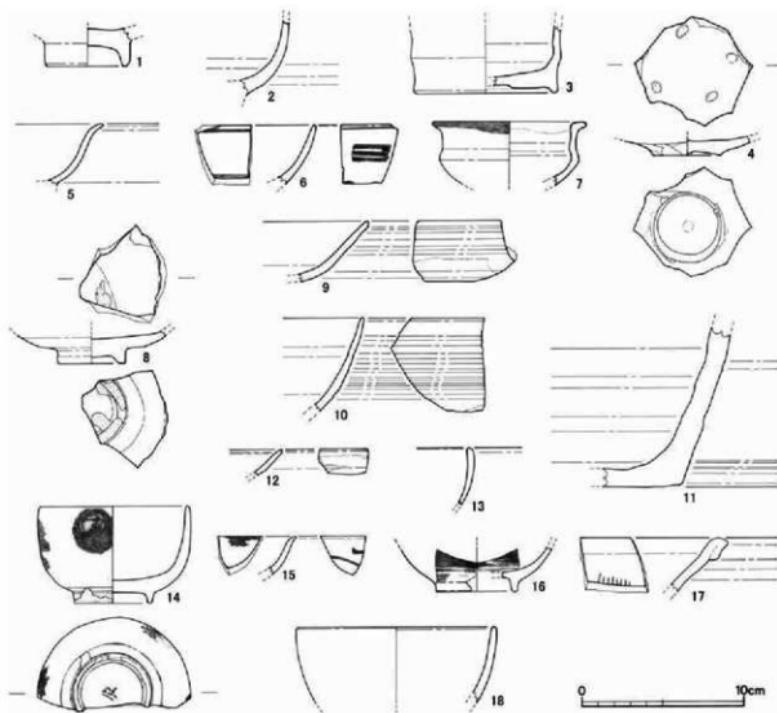


Fig.7 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図 I (S = 1/1, 1/2, 1/3)

Tab.2 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	S D 02	肥前陶器	碗		(2.4)	5.0	長石釉		
2	I a区 第3面直上 I a区 第5面直上	肥前陶器	碗		(4.6)		灰釉		
3	I a区 5層	肥前磁器	火入れ?		(4.2)	(8.5)	青磁釉	蛇の目凹 形高台	有田
4	I a区 6層	肥前陶器	皿		(1.2)	4.2	灰釉	胎土目	
5	I a区 6層	白磁	碗		(3.8)		透明釉		
6	I a区 6層~37層	肥前磁器	碗		(3.7)		透明釉		
7	I a区 6層~37層	肥前陶器?	香炉	(9.3)	(3.9)		銅錫釉 灰釉		
8	I a区 6層~37層	肥前陶器	皿		(2.0)	(4.2)	灰釉	砂目	
9	I a区 37層~7層、8層	瀬戸・美濃	皿		(3.8)		褐釉		
10	I a区 37層~7層、8層	関西系陶器?	碗		(5.8)		灰釉		
11	I a区 37層	備前	壺・甕		(9.8)		赤褐色		
12	I a区 37層~7層、8層	在地系陶器	皿		(1.6)		長石釉		
13	I a区 37層~7層、8層	関西系陶器	碗		(3.5)		透明釉		
14	I a区 I c区間畔 9層	肥前磁器	碗	(8.5)	6.0	4.6	透明釉	コンニャク印判	
15	I a区 18層	肥前磁器	皿		(2.4)		透明釉		有田かも
16	I a区 18層	肥前陶器	碗		(2.7)	(5.0)	白濁釉 透明釉		
17	I a区 18層	須佐	すり鉢		(3.4)		サビ釉		
18	I a区 19層	肥前陶器	碗	(12.2)	(4.7)		灰釉		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			重量(g)	色調	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
19	9層上面	金属製品	釘	3.3	0.4	0.4	2.2		
20	I a区 6層~37層	銅製品	キセル (雁首)	5.6	1.4	1.7	9.8		
21	I a区 11層	銅製品	キセル (雁首)	4.2	1.6	1.9	9.9		
22	I a区 I c区間畔第2面直上	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.2		
23	I a区 I c区間畔第2面直上	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.0		
24	I a区 第5面直上	錢貨	寛永通寶	2.5	2.5		3.2		
25	I a区 6層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.4		
26	I a区 6層	錢貨	無文銭	1.7	1.0		0.4		
27	I a区 37層~7層、8層	錢貨	不明	2.4	2.4		2.7		
28	I a区 表土	石製品	かなめ石	38.2	35.9	14.3	26.6 kg	灰色	安山岩

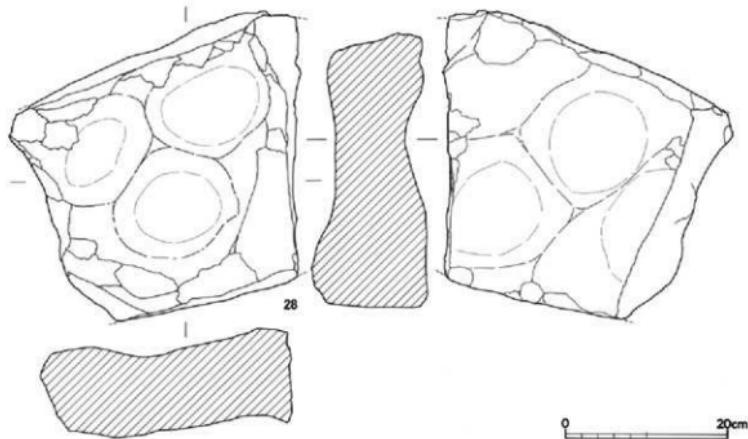


Fig.8 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図II (S = 1/6)

15～18は第3遺構面よりも下位で出土した。15は肥前磁器の皿である。外面には唐草文様が施され、内面口縁部にも染付の文様がある。16・18は肥前陶器の碗である。16は内外に透明釉または白濁釉が施され、骨付けは釉剥離されている。断面に付着物がある。18は内外に灰釉が施されている。器形は体部がほぼ垂直に立ちあがる。15・16・18は17世紀後半から18世紀初頭に比定できる。17は須佐の捕鉢で、口縁部は折り返されて外面中央に窪みを持つ。すり目は残存部では8本で1つの単位となっている。

#### 【石製品】

28は安山岩製のかなめ石である。両面にそれぞれ3つと4つの凹みがあるが、凹みの内のいくつかは途中で割られており、本来はもっと大きかったものを分割したとみられる。縁部に調整剥離があることから、分割後も形を整えて使用していたことが窺える。

#### 【金属製品】

金属製品としては鉄釘と煙管の雁首、古鏡が出土した。19は鉄釘で、断面四角形の和釘である。20・21は銅製煙管の雁首で、いずれも19世紀初め頃のものとみられる。22～25は寛永通宝で、いずれも新寛永である。25には裏面に星が1つ付けられている。26は無文鏡である。27は強く鋸びているため判断が難しいが、22～25に比べてやや軽く、中央の穴も

丸くなっていることから模範鏡の可能性がある。表面下部に「元」の部首がわずかに確認できることから、開元通宝の可能性がある。

#### 第4節 第6・7地点

##### 第1項 調査の概要

第6・7地点は本年度新たに設定した調査地点で、現地表面上で岩盤加工遺構の所在が確認されていた地点である。本年度は遺構の残存状況を確認するために測量調査を行なった。その後、岩盤加工遺構に被っていた流土を一部どけて表面の様相が見える状態にしたが、本年度は地表面上における遺構の状態を確認する程度にとどめ、トレンチなどによる本格的な発掘調査は来年度に実施することとした。

##### 第2項 検出遺構 (Fig.10・11)

第6・7地点のそれぞれで岩盤加工遺構 (S X 20・21・22) と平坦面が検出された。また、第6・7地点のちょうど中間のあたりで岩窟状遺構 (S X 23) が検出された。

##### 【S X 20】

S X 20は第6地点で検出された岩盤加工遺構である。山道に沿った岩盤の南北約10 m、高さ3 mの範囲が加工されている。現状では岩盤は道から西方へ三角形に窪んでおり、岩盤と道の間にはテラス状の広い

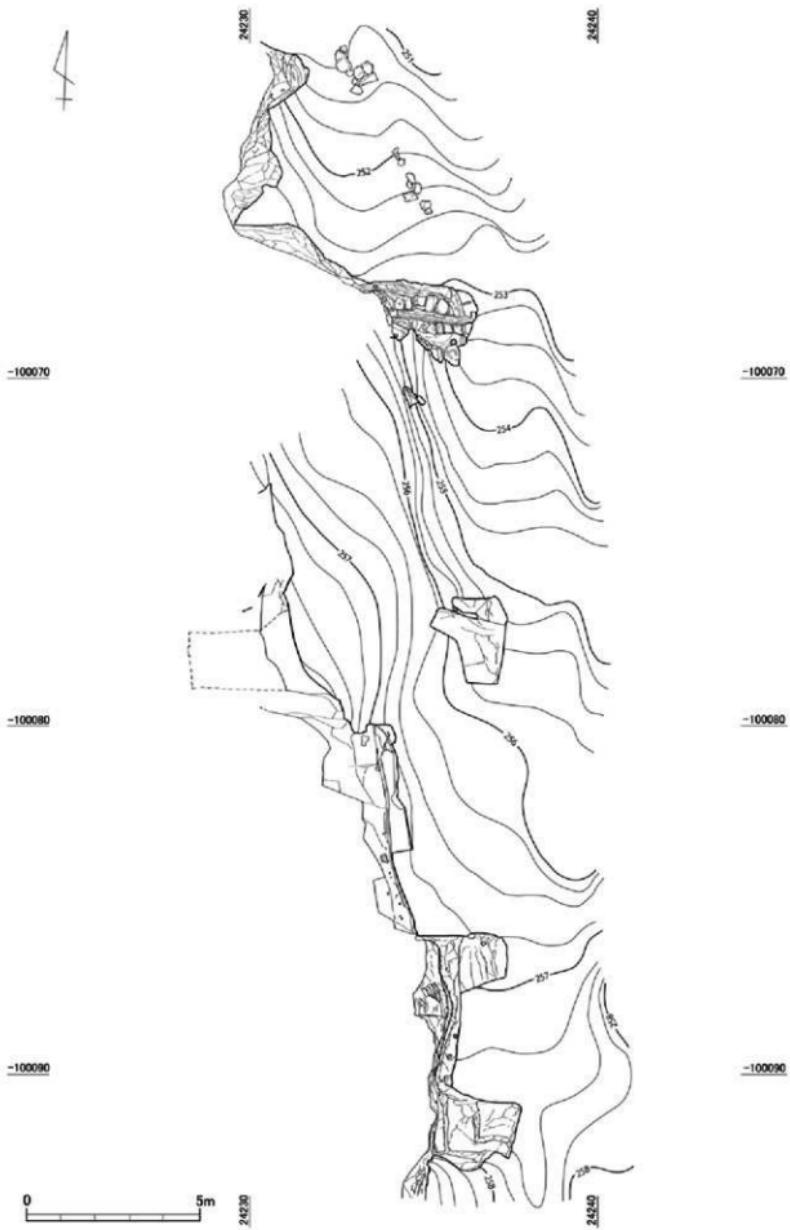


Fig.9 昆布山谷地区第6・7地点平面図 ( $S = 1/140$ )

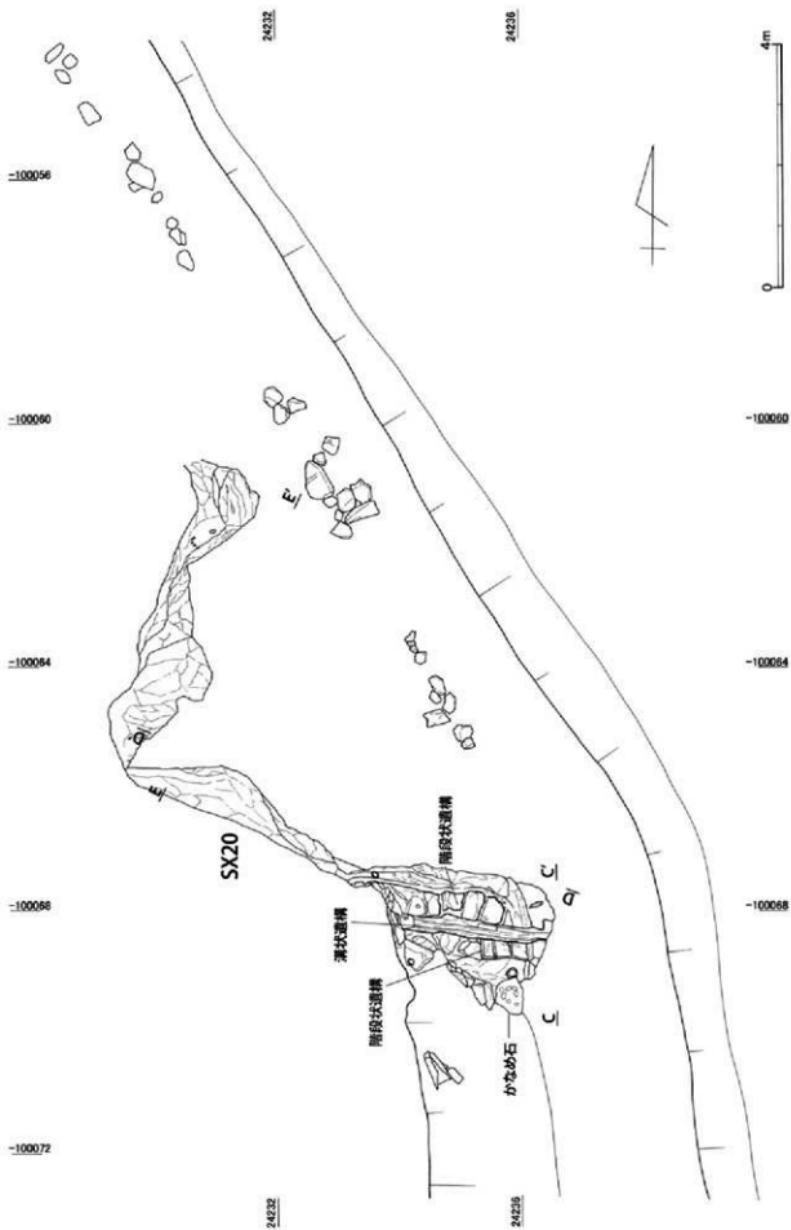


Fig.10 昆布山谷地区第6地点平面図 ( $S = 1 / 80$ )

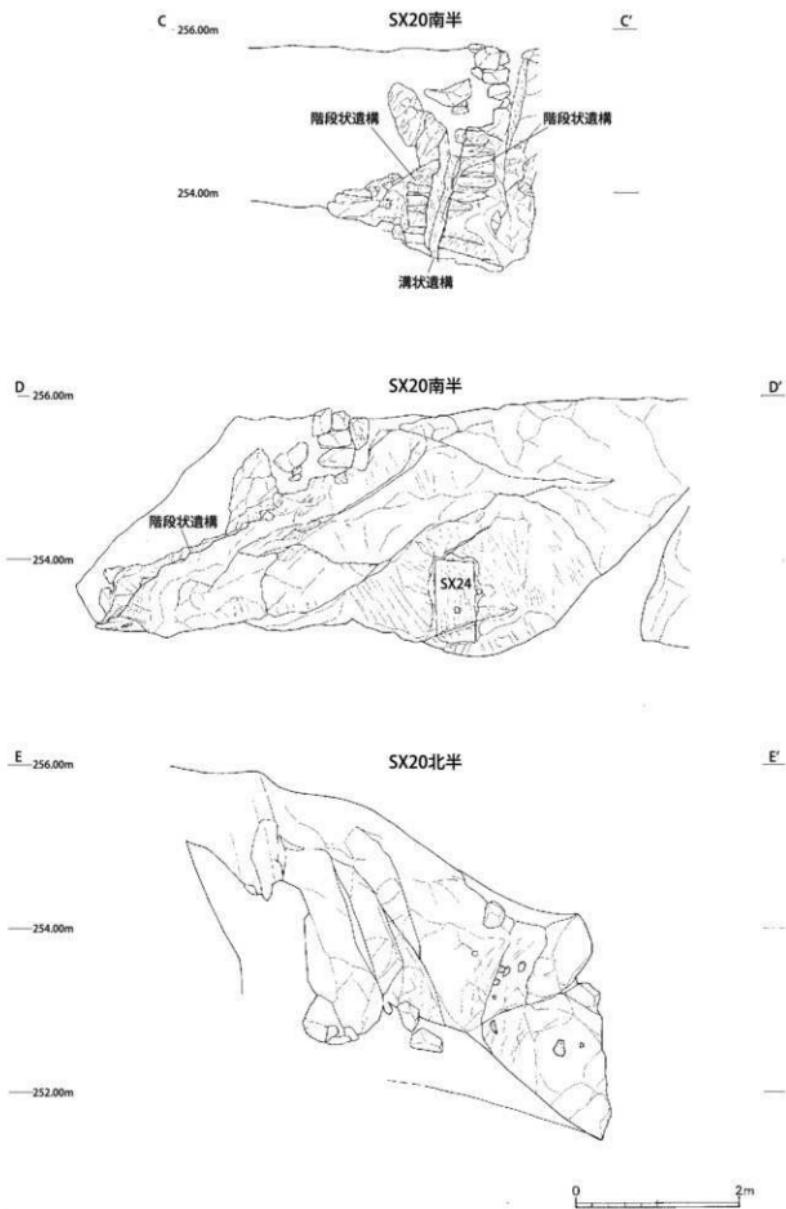


Fig.11 昆布山谷地区第6地点立面図 ( $S = 1/60$ )

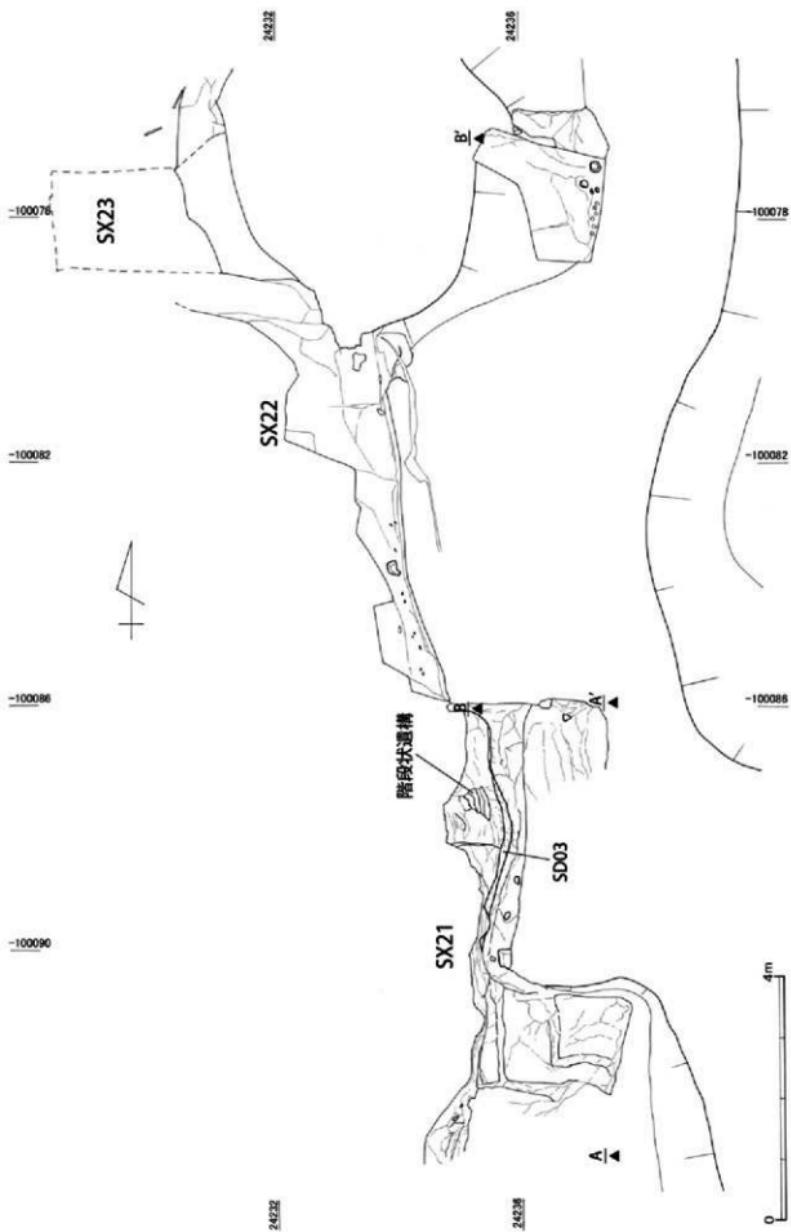
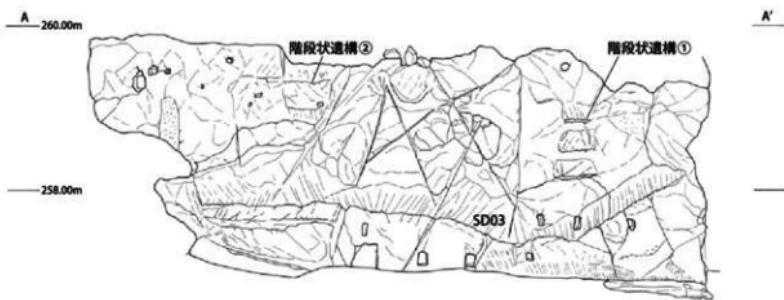


Fig.12 昆布山谷地区第7地点平面図 ( $S = 1/80$ )

SX21



SX22

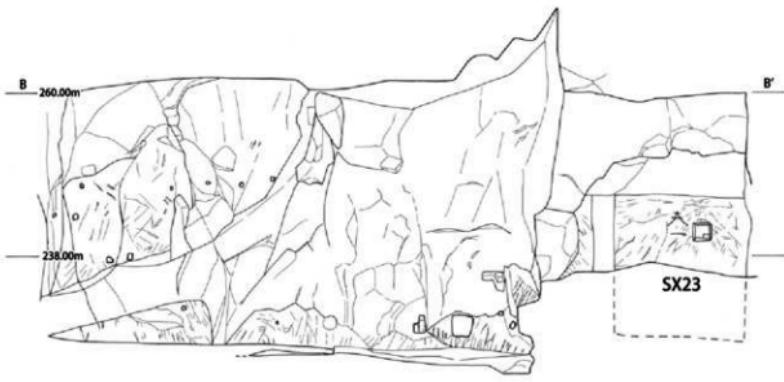


Fig.13 昆布山谷地区第7地点立面図 (S = 1 / 60)

空間がある。掘り込まれた造構としては南端部の階段状造構と、南部のSX 24以外には梁穴がいくつか確認できる程度で、SX 02や後述するSX 21に比べると少ないと少ないと。

#### ①階段状造構

階段状造構はSX 20の南端部で検出された。山道と岩盤の上の平坦面との連絡のための階段とみられる。階段の中央部には幅約30cm、深さ約30cmの溝が掘られている。溝の機能としてはSX 20上の平坦面から雨水などを下に流すためなどが考えられる。段数は溝の南側で6段、北側で8段が確認できた。ただし、東側の地表下と西側の上方斜面に未調査部を多く残すため、もう何段か延びる可能性がある。現状では1段目が標高253.2m、最高点が標高254.8mである。1段当たりの高さは10cm程度と低いが、南北とも1段目は約20cmと高くなっている。1段ごとの幅は北側が40~50cm、南側が25~30cmで、奥行は北側が30cm程度で南側が15~20cmである。北側の1段目は非常に小さく、幅28cm、奥行き18cmで、平面形は三角形である。最上部には石垣が積んである。本造構の隣接地からかなめ石が出土した。

#### ②SX 24

SX 20の南半部の標高253.0m~254.0mの範囲に加工された造構である。縦100cm、横48cmの長方形で、奥行きは約10cmである。中央やや下に約6cm四方の小さい凹みをもつ。浅く岩窟状に掘り廻めたのみで装飾等ではなく、機能は不明である。

#### 【SX 21】

SX 21は第7地点南半で検出された岩盤加工造構である。加工の範囲は道沿いの東西約7.5m、高さ約3mで、本年度の調査で検出された範囲における最低点の標高は256.7m、最高点の標高は259.9mである。掘り込まれた造構としては溝状造構(SD 03)、梁穴、階段状造構などがある。梁穴は標高257.2m付近に1辺5cm程度のものが約50cm間隔で4つと、標高257.6m付近に1辺約5cm程度のものが約40~60cm間隔で3つ並んでいる。標高259m以上にもいくつかあるが、上記の2か所のように列をなしておらず、不規則に設けられている。

#### ①SD 03

SD 03は標高257.3mから258.3mに掘り込まれた溝状造構である。全長は南北6mで、溝の幅は約20cmだが、北端部はSX 22を加工した際に壊されており、本来はもう少し長かったものと想定される。南端部から3~4.6mの範囲がやや低くなっている。ここに水を引き込むようになっていたようである。SD 03の下には引き込んだ水を温めるための施設の存在が想定されるが、本年度の調査では確認できなかった。流土や埋土によって地下に埋もれると想定されるため、来年度の調査によって所在の有無を確認したい。

#### ②階段状造構

階段状造構は2つあり、北端部から1.3m程度南に階段状加工①が、北端部から4.6m程度南に階段状加工②が所在する。階段状加工①は段数が3段で、1段目が標高258.1m、3段目が標高258.9m、1段当たりの高さは約30cmである。1段ごとの幅は40~50cmで、奥行は10cm程度と非常に狭い。階段状加工②は段数が2段で、1段目が標高259.0m、2段目が標高259.55mである。一段ごとの高さは1段目が約30cm、2段目が約25cmである。幅は50~60cmで、奥行は10cm程度と非常に狭い。階段状造構①・②はいずれもSX 21の上に位置する平坦面との連絡のための階段とみられるが、残存状況では1段あたりの幅が非常に狭くなり、実用性は疑問である。

#### 【SX 22】

SX 22は第7地点北半で検出された岩盤加工造構である。加工の範囲は東西約9.7m、高さ約4.4mで、本年度の調査で検出された範囲における最低点の標高は256.6m、最高点の標高は261.0mである。SX 21との境が積極的に加工されており、SX 21の一部を切り込んでいる。梁穴が標高258.9m付近に6つ、標高258.5m付近に2つ、標高258.0m付近に2つ掘り込まれている。左右だけでなく上下の間隔もそろっていることや、梁穴の周辺には加工による彫痕が多く残っていることも注目される。また、SX 22の東側には岩盤を削って平坦にし、一部に柱穴のある造構が検出された。

#### 【SX 23】

SX 23は、SX 20とSX 21の境で検出された、

幅1.6m、高さ1.7m、奥行約2mの岩窟状の遺構で、天井や側壁は盤で丁寧に整えられてまっすぐになっている。入口付近には発破壊の痕跡があり、爆破により崩されている。奥壁には中央やや上に文字か記号が縦に二つ刻まれており、その右側には一辺が約20cmの正方形の掘り込みがある。

### 第3項 採集遺物 (Fig.14, Tab. 3)

測量調査の過程で表採されたものについて報告する。

29・30はいずれも第7地点付近で表採された。29は肥前陶器の碗で、内外に灰釉が施されているが、底部は露胎するとみられる。器形は体部がほぼ垂直に立ちあがり、口縁部付近でやや外反する。外面体部に鉄絵による文様が描かれている。16世紀末から17世紀初頭に比定できる。30は肥前磁器の段重である。外面体部には型紙摺りによる格子と花の文様と不定型な文様が描かれている。型紙摺りを用いることやコバルトの発色から近代の資料とみられる。

### 第5節 小結

本年度は、第5地点と第6・7地点の発掘調査を実施した。調査成果としては、①岩盤加工遺構SX02の未調査範囲の大部分に調査が及び、加工の内容や時期などを明らかとするための資料が得られたこと、②SX02の最下部に位置する溝状遺構SD02-②について、北端部を除く広い範囲が検出されたこと、③SD02-②が整地などによって埋設された後、そのままから火を使用した遺構が検出されたこと、④第5地点第I区の平坦面について、整地や造成などの土地の形成に関する情報が得られたこと、⑤第6・7地点において新たに岩盤加工遺構(SX20～23)が検出されたことなどが挙げられる。

SX02は昨年度の調査では地表面に露出していた部分と、遺構の南端部に設定した下層確認トレーニングによって、加工内容の一部や利用開始時期が明らかとな

なっていた。今年度の調査では下層確認トレーニングによってSX02の大部分が検出された。昨年度調査を行なったSX02南端部分では現地表面の下まで階段状遺構が続くなど、大きく加工されていたが、本年度調査を行なった北半部では梁穴がいくつか検出された程度で、大きな加工は見られなかった。昨年度の調査で検出されていた階段状遺構①について、本年度の調査によって第1遺構面以下には続かないことが確認できた。そのため、階段状遺構①は第5地点第I区が完全に造成されたのちに加工された遺構であることが確実となった。これらの成果から、SD02や階段状遺構③などは岩盤の利用が始まった17世紀前半まで遡ることや、階段状遺構④は第I区が造成されて現在の地形が形成された18世紀後半以降に加工されるなど、SX02の中でも部分によって加工された時期が異なることが明らかとなった。

SX02の最下部で溝状遺構SD02-②の大部分が検出され、全体が暗渠状になっていることが明らかとなった。また、SD02-②が整地などによって埋設された後にも、火を使用した遺構(SX17～19)が設けられていることが明らかとなった。

第6・7地点においては測量調査の過程でSX20～23が検出された。本格的な発掘調査は平成28年度に実施することとしたが、今年度の調査によって確認できた岩盤加工遺構やその周囲の平坦面の様相から、多くの調査成果が得られることが見込まれる。特に第6地点と第7地点の中間に位置するSX23は非常に丁寧に形成された岩窟で、奥壁に何らかの彫り込みがあるなど、信仰に関わる遺構の可能性がある。

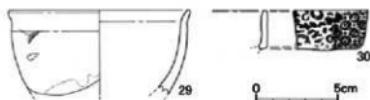


Fig.14 昆布山谷地区第6・7地点採集遺物実測図(S=1/3)

Tab.3 昆布山谷地区第6・7地点採集遺物一覧表

掲図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
29	表採	肥前陶器	碗	(11.0)	(5.2)		灰釉	鉄絵	
30	表土	肥前磁器	段重		(2.5)		透明釉		化粧用

# 第3章 宗岡家地点の調査

## 第1節 調査の概要

### 第1項 調査地の周辺環境

宗岡家地点は大森の町並みでも南方に当たる駒の足地区にあって、表通りに東面する。宗岡家は江戸初期の銀山役人を代表する一人である宗岡弥右衛門を初代として、代々組頭を務めた家系であるが、6代目の宗岡喜三兵衛が寛政2(1790)年に銀山附役人を罷免されて大森を離れている。現在の宗岡家住宅は、宗岡家の8代目宗岡長蔵が文政6(1823)年に同心として再雇用されて川本村(現在の邑智郡川本町)から大森に戻ってきた頃に、阿部半蔵より購入して居住していた住居である。嘉永3(1850)年頃に作成された可能性がある家相図が残っており、この頃に改修が行われて現在の姿になったと想定される。宗岡家住宅には近年まで子孫の方が居住されていたが、平成16(2004)年に大田市に寄付されている。主屋が道路より控えた位置に建てられるという、大森の武家屋敷の典型的な構造をしており、建物自体も古相をよく残していることから、大田市の指定文化財となっている。平成18(2006)年に道路に面した空地の発掘調査を実施し、庭の施設とみられる遺構が検出されたほか、下層では17世紀初頭の遺物包含層及び遺構が確認された。また、平成26(2014)年度からは、宗岡家住宅の活用を目的とした保存修理事業にあたって、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的とした発掘調査を実施しており、平成27(2015)年度はその2年目にあたる。平成26年度の発掘調査では、家相図に記載があるものの現在は残っていない建物の基礎(SB01)や、露地や石列などの庭に関連する施設の跡、宗岡家が建てられる前に利用されていた水溜状の遺構(SX03)が検出された。SX03は遺構内の土壌の科学分析によって、便槽やゴミ穴として利用されていた可能性が提示されている。また、調査区内に設定した下層確認トレーニングにより、宗岡家を建てる際に造成が行われ、それ以前は川の自然堆積によって地形が形成されていたことが確認された。

## 第2項 平成27年度の発掘調査の概要(Fig.15・16)

平成27(2015)年度は主屋と離れに面した敷地南側の庭(第V区)を対象として発掘調査を実施した。発掘調査に当たっては第V区をa～d区の4区画に細分した。第V区は主屋と離れのいずれにも面した庭であるため、何らかの庭園連施設遺構の検出が期待されたが、第Va区南西部で築山状の高まりが確認できた他は樹木痕がいくつか検出されたのみであった。また、北端部の主屋と接する部分では主屋の基礎を据える前に据え付け穴を掘り、基礎の周囲を埋めて固めていることが確認された。第Va区北半部にて下層確認トレーニングを設定して調査をしたところ、複数の硬化面が検出され、江戸時代を通じて何度かの整地や造成が行われていたことが確認された。また、現在の地表面より約1m下では川原石を2段積み上げた石垣状の遺構(SW02)が検出された。SW02は検出された堆積層より出土した遺物から、江戸時代初期頃の遺構とみられる。機能としては敷地の区割などが想定され、現状とは多少のずれがあるものの短冊形の地割が江戸時代初期頃から踏襲されていた可能性も認められる。

## 第2節 調査の成果

### 第1項 調査の概要(Fig.17・18)

第V区は敷地内南側の、主屋と離れに面した東西約9m、南北約6mの庭で、広さは約54m<sup>2</sup>である。一間を主屋と同じ六尺五寸(1.97m)とすると、東西4間半、南北3間となる。宗岡家住宅に隣接する遺構としては雨落ち溝とみられるSD01が検出されたのみで、庭に隣接する遺構は検出されなかった。しかし、サブトレーニング①で主屋基礎の据え付け状態が確認できたほか、下層確認トレーニングでは地表面の張替や整地に伴う硬化面が複数検出された。また、江戸時代初期頃の土地区割に関わる可能性のある石積み遺構(SW02)が検出された。

### 第2項 土層(Fig.19・20)

土層の堆積状態及び下層における遺構の様相を明らかにするために第Va区北壁沿いに東西3.5m、南

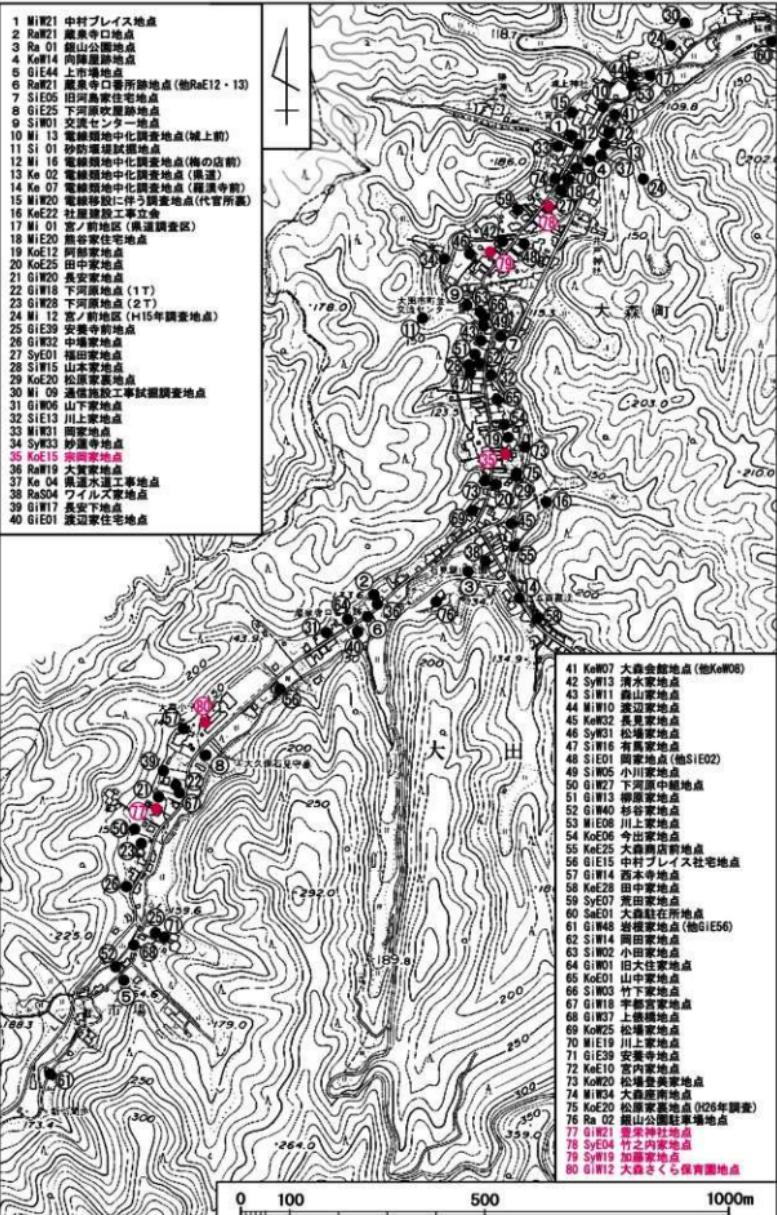


Fig. 15 大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点 (S = 1 / 10,000)



Fig.16 宗岡家地点調査区配置図 (S = 1 / 1,000)

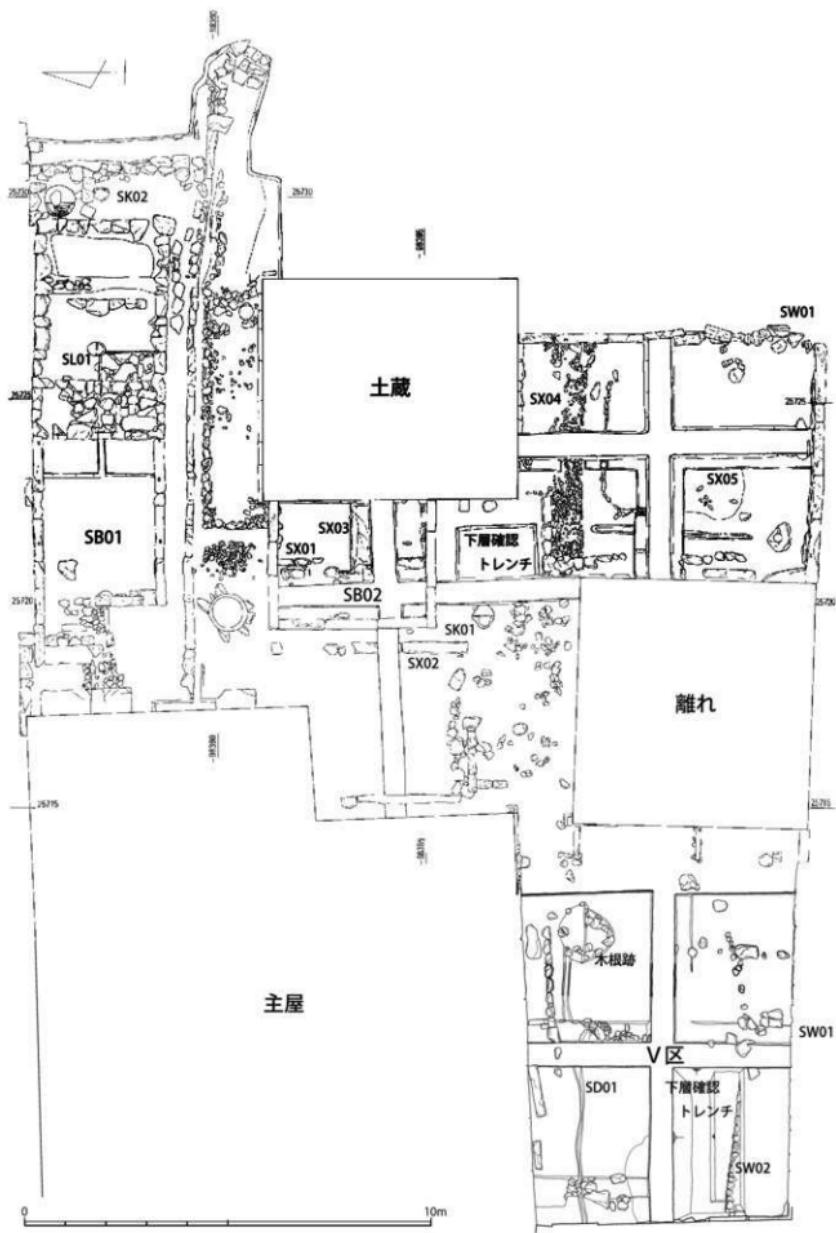


Fig.17 宗岡家地点検出遺構配置図 (S = 1 / 120)

北 1.75 m の下層確認トレンチを設定して調査を実施した。宗岡家地点では平成 18 (2006) 年と平成 26 (2014) 年に下層確認調査を実施しており、敷地内の東部と西部では堆積状況が明らかとなっている。今回の下層確認トレンチは敷地内中央部の堆積状態の確認を目的としたものである。また、第 V b 区西部におい

ても幅 30cm 程度のサブトレンチを設定して掘り下げを行なった。

下層確認により硬化面が 18 面検出され、敷地内において地表面の貼替や整地が頻繁に行われていたことが確認された (Fig.19)。これらの硬化面は 6 面を整理することができる。第 1 面は 4・5 層上面で、宗岡

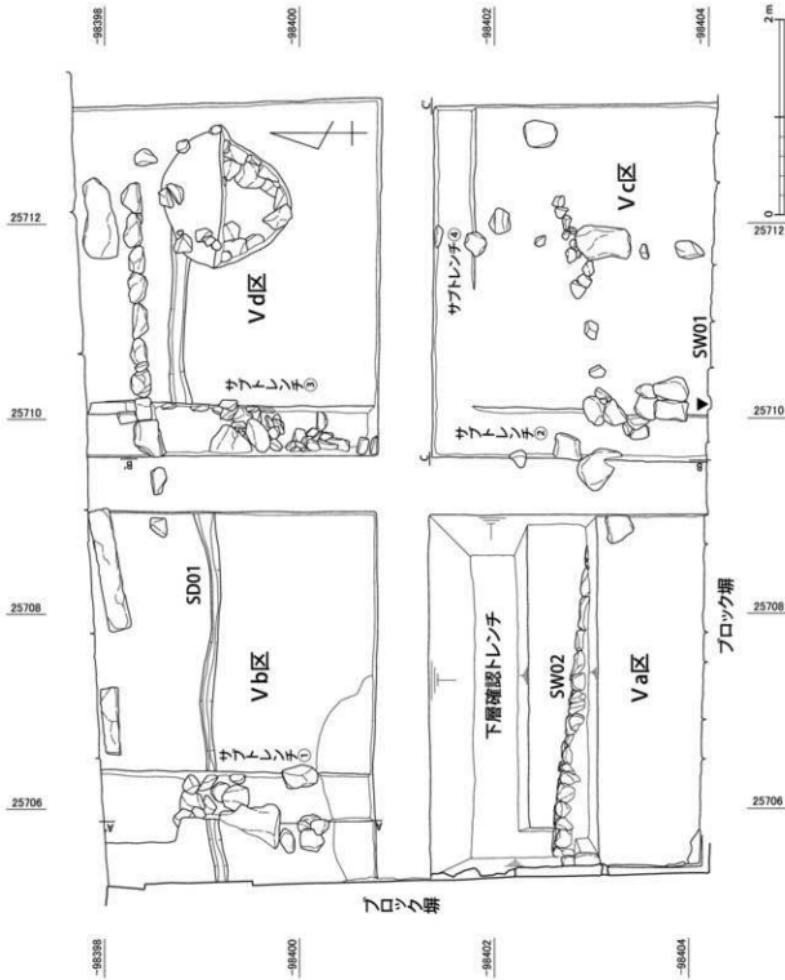


Fig.18 宗岡家地点第 V 区検出構造配置図 (S = 1 / 50)

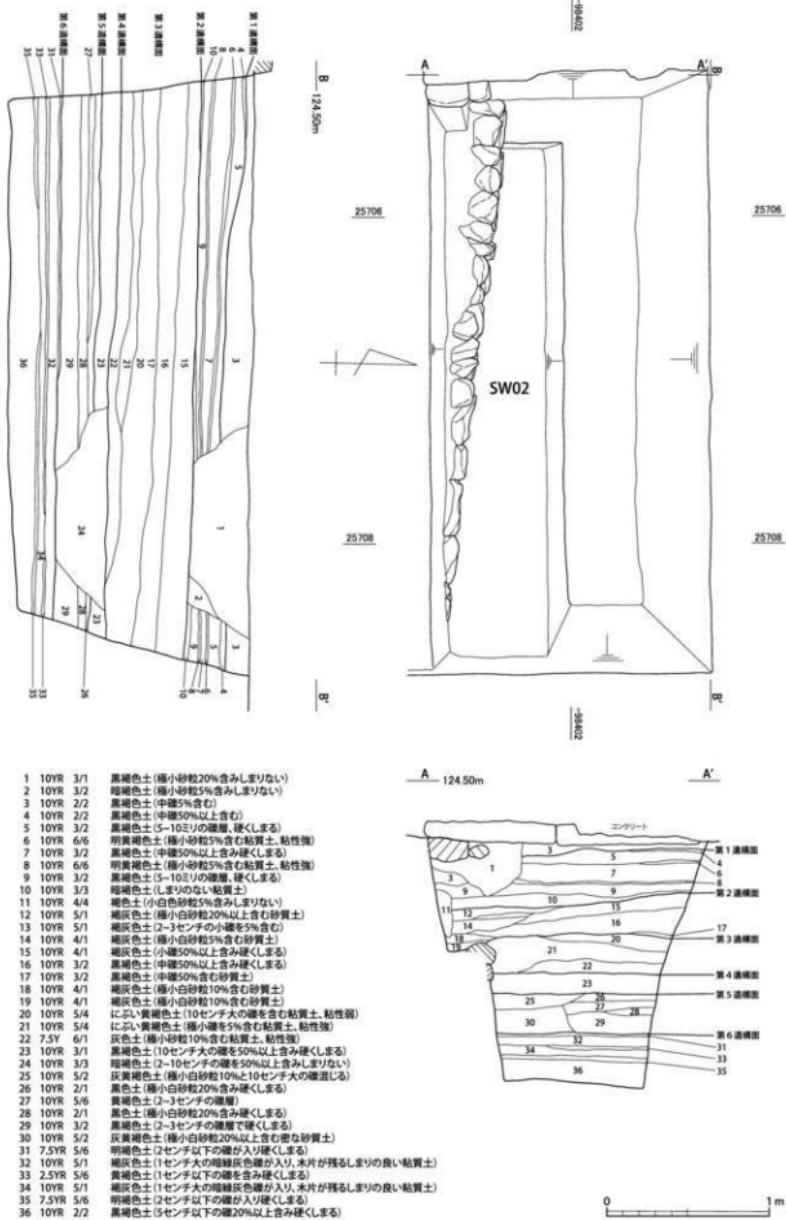


Fig.19 宗岡家地点下層確認トレーン平面図・断面図 (S = 1 / 30)

家が建てられた時期の面である。第2面は15層上面である。第3面は20・21層上面で、SW02を埋めたのちの地表面である。第3面の堆積層である20・21・22層は土色・土質共に他の堆積層とは明らかに異なっており、この時期には造成が行われた可能性が

考慮される。第4面はFig.19の23層上面で、SW02の構築面である。第5面は26層上面である。第4面と第5面の間には間層を挟んでおらず、26層上面に23層が分厚く堆積していることから、造成による堆積と判断される。第6面は31層上面である。31

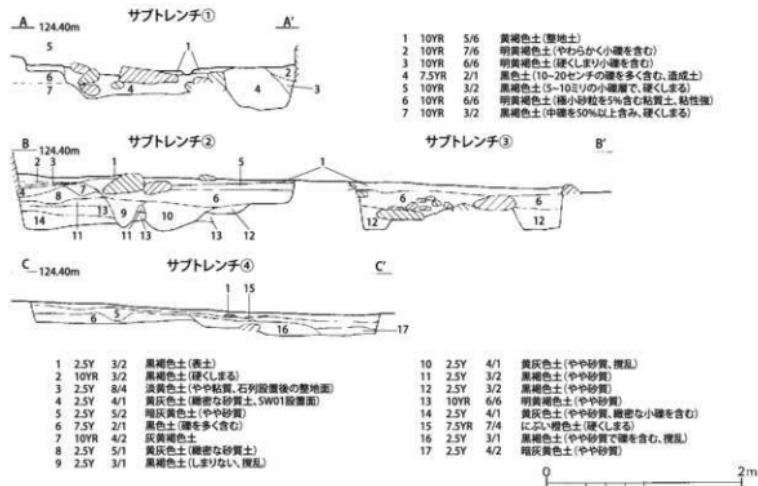


Fig.20 宗岡家地点サブレンチ断面図 (S = 1 / 50)

## SW01



Fig.21 宗岡家地点 SW 01 立面図 (S = 1 / 50)

## SW02

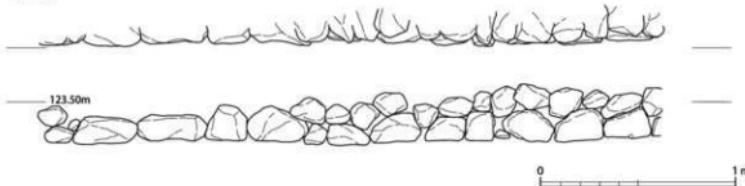


Fig.22 宗岡家地点 SW 02 平面図・立面図 (S = 1 / 25)

層から35層までは非常に固く結まる土層(31・33・35)と木片を含む粘質土層(32・34)が交互に堆積しており、道として利用されていた可能性もある。第2面から第6面までの堆積層中からは江戸時代初期頃の遺物が出土しており、割合短い期間の間に整地や造成が頻繁に行われたようである。第36層の時点でトレーナーの深さが170cmを超えたため、安全を考慮して調査を中止した。

第Vb区西端から0.6m東に、東西約0.5m、南北約2.75mのサブトレーナー①を設定して調査を行なった。断面の様相は主屋から南に2.4mまでとそれよりも南側では堆積状態が大きく異なっており、主屋から離れた部分では下層確認トレーナーで確認されたように複数の硬化面が確認できたが、主屋に近い部分では造成土が分厚く堆積していた(Fig.20)。また、宗岡家住宅主屋の基礎である延石は、第1面から造成土を掘り込んだのちに据え付け、周囲を小礫交じりの土で固めて構築していることが明らかとなった。

### 第3項 検出遺構

遺構としては溝状遺構SD01や、石積み状遺構SW02が検出された。また、昨年度IV区南壁で検出されていたSW01の続きをV区においても確認できた。

#### 【SD01】

第Vb・d区で検出された幅10cm、深さ1cm程度の浅い溝である。主屋から1m程度南に位置する。主屋屋根の真下に位置し、雨落ち溝と見られる。

#### 【SW01】

昨年度の発掘調査で第IV区南端から検出されていたSW01の続きをV区で確認できる。第IV区では凝灰岩の切石を2段積み上げ、その上に延石をのせていたが、V区ではグリ石の上に切石を一段置くのみであった。切石上面の標高は第V区西端部では124.4m、第IV区東端部では124.5mでほぼ揃っているため、第V区側が崩れているわけではない。石の大きさは、東半では幅45~75cm、高さ約40cmだが、西半では幅30~80cm、高さ約20cmと薄くなっている。切り石の表面には繋による加工痕が見られるほか、V区東端部から6つめの石には縦方向に幅12cmの溝が掘り込まれている。IV区ではSW01と庭に隣接する遺構(SX04・05)との間には30cm程度の比高差があり、構

築時期が異なる可能性が考慮されたが、V区においてはSW01の構築面と宗岡家の構築面は同一であった。

#### 【SW02】

第Va区に設定した下層確認トレーナーで、現在の地表面から約65cm下から検出された。10~30cm程度の川原石を東西方向に2段並べた石積み状の遺構である。遺構の範囲は調査区の西端から東へ約3.3mで、西方向に延びているが調査対象範囲外のため、全体の検出はしていない。遺構の上面と構築面の比高は25~30cm程度と、石垣としては低い。積み石は東半が1段で西側が2段になっているが、東側の検出時に堆積層中から川原石がいくつか出土していたことなどから、本来は全体が2段になっていたものと考えられる。表面及び崩落部の観察から裏込め石ではなく、南側から一続きに構築されている。機能としては土地や屋敷地の境などが想定される。また、Fig.19には反映されていないが、調査時にはSW02の上に自然堆積による細かい砂層が確認されており、洪水等により崩された可能性も考慮される。検出面前後の堆積層からは江戸時代初期の陶磁器が出土しており、遺構の利用時期を示すものとみられる。

#### 第4項 出土遺物 (Fig.23, Tab. 4)

31・32はかく乱部から出土した遺物である。31は肥前陶器の碗で、内面に灰釉が施されているが、外側底部は露胎する。内面に胎土目がある。32は青花皿の底部である。

33~36は表土直下から第4層までに出土した。33は在地系陶器の壺で、内外に長石釉が施されているが、内面の口縁部より下は露胎する。また、口唇部と内面の体部と口縁部の繋ぎ目は釉剥ぎされている。外側には嵌入が見られる。口縁部は内外にやや膨らみ、口唇部を平坦にしている。口唇部外側には面取りが施されている。34は肥前系磁器で、端反碗の蓋とみられる。外側にはコイと水草の文様が、内面見込み部にも文様がある。35は肥前磁器の仏飯器とみられる。外側中央に一条の圓線が引かれ、圓線から口縁部の間に唐草文と花の文様が施されている。36は肥前陶器の皿である。底部は露胎し、三日月高台を持つ。内面に砂目がある。33は江戸時代後期、34は19世紀前半、35は18世紀前半、36は17世紀前半にそれぞれ比

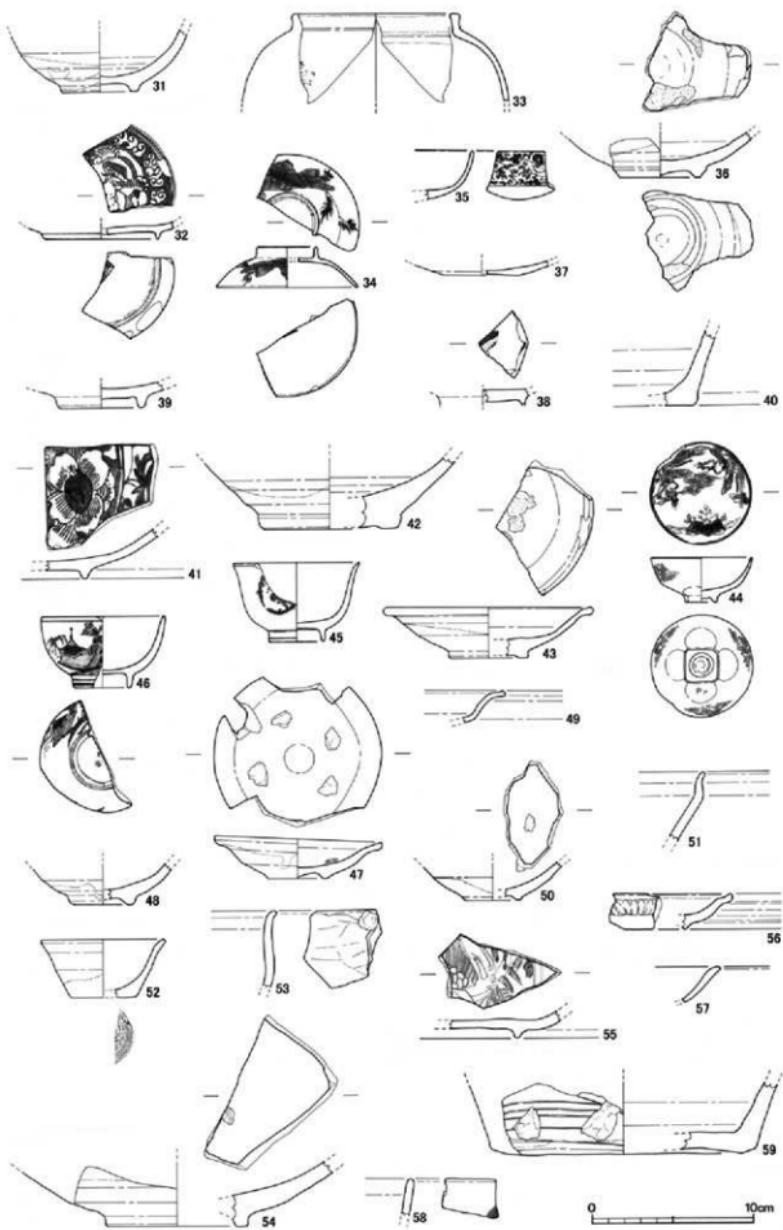


Fig.23 宗岡家地点出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

Tab.4 宗岡家地点出土遺物一覧表

捕団 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
31	V c 区 撫乱	肥前陶器	碗		(3.8)	(4.6)	灰軸		
32	V a 区 撫乱	青花	皿		(1.0)	(6.8)	透明軸		
33	V d 区 表土	在地系陶器	壺	(10.2)	(5.4)		長石軸		
34	V d 区 表土	肥前系磁器	蓋	(8.6)	2.5	つまみ径 (3.5)	透明軸		有田かも
35	V d 区 表土下	肥前磁器	仏飯器?		(3.0)		透明軸		有田
36	V d 区 表土直下~2面	肥前陶器	皿		(2.8)	5.0	灰軸	砂目	
37	V b 区 遺構面直上	在地系陶器	土瓶		(1.0)	(4.4)	灰軸		
38	V b 区 遺構面直上	肥前磁器	皿		(1.0)		透明軸		
39	V c 区 構築面清掃土	白磁	碗		(1.6)	(5.0)	透明軸		中国か
40	V c 区 構築面清掃土	肥前陶器?	壺・甕		(4.6)		露胎		焼成不良
41	V c 区 北半表土下縦下層	青花	大皿		(2.5)		透明軸		
42	V c 区 北半表土下縦下層	肥前陶器	鉢		(4.4)	(8.2)	灰軸		
43	V b 区 西壁サブトレ	肥前陶器	皿	(12.8)	3.2	(4.8)	灰軸	砂目	
44	V b 区 西壁サブトレ	瀬戸	小碗	6.2	2.8	2.0	透明軸	朱絵	ゴム印か
45	V d 区 西壁サブトレ	肥前系磁器	湯のみ	(7.8)	8.9	3.3	透明軸		
46	V d 区 西壁サブトレ	染付磁器	小碗	(7.5)	4.4	(3.3)	透明軸		
47	V a 区 サブトレ3面整地層	肥前系陶器	皿	10.3	2.7	3.6	灰軸	胎土目	唐人窯か
48	V a 区 6面整地層	肥前陶器?	碗		(2.5)	(3.5)	薺灰軸		
49	V a 区 8面整地層	肥前陶器	皿		(2.0)		灰軸		
50	V a 区 9面整地層	陶器	皿		(2.4)	(3.4)	灰軸	胎土目	山口・ 唐人窯か
51	V a 区 深堀T 11面整地層	瀬戸・美濃	天目碗		(4.3)		天目軸		
52	V a 区 11面下整地層	肥前陶器	小杯	(7.6)	3.6	(4.0)	灰軸		
53	V a 区 深堀下11面整地層	肥前陶器	鉢		(4.7)		長石軸		
54	V a 区 深堀T 11面整地層	肥前陶器	大皿		(4.0)	(8.6)	長石軸	胎土目	
55	V a 区 11面整地層	色絵	皿		(1.7)		透明軸	上絵付	
56	V a 区 11面下整地層	瀬戸・美濃	折縁皿		(2.2)		灰軸		
57	V a 区 11面下整地層	土師質土器	皿		(2.2)		浅黄橙色		京都系
58	V a 区 深堀T 15面下整地層	肥前陶器?	碗か鉢		(2.4)		灰軸	鉄松	
59	V a 区 深堀T 15面下整地層下	褐釉	壺		(4.4)	(16.4)	褐軸	胎土目	中国

定できる。

37～42は第1面の直上で出土した。37は19世紀の在地系陶器の土瓶で、内面に灰釉が施され、外側は露胎し底部にはヘラによる切り離し痕跡がある。39は16世紀後半から17世紀前半の白磁の碗で、骨付けが釉剥ぎされている。中国製の可能性がある。38は18世紀後半の肥前磁器で、骨付けが釉剥ぎされている。外側底部に青みが強い染付による文様がある。40は壺類で、肥前陶器の可能性がある。42は肥前陶器である。低い高台を持つ鉢で、内外に灰釉が施されているが底部は露胎する。41は青花大皿の底部である。40・42は16世紀末から17世紀初期頃、41は17世紀前半に比定できる。

47～59は下層確認トレンチから出土した。47は第5層から出土した肥前系陶器の皿で、外側は無釉で低い三日月高台を持つ。48は第10層から出土した碗で、肥前陶器の可能性がある。内外に薺灰釉が施されているが、底部付近は露胎する。49は第16層から出土した内外に灰釉の施された皿で、口縁端部が折縁になっている。50は皿で、山口もしくは唐人窯製の可能性がある。内外に灰釉が施されているが、外側底部は露胎する。47～50は17世紀前半に比定できるが、出土層位が宗家の構築面付近であることから、堆積層の時期を示すものでないと判断される。

51～57はSW 02の埋土(Fig.19、20層)から出土した。51・56は瀬戸美濃で、51は天目茶碗、56は折縁削ぎ皿である。52～54は肥前陶器である。52は小杯で、底部は無釉で糸切痕が残っている。53は鉢で、内外に灰色の長石釉が施されている。外側に玉状の付着物がある。器形より片口となる可能性がある。54は長石釉の施された大皿である。底部付近は露胎し、内側には胎土目がある。断面にススが付着している。55は色絵の皿で、内側に花の絵が描かれている。中国産の可能性がある。56は瀬戸・美濃で、内外に黄色味がかった灰釉が施されている。体部が外上方に延び、口縁部が屈曲してナナメ上方に開き、口縁端部は折縁となる。体部内面に削ぎを入れている。57は京都系土器の皿である。

58・59はFig.19の29層から出土した。58は内外に灰釉が施された碗もしくは鉢で、外側に鉄絵によ

る文様の一部がみられる。肥前陶器の可能性がある。59は中国産の褐釉の壺である。51～59は多くが17世紀前半までに比定できるが、51・56は16世紀代、59は15・16世紀頃である。

43～46は第V b・d区の西壁サブトレから出土した。43は肥前陶器の皿で、口縁部は折縁状になる。口縁の内側には細い溝がある。内外に灰釉が施されているが、外側は口縁部から体部の一部のみが施釉され、体部の大部分と底部は露胎している。内側に砂目がある。46は染付磁器の小碗である。丸い器形で、骨付けが釉剥ぎされている。圓線が外側高台に2本、高台と底部の接続部に1本、外側口縁部に1本引かれている。外側体部には山水の文様が、外側底部には「九谷」の文字が描かれている。44は瀬戸の新製焼で、内外に転写による朱絵の施された小碗である。高台は四角く成形され、四方が花弁状に丸く整えられている。外側には3力所に唐草の文様と、底部付近に「九谷」の文字が、内側には鳳凰と雲、桐の花が描かれている。45は肥前系磁器で、口縁部がやや外反した湯呑である。文様は圓線が高台の外側に1本と、高台と底部の接続部分の表裏に1本ずつ、外側口縁部に1本引かれている。体部外側には三か所に丸文が描かれている。43は17世紀前半の古い資料であるが、44～46は近代以降のものと見られる。

### 第3節 小結

本年度は屋敷地の中央部分の調査を行なった。第V区の宗家の構築面では明確な遺構が検出されなかつたことから、第IV区ほど積極的に整備されていなかつたと見られる。下層確認トレンチでは江戸時代初期頃の土地区割に関わる可能性のある遺構SW 02が検出され、江戸期における地割の変遷を考える上で重要な資料が得られた。また、複数の硬化面が確認できたことから、江戸期を通じて敷地内の造成や整地が行われていたことが明らかとなつた。

サブトレーンチ①では、基礎を据え付けた際の構造が明らかとなつたほか、主屋から2.4mを境として、堆積状態が大きく変わることが確認された。現在の宗家の敷地は、元々は福本乙兵衛と山本内蔵太の屋敷地からなっていることが要因の一つとも考えられる。

# 第4章 豊栄神社地点の調査

## 第1節 調査の概要

### 第1項 周辺環境

豊栄神社は石見銀山遺跡でも、史跡指定地と大森銀山伝統的建造物群保存地区とが重複する下河原地区に所在する。

江戸期には洞春山長安寺という曹洞宗の寺院であった。この長安寺は、毛利元就の木像を安置する寺院として長州藩とも密接な関係を持っていたが、明治2(1869)年、毛利元就に「豊栄」の神号が授与されたことにより、豊栄神社へと変遷した特異な経歴を有する。

境内は市道銀山線より西側に位置し、鳥居をくぐって参道を進むと随身門、拝殿、本殿と社殿が直線的に並ぶ。また、境内にはこれらの建物の他、灯籠、狛犬などの石造物が多数奉納されている。

現存する建造物は、慶応2(1866)年から明治3(1870)年まで当地を支配した長州藩が中心となって造営されたものである。したがって、境内地の造成から建物の建築はこの間に行われており、建築年代や、建築の経緯が判明している貴重な文化財である。

これらの建造物は、昭和18(1943)年に当地を襲った水害により多大な被害を受けたとされ、主要建物は辛うじて倒壊を免れたものの、周囲を走っていた堀や玉垣はほとんどが倒壊し、石造物も多くが流失している。その後、本格的な修理・復旧が行われないまま現在に至っている。

こうした経緯に加え、経年劣化により建造物は現在危機的な状態にあり、特に建物については深刻な倒壊の危険に晒されている。

さらに、境内地の現状は、水害により倒壊した石造物の残欠が境内に散乱しており、境内にも埋もれた石材が散見される状態である。また、境内は参道より周囲の面の方が高く、雨天時には雨水が境内に流入し、水浸しとなっていた。

こうしたことから、建物修理を含めた環境整備は、緊急性の高い懸案事項となっており、これらの保護措置の一環として、平成27(2015)年には、一時的措

置として、本殿と拝殿の屋根瓦が下ろされ、軽量のトタン屋根に替えられている。

### 第2項 調査の経緯

社殿修理及び境内地の整備は、現在事業計画が進行中で、史跡の整備事業の一環として平成28(2016)年度から平成31(2019)年度にかけて整備を実施する予定である。

この整備の実施計画を策定するに当たって、境内地の排水、流末処理等の設計する必要があり、その基礎資料として境内造成時の整地面や、排水処理施設の有無及び内容を把握する必要が生じた。

本調査は、この設計資料を得ることを主目的として計画、実施したものである。

調査はトレーンチ調査とし、調査深度は調査の目的に応じ、基本的には境内地造成面までとし、必要に応じて掘り下げを実施するものとした。

### 第3項 調査の概要

トレーンチは、参道及び社殿の中心線を基軸とし、それに直交するよう南北方向に設定した。トレーンチは当初、拝殿の南北、随身門西側の参道の南北、随身門東側の参道の南北の計6本の計画で調査に入ったが、調査の進展に伴い、随時増設・拡張を行い、最終的には14本(1T~14T)のトレーンチになった。これらの内、2Tと6Tについては、基軸線と平行の東西方向に設定して調査を行った。

トレーンチの幅は50cmを基本としたが、深掘り等により深度が深くなった2T・3T・11~13Tについては拡張を行った。特に3Tでは、検出した石組の大溝(SD01)について、遺構の内容確認を行ったため、幅2.3m以上の大きなものとなった。

今回の調査で確認した主な遺構はSD01、玉垣の基礎などである。

次節では、各トレーンチの調査成果を述べる。

## 第2節 調査の成果

### 第1項 基本層序

各トレーンチとも、表土下には昭和18(1943)年の

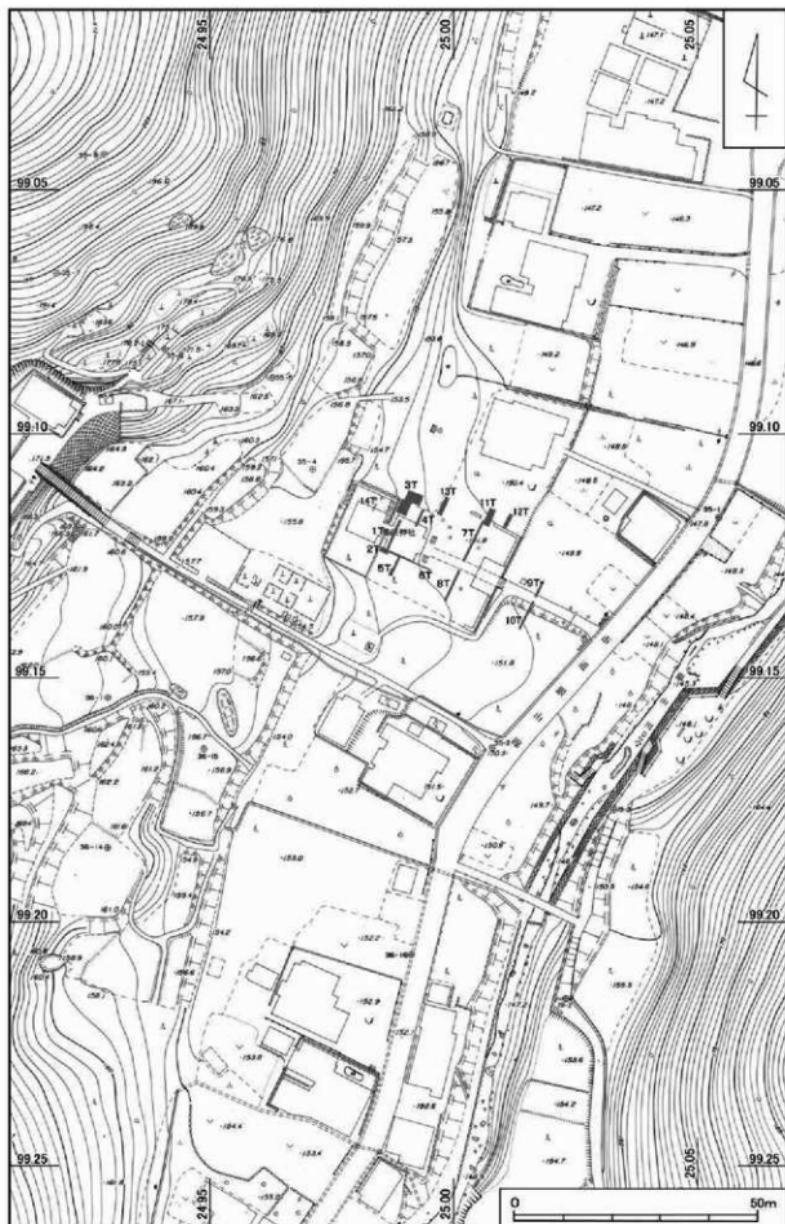


Fig.24 豊栄神社地点周辺地形図 (S = 1 / 1,000)

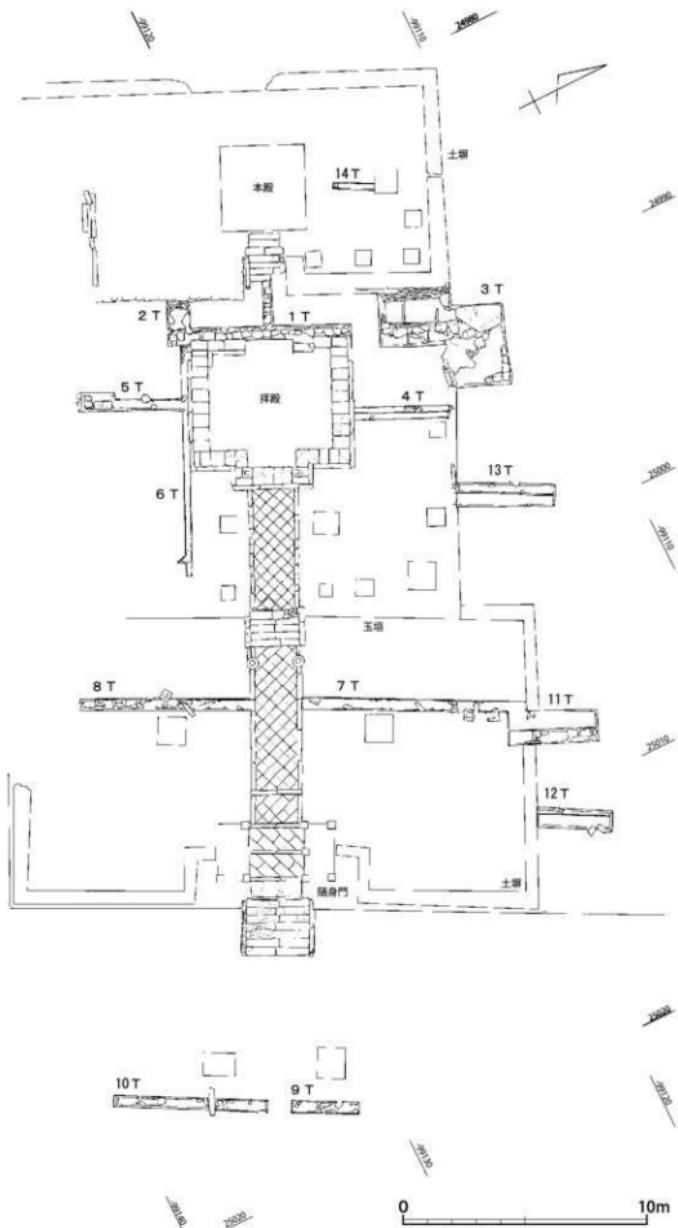


Fig.25 豊栄神社地点トレンチ配置図 (S = 1 / 200)

水害時の洪水層と考えられるオリーブ黄色土～暗灰黄色土が一樣に見られ、その直下から境内造成時の整地面が検出された。深掘りを行った 1 T～13 T では、境内造成時の整地面の下層にはさらに造成土と思われる黄褐色土や黒褐色土が検出されており、境内造成時の盛土と推定された。また、3 T では、石積みの裏込め下層より、前代の面と考えられる黒褐色土の硬化面を確認したが、確認範囲は裏込め部の一部に留まる。

今回の調査では、豊栄神社造成面の確認が主目的であったため、下層の造構確認までは行わなかったが、境内地の下層にはより古い時期の造構面が存在する可能性が高いと推定される。

## 第2項 調査成果

### 1 T・2 T (Fig.25・26)

1 T は本殿と拝殿の間に南北方向に設定したトレンドで、幅 50cm、長さ 6.5 m である。2 T は 1 T の南側で本殿と拝殿を画す石垣に向かって垂直に東西方向に設定したトレンドであるが、大溝 (SD 01) が検出されたため北側に拡張した結果 1 T と接続したので、ここではまとめて報告を行う。拡張したため 2 T の幅は 1 m、長さ 1.8 m である。

1 T では、南北方向に延びる西側に面を持つ石列が検出され、石材の下にも石が積まれていることが確認できたため、石積みと判断した。石材は 30～50cm 程度の白色凝灰岩で、四角形成は 5 角形に成形され、上下の石材は緻密に接合されている。

2 T でも、石積が検出され、本殿と拝殿を画す石垣に対応しており、両者間が石組の溝であることが確認された。この石組みは 1 T の石積みと繋がり、1 T の石積みも溝の一部であることが判明した。したがって、両トレンドで検出した SD 01 の長さは 7.5 m 以上となる。2 T で検出した部分では、溝の幅は溝上部で約 1.3 m、溝底部で約 80cm 程である。高さは東側で約 1.5 m、西側で約 80cm である。

また、検出位置が本殿と拝殿の中間で、本殿側の石段と、拝殿の石段の間を貫通しており、本殿側と拝殿側とは溝により完全に遮断されている。階段部分については、東西方向にサブトレンドを設定して掘り下げたが、本殿側の石段がさらに 2 段分検出されたものの、溝の底を確認するには至らなかった。

石積みは 2 T 部分では西側の面で 5～6 段程度積まれ、東側で 3 段積まれている。いずれも上部が破壊されており、本来の天端は失われている。ただ、1 T では石積みの天端まで確認されており、高低差から判断すると、西側の石積みはもう 1 石積んで 4 段であったと推定される。

石積みは、西側の石積みで約 75 度の傾斜で直線的に立ち上がっている。東側の石積みについては元位置を保っているのが底面から 2 石のみで正確には測れないが、概ね西側と同程度の傾斜で立ち上がるものと考えられる。

1 T で検出した SD 01 の石組みは、拝殿周囲に設置された石敷きの下層で検出されており、拝殿より SD 01 の方が先行して構築されていることが明らかとなつた。

また、石積みには一部の石材上面が断面で L 字型に削られ、水平に加工している部分がみられた。これは、玉垣の基礎を設置した痕跡と考えられ、元来は玉垣が拝殿を取り囲んで背後にまで及んでいたものと推定される。

1 T 及び 2 T の土層をみると、SD 01 上面まで大型の礫を含んだオリーブ黄色土（第 8 層）の洪水層で充填されており、洪水により一気に埋没した状況を示している。

2 T では、この洪水層内から石積みの石材も出土しており、洪水により石積みも破壊され、溝内に転落したものと考えられる。このことは、洪水により石積み上の土壠も同時に破壊されたことを示しており、洪水による被害が甚大であったことが窺われる。

2 T の底面には粘質土（第 14 層）と砂質土（第 15 層）が薄く堆積しており、溝が機能していた時期に堆積した層と考えられる。

### 3 T (Fig.25・27)

3 T は、1 T と 2 T で SD 01 が検出されたことにより、確認のため 1 T の北側 1.5 m の位置に設定したトレンドである。規模は、当初幅 60cm で、SD 01 の流走方向と直交するよう東西方向とした。

掘り下げを行うと、SD 01 の延長部が検出されたため、順次拡張を行い、最終的に南北 5 m、東西 4 m の範囲で逆 L 字型のトレンドとなった。

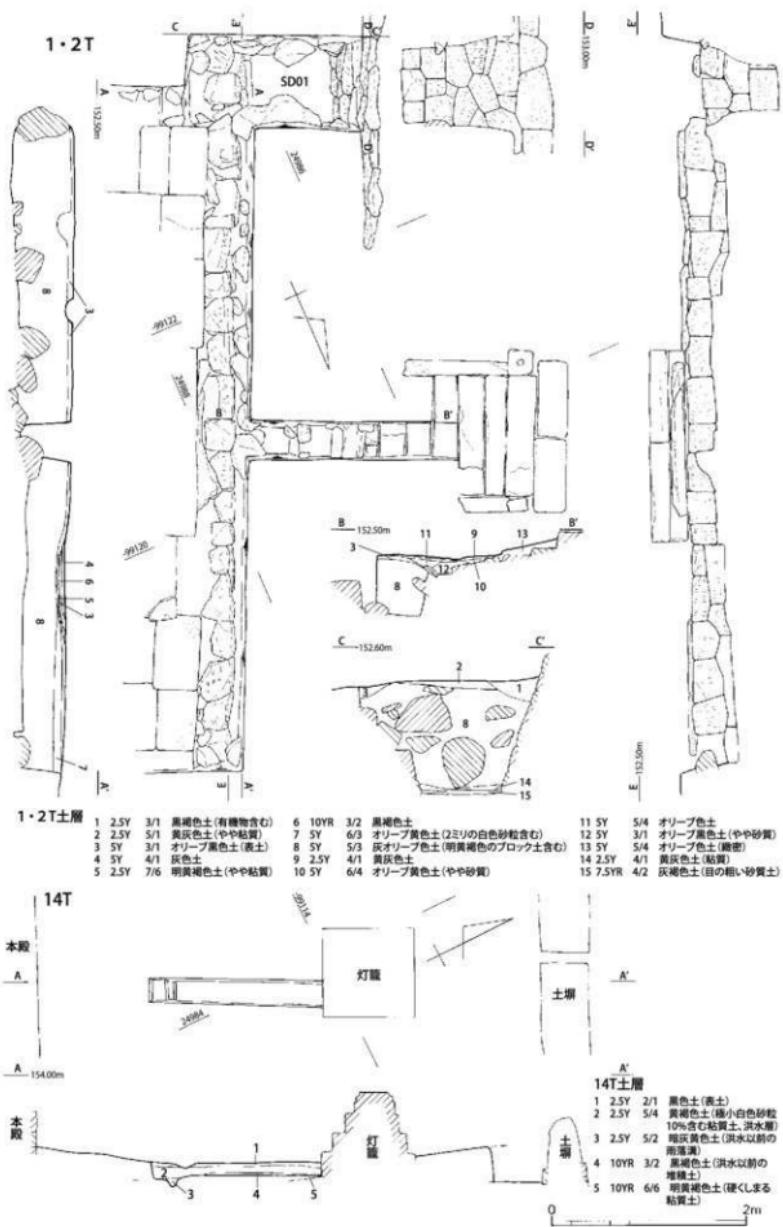


Fig.26 豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図 I (S = 1 / 50)

3 Tで検出したSD 01の石積みは、東側の面で長さ3.2mである。北端の石材はL字型に面取されており、角石（スミイシ）と推定される。さらに、北側へは石積みはが続かないことからも石積みはこの位置までで、以後は石積みを持たない溝となっている。洪水により流されたと考えられる巨石が石積み北側の溝内に転落していることから、溝自体はさらに北側に続くものと推測される。溝の幅は上面で約1.3m、底面で約80cmである。

3 Tで検出したSD 01の石積みは、西側の面が完存しており、良好に検出された。この面の石積みは土壌の基礎石（延石）まで6段積まれており、上部は土壌下の石垣となっている。このため、溝底面から天端までの高さは約2mである。

石材は1・2 Tで検出した石積み同様の白色凝灰岩で、約25～55cmの切石を四角形から六角形に加工して緻密に接合しており、各石材がずれないよう組み合わせて積み上げている。また、根石と天端石は他の石材よりやや大きいものが使用されている。また、所々には幅10cm程度の縦長の間石（アイシ）を詰めている。石材の表面には壓（ノミキリ）による加工痕が明瞭に残り、周辺部は幅の広い盤で丁寧に削って仕上げている。3 T南端部での石積み立ち上がりは78度で、直線的に積まれている。

東側の石積みは、北側部分が崩れているが、一部は天端まで残存している。この部分では4段に積まれており、天端までの高さは約1mである。石材加工状況は西側の面とほぼ同様であるが、下から2段目と3段目の接合部は直線ではなく、曲線に加工して組み合わせている。天端上面には1 Tと同じ様に断面をL字型に削って玉垣基礎を設置した痕跡が残る。石積みの立ち上がりは約75度で、西側面とほぼ同じ傾斜である。

トレンチ南端の底面を下層確認のため深掘りをしたところ、両石積み下部で胴木が検出された。太さは、西側の胴木（胴木①）で約15cm、東側の胴木（胴木②）で約10cmであった。この太さの違いは石積みの高さの違いによるものと考えられる。樹種は表面に残る樹皮から松材と思われる。胴木②については石積み北端でも検出しており、この位置で胴木も終了している。また、胴木②北端の西側では胴木を固定するた

めと考えられる杭も打ち込まれた状態で検出された。

溝底部の北側では、角石から南に約80cmの位置で溝方向と直交する丸太材が検出された。この丸太材は、残存している部分は東側のみであるが、底面からやや浮いた状態で壁面に掛けるよう設置してあった。直径は10cm程度で、樹種は棕櫚（シュロ）と考えられる。

SD 01は、角石の部分で東側に屈曲する可能性が残されていたため、調査区を東側に拡張して確認を行った。木根で不明瞭な部分が有るもの、石積みは統かず、現地表下50～60cmで硬化面が検出された。この面は洪水前の面と判断され、のことにより、SD 01は角石部分より北側については石組みを持たない溝として、そのまま北方向に流走するものと推定される。

SD 01内の堆積状況をみると、大部分を洪水層のオリーブ黄色土（第7層）で占められており、1 T・2 T同様洪水により埋没した状況を示している。第12層上面が構築当初の溝底面と考えられるが、第11層上も硬化している。上面には第8～10層が薄く堆積しており、第11層上面が洪水時の溝底面と思われる。この面は前述の丸太の上面とも一致しており、丸太によって堰き止められた土砂の上面が底面となっていたものと推測される。

東側の石積みの背後では、石積みの裏込めは見られず、石材の奥行き部分のわずかの空間のみが灰褐色土で充填されているだけで、ほとんどが第6層の造成土であった。この造成土上には灰色砂質土（第5層）の整地層が見られ、洪水直前の地表面だと考えられる。

トレンチ東側の壁面（B-B'）では、洪水層（第15・16層）の下で硬化面が検出され、洪水時の地表面と推定された。この面上の洪水層内からは灯籠の石材が出土しており、洪水により流失した灯籠の石材と考えられる。

#### 4 T (Fig.25・28)

4 Tは堆積状況を把握する目的で拝殿北側に南北に設定したトレンチで、規模は幅約50cm、長さ約4mである。

表土を除去すると、水平に整地された暗灰黄色土（第3層）の面が検出された。この層には石材や瓦が含ま

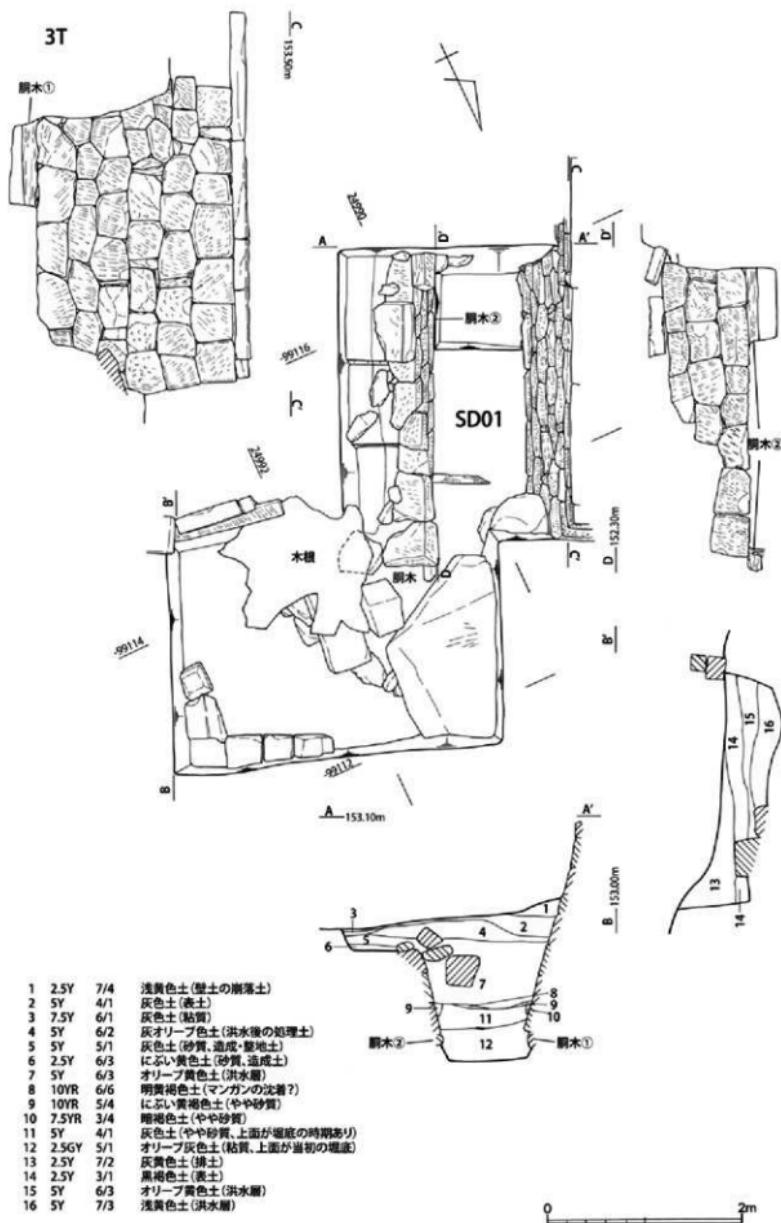


Fig.27 豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図II (S = 1 / 50)

れしており、洪水層と考えられたため、トレント西半部分の掘り下げを行った。その結果、地表から約10～15cmで硬化面が検出され、拝殿周囲の延石底部のレベルとほぼ一致したため、この面が境内造成時の面と判断した。

洪水層と考えられる暗灰黄色土については、洪水後の復旧作業で、完全には除去されないまま、石敷きが見える高さで整地されたものと推測される。

#### 5 T (Fig.25・28)

5 Tも堆積状況を確認する目的で拝殿南側に南北に設定したトレントである。規模は幅約50cm、長さ約4.5mであるが、南側において遺構が検出されたため、南側の約1.5mを幅約80cmに拡張した。この調査区は南北で高低差が大きく、調査前の比高で約50～60cm違っていた。

表土下に洪水層と考えられる黄褐色土（第2層）が検出され、その下層で硬化面が検出された。この面は4 Tで検出された造成面と同一面と考えられ、標高もほぼ同じ高さで、拝殿の延石底面とも一致する。

トレントの南端近くの境内造成面では石列が検出された。石列は南側に面を持っており、上面もほぼ平らである。石材は一辺30cm程度の方形の割石で東西方向に並べられている。

石列は、拝殿周囲の延石から距離が約4.0mと、拝殿北側に現存する玉垣の基礎石と拝殿からの距離、方向ともに一致することから、拝殿南側の玉垣基礎石と判断される。

この石列の北側では、方形に加工された石材が検出された、底部が造成面に一部埋まっており、石列と平行に設置されていることから、元位置を保っていると考えられる。石材は光石で、精緻に加工されており、表面は丁寧に仕上げられている。大きさは一辺約75cmで、境内に残る灯籠の基底石に同規模のものが存在することから、灯籠の基底石と考えられる。上面の中央付近は別の石材が重ねられるためか加工がやや荒く、鑿痕が完全には消されていない。

堆積状況を見ると、造成面はほぼ水平であるが、南に向けて高くなっている、北端部は厚さが13cm程度なのに比べ、南端部では60cm以上となっている。また、北端から約1.5m南にある転石までは上面を延

石の高さに合わせて水平にしているのに比べ、南側では南側に向かって高くなっている。このことから、水害後の復旧に当たっては、転石付近までは土砂をすき取り、水平に整地したもの、南側までは整地されなかったものと考えられる。

#### 6 T (Fig.25・29)

6 Tは、洪水層を整地した面の広がりを確認するために、拝殿南側の延石に沿って東西方向に設定したトレントで、幅約25cm、長さは約9.4mである。

西側は境内造成面まで掘り下げたが、東側は洪水後の整地面まで留めた。調査の結果、洪水層は拝殿東側の段差までほぼ水平にされていることが判明した。このことにより、洪水後の整地は拝殿の段では一定の範囲までは行われていることが明らかとなった。

#### 7 T (Fig.25・29)

7 Tは、隨身門西側の参道石脇の北側に南北方向に設定したトレントで、幅約50cm、長さ9.2mの規模である。

掘り下げの結果、地表下約15～35cmで境内の整地面が検出され、ほぼ水平に整地されていることが判明した。表土の下はほとんどが洪水層の灰オリーブ色土（第2層）によって占められていたが、拝殿周囲のように水平に整地されていることが明らかとなった。この洪水層には灯籠や玉垣の一部と考えられる石材が含まれており、これらの石材の中には地表面に露出しているものも存在する。

トレント北端は隨身門から延びる土塀に達しており、土塀の基礎石も検出された。この部分で東側に拡張を行った結果、土塀の基礎石はこの位置で途切れたり、東側に土塀の存在しない空間が確認された。

#### 8 T (Fig.25・29)

8 Tは7 T同様隨身門の西側に南北に設定したトレントで、参道を挟んで7 Tの南側にある。規模は幅約50cm、長さ約7mで、現状で南側に向かって地表面が高くなっている。

掘り下げると約10～70cmで境内造成面がほぼ水平に検出され、7 Tで検出した造成面とほぼ同じ高さであった。

表土下には洪水層の灰オリーブ色土（第2層）が堆積しており、南側に行くにしたがって厚く堆積してい

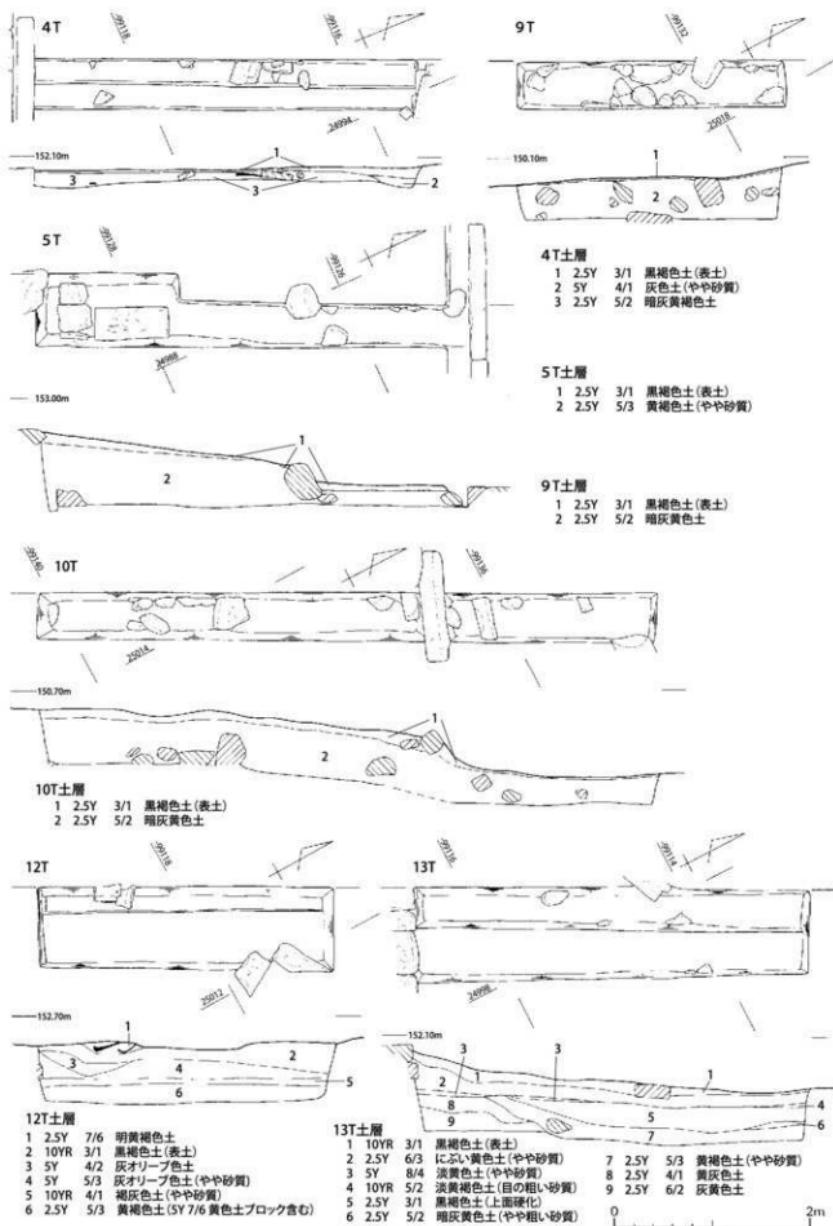


Fig.28 豊栄神社地点トレンチ平面図・断面図III (S = 1 / 50)

る。7T部分と通してみると両トレーナーとも参道に向かって傾斜しており、雨水は参道に向けて流れ込む構造となっている。これは、洪水後の復旧時に参道部分に堆積した土砂のみ除去し、周囲の土砂のすき取りを行わなかった結果と推測される。

8T内の洪水層には灯籠、玉垣の石材などが大量に含まれており、境内には相当数の石材が埋もれていることを窺わせる。

また、7T・8Tとも玉垣の石材が流入していることについて、本来の玉垣はトレーナー西側に設置されていることから、洪水による土石流は西側から流入し、石材は東方向に流されたものと推測される。

#### 9T (Fig.25・28)

9Tは、随身門東側にあたる最下段に南北に設置したトレーナーで、幅約50cm、長さ約2.8mである。現状では参道の石敷きは見られなかったため、トレーナーは現在通路となっている部分から北側に設置した。

掘り下げを行うと地表下約40～50cmで境内造成時の整地面と見られる硬化面が検出された。薄い表土の下は検出面まで洪水層とみられる暗褐色土(第2層)が堆積しており、層内には大小の礫が多く含まれている。礫は加工されたものではなく、いずれも自然石であった。

#### 10T (Fig.25・28)

10Tは、9Tの南約1mの位置に南北方向に設定したトレーナーで、幅約50cm、長さ約6.3mである。現状では、トレーナーの北端から約2mの所に段差があり、南側が約30～40cm高く、上段は南側に向かって徐々に高くなっている。

掘り下げを行うと、北側部分では約30～35cmで境内造成時の整地面が検出されたが、南側では約50～60cm掘り下げても整地面は検出されなかった。このため、この段差は造成時からのものではなく、本来は水平に造成されていたものと推定される。

表土下はすべて洪水層と考えられる暗灰黄色土(第2層)で占められ、特に南側で厚く堆積している状況が確認された。また、この層内には9Tと同様多くの礫が含まれており、ほとんどが自然石であった。

#### 11T (Fig.25・29)

11Tは、7Tの北側に設置したトレーナーである。

7Tの北端で検出した土壌の切れ目の内容確認に加え、土壌北側の排水路の有無を確認するために南北に設定したもので、規模は、幅約1.4m、長さ約3.5mである。

トレーナーの幅は土壌の切れ目を確認するために基本より広く設定しており、トレーナー東端部で土壌の基礎石が検出された。これにより7Tで確認されていたもう一方の端部との距離が約1.2mであることが明らかとなった。

掘り下げにより、洪水層と考えられる灰オーリーブ色(第5層)土の下層で境内造成時の整地面が確認された。洪水層は土壌の北側でも確認され、その下層(第6～9層上面)が洪水前の地盤と考えられる。

トレーナー東側で深掘りを実施し、堆積状況を見ると洪水前の地盤下には第9・10層の造成土が確認され、この層は土壌の下にまで及んでいることが判明した。このことにより、この造成土は境内造成時のもので、境内の造成は土壌の北側部分を含めた範囲で行われていたことが明らかとなった。しかし、排水溝は確認できなかった。

トレーナー北側では上面が平らな石が並んで検出されたが、性格については不明である。

#### 12T (Fig.25・28)

12Tは、11Tの東側約2.5mの距離に、南北に設定したトレーナーで、幅約90cm、長さ約3mである。12Tと同様排水路の確認のために土壌の北側に設けられたもので、トレーナー西側で深掘りも行った。

掘り下げを行うと、表土下には洪水層と考えられる灰オーリーブ色土(第4層)が堆積し、その下層で境内造成時の整地面が検出された。トレーナー南端では、この造成土上に土壁の基礎石と考えられる延石の端部が検出された。

深掘り部では、整地面(第5層)の下層で黄褐色土(第6層)の造成土が堆積していることが確認され、11Tと同様であった。

#### 13T (Fig.25・28)

13Tは、拝殿北側に残る玉垣の基礎石に直交するよう、基礎石に接して南北方向に設定したトレーナーである。規模は幅約1m、長さ約4mで、排水路の有無及びSD01の流走方向を確認するために深掘りも

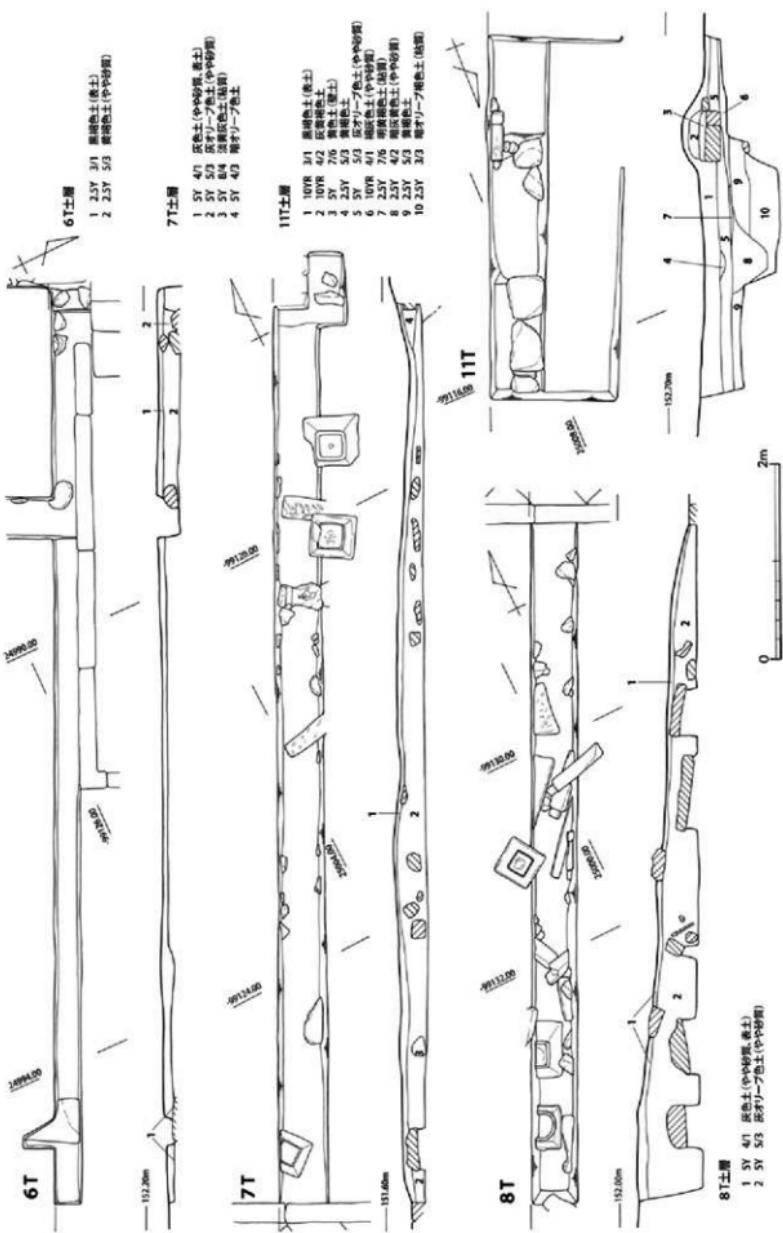


Fig.29 豊栄神社地点トレーンチ平面図・断面図IV (S = 1 / 50)

実施した。

掘り下げを行うと、表土下に洪水層と考えられる純い黄色土（第2層）が堆積しており、その下層で洪水時の地表面と考えられる硬化面を検出した。この面は玉垣南側で検出した境内の造成面と比較して約40cm低くなってしまい、玉垣の内外で約40cmの段差が有つ

たことが判明した。

玉垣北側の硬化面は面的に広がっており、排水路もSD01もこの位置では確認されなかった。このことからも、SD01は屈曲せずに北方向に直進することが再確認された。

硬化面の下層では第5～第9層を確認したが、第5

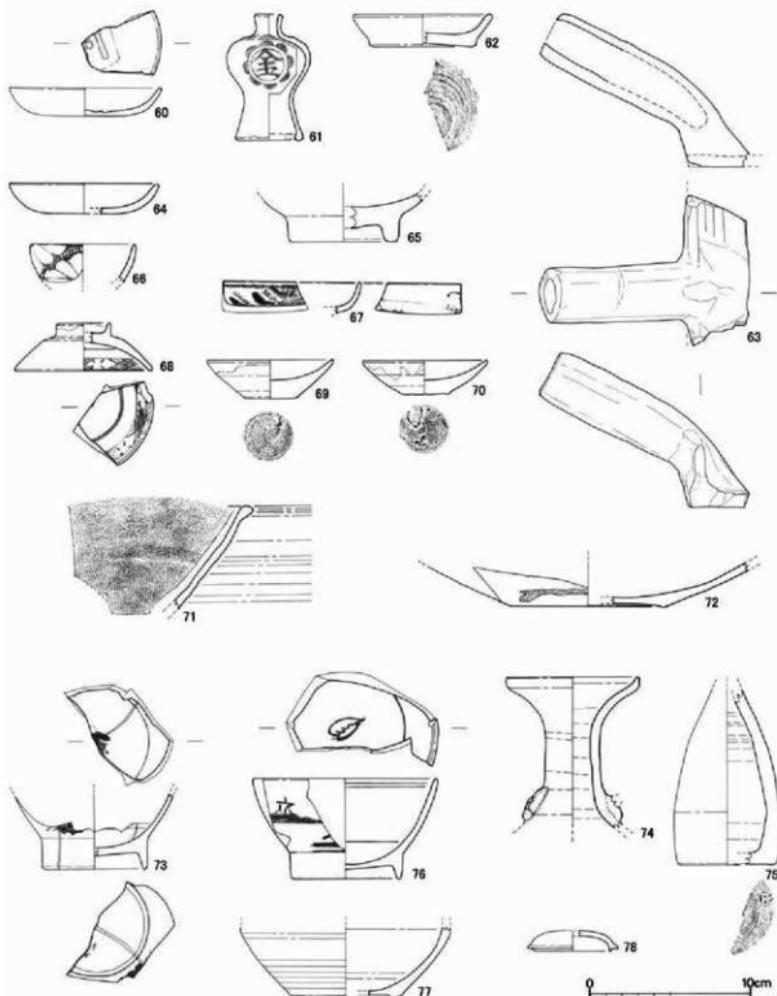


Fig.30 豊栄神社地点出土遺物実測図 I (S = 1 / 3)

層～第7層までと、第8層以下では堆積状況が異なっており、段階的な造成が行われた可能性がある。

#### 14 T (Fig.25・26)

14 Tは、本殿の北側で造成面の有無及びその傾斜を確認するために南北方向に設定したトレーニングで、幅約30cm、長さ1.8mである。

掘り下げを行うと、表土下には洪水層と考えられる黄褐色土（第2層）が堆積しており、その下層で硬化面が検出され、本殿造成時の整地面と推定された。この硬化面上には薄く黒褐色土（第4層）が堆積しており、洪水までに堆積した層と考えられる。

トレーニング南側の整地面上では、本殿からの雨滴により出来たと推定される幅約10cmの溝も検出された。  
第3項 出土遺物 (Fig.30～33)

出土した遺物は、ほとんどが洪水層から出土したもので、造構面に伴うものは出土していない。

その中でも、76の肥前磁器広東碗は12Tの造成土中から出土しており、造成年代を1780年以降に求めることができる。

その他の肥前系の磁器では、碗（66・73・76）、皿（67）、蓋（68・78）、瓶（74）がある。若干の年代差はあるものの、概ね18世紀以降の年代観で、長安寺であった頃の製品である。66は丸碗としたが、大きさ等から仏壇器の可能性もある。67の皿は18世紀以降に出現する器形である。73・76はいずれも広東碗で、73には焼繼の痕跡がみられる。68は外青磁の蓋で、今回出土した陶磁器の中ではやや古様相を示し、18世紀中頃と思われる。74の青磁瓶は花生と思われ、長安寺で使用されていた可能性が高い。

在地系の陶器は、皿（60・69・70）、瓶（77）、すり鉢（71）、鍋（72）、十能（63）がある。60は石見焼系の皿であるが、見込みに陽刻が見られ、全容は不明ながら毛利氏家紋である「一文字に三ツ星」と思われる。したがって、豊栄神社成立後に特別にしつらえられた可能性が高い。69・70の皿も石見系陶器で内面は施釉されているが、外底部は露胎で、底面は糸切り痕を残す。お神酒用の皿と考えられ、豊栄神社期のものと考えられる。71のすり鉢も石見系で、幕末から近代にかけてのものと思われる。77も石見系陶器で、上部は欠損しているが、内面の釉薬にムラがあり

られ、小型の壺か瓶と考えられる。72は底面に煤が付着しており、鍋と考えられる。19世紀代の資料である。63は石見系の十能の把手で、来待釉がかかる厚手の製品である。

その他の陶磁器では、備前の徳利（75）や產地不明の徳利（61）がある。61は表表資料で、お神酒用の徳利である。近年まで使用されていた可能性がある。また、65は青磁であるが、胎土や釉薬、形態などから中国産の可能性がある。しかし、仮に中国産の青磁であれば、他の遺物とは時期的に大きな隔たりがあり、検討を要する。

79～89はいずれも3Tから出土した瓦で、洪水により土石流とともに埋没したものと考えられる。いずれも来待釉のかかった赤瓦で、79～84が軒瓦、85が鳥糞、86～89が軒丸瓦である。79は瓦当に「一」字を入れており、毛利家家紋を簡略化したものと考えられる。80は完形で、瓦面に毛利家家紋は無いが、79の瓦当文様とは同范と思われる。瓦当は中央飾りが蓮弁と思われる簡略化した5枚の花弁で、左右に唐草文が二転し、子葉が付く。瓦当面左に直径約1cmの穿孔がある。81・82は家紋の有無は不明であるが、79・80と同范と考えられる。83・84はいずれも中央飾りが蓮弁と思われる簡略化した4枚の花弁で、左右に唐草文が付く。83に比べ、84の方が簡略化が進んでおり、84が83に後出する可能性がある。

85は鳥糞で、瓦面に毛利家家紋が入る。86～89は軒丸瓦で、86・87には瓦面に毛利家家紋がある。88・89は巴文であるが、周囲に配された文珠の数に違いがある。88は一部欠損しているものの、文珠の数は9個と推定され、89は14個である。出土した軒丸瓦はいずれも中付で、86は中付部に線刻による刻み模様が施されている。

90～95は現存建物に使用されている瓦で、出土資料ではないが、出土瓦を考察する上で重要と考え参考資料として掲載する。90は本殿に葺かれている瓦である。瓦面の文様は5弁の花弁と唐草文で、毛利家の家紋が入る。文様的には79の資料と同じであるが、釉薬に黒い釉薬が使用されている。91・92は拝殿に葺かれている瓦で、92は79と同じである。92は左枝瓦で、瓦面の文様も79・92とは違っている。

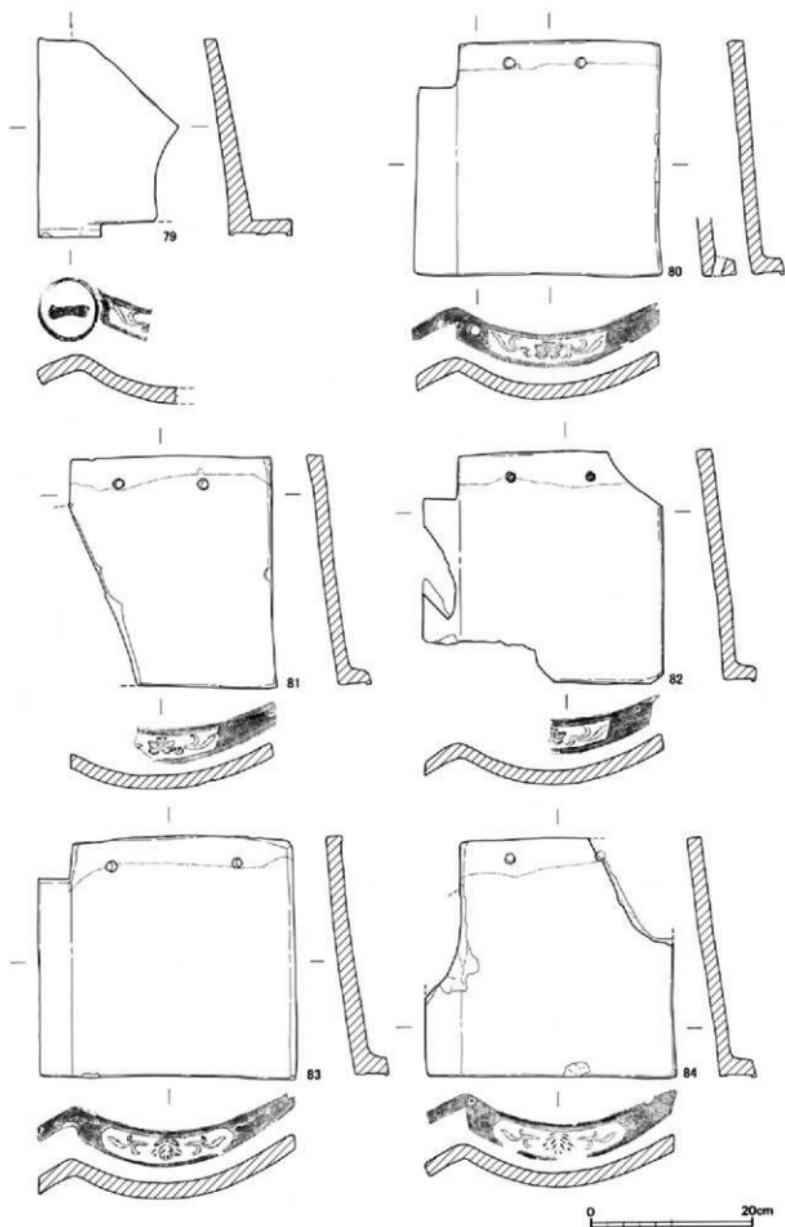


Fig.31 豊栄神社地点出土遺物実測図II (S = 1 / 6)

93は隨身門に葺かれている瓦である。毛利家の家紋が入るが、本殿や拝殿所用の瓦とは文字や縁の太さが違っている。瓦当面の文様も他とは異なっている。本資料は隅瓦で、瓦当面の欠損部分には毛利家家紋があったと考えられる。94・95は土彌の所用瓦で、いずれも毛利家家紋は無く、94は簡略化した花弁に唐草文が付く。隨身門から延びる土塀に使われている瓦の大半はこのタイプで、当初の瓦と推定される。

### 第3節 小結

豊栄神社地点の調査は、当初の計画と比べてかなり大規模なものとなった。

調査の結果、昭和18年の水害層は境内地の全面に及んでいることが明らかとなり、境内の南側ほどより厚く堆積していることが判明した。また、水害後の復旧作業については、流入した土砂の大半は除去せず、参道部分のみ除去を行った痕跡が残り、このことによ

り、現在参道周囲の地盤が参道面より高くなるに至った経緯が明らかとなった。

復旧作業では本殿及び、拝殿周辺は土砂を全て除去しないまま水平に整地した状況も発見し、災害復旧は限定的であった状況も判明した。

流入した土砂内には倒壊した石材がそのままの状態で放置されており、境内の南北に集積された石材については、土砂上に散乱していたものに限って行われたことも推定された。

また、境内南側に設定した5Tでは玉垣の基礎石が検出され、境内地の規模及び、構造が明らかとなった。

さらに、1T～3Tでは石組みの溝が検出され、水害後忘れ去られていた大溝の存在が明らかとなったことは、調査の大きな成果である。

こうした成果により、神社の造営当初の境内地の様相、造構配置なども推定できるようになり、神社復元の貴重な基礎資料が得られた。

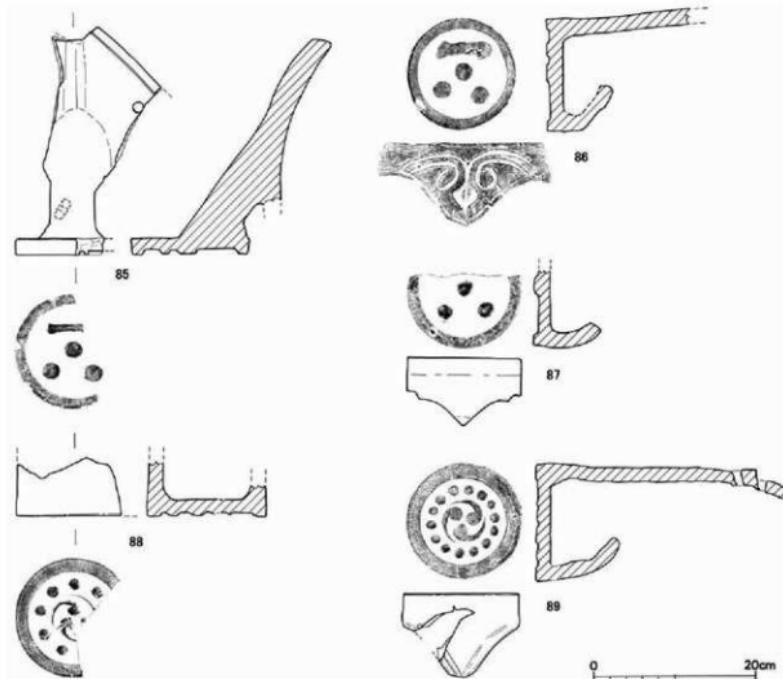


Fig.32 豊栄神社地点出土遺物実測図III (S = 1/6)

参考資料

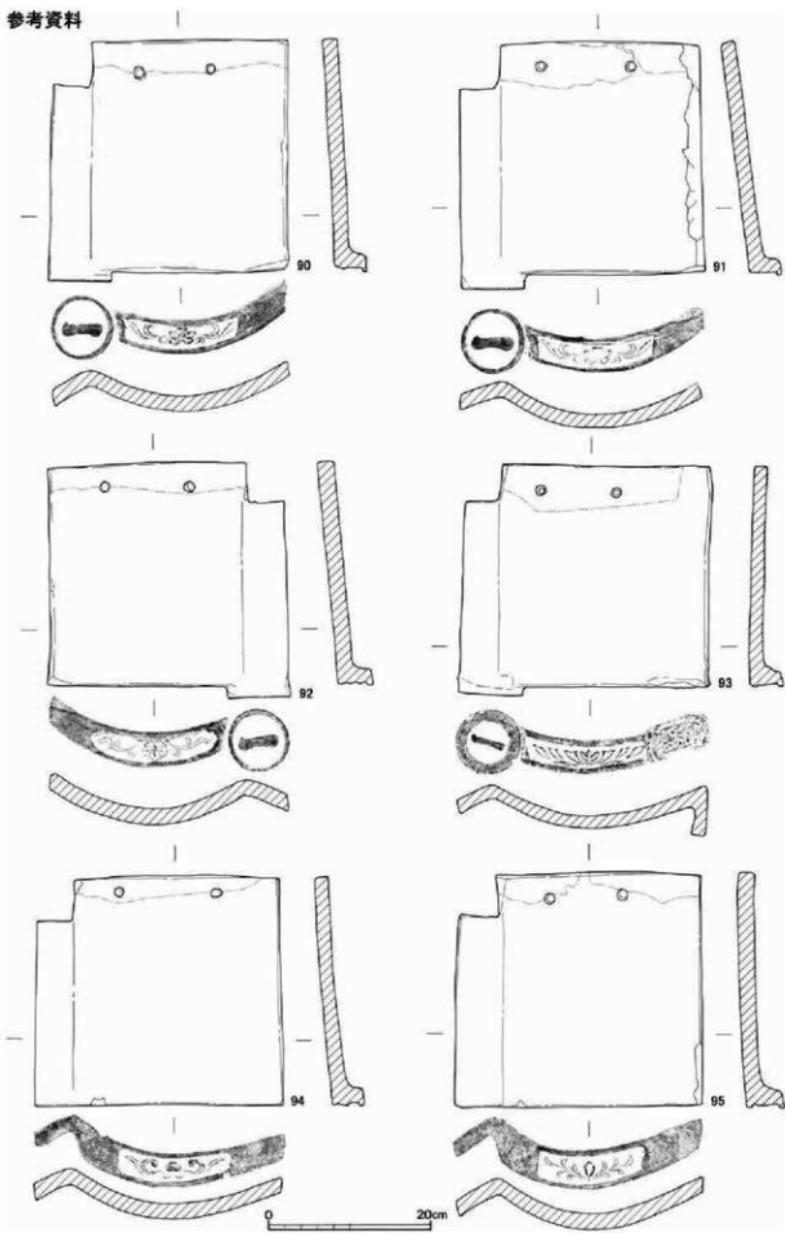


Fig.33 豊栄神社地点採集遺物実測図 (S = 1 / 6)

Tab.5 豊栄神社地点出土遺物一覧表

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
60	本殿奥溝埋土	石見系陶器	皿	(9.2)	1.8	(4.6)	長石釉	毛利の家紋か	
61	本殿奥溝表採	不明磁器	瓶	1.5	7.8	(3.7)	透明釉		
62	2 T	土師質土器	皿	(8.4)	2.0	(6.0)	にぶい黄橙色		
63	2 T	在地系陶器	十能	現存長 9.3	現存幅 13.0	現存厚 9.5	米待釉		
64	3 T	土師質土器	皿	(9.0)	1.9	(3.9)	浅黄橙色		
65	3 T 底面付近	青磁	碗		(3.0)	(6.5)	青磁釉		須佐かも
66	3 T	肥前磁器	仏飯器	(6.3)	(2.4)		透明釉		18c 後半
67	3 T	肥前磁器	皿		(1.9)		透明釉		18c 後半
68	3 T	肥前磁器	蓋	(8.2)	3.0	つまみ怪 (内)透明釉 (外)青磁釉		青磁染付	18c 後半
69	3 T	石見系陶器	皿	7.8	2.4	3.0	長石釉		
70	3 T	石見系陶器	皿	7.6	2.1	3.0	長石釉		
71	3 T	石見系陶器	すり鉢		(6.3)		褐釉		
72	3 T 上層	在地系陶器	平鍋		(2.8)	(9.5)	サビ釉		
73	7 T	肥前系磁器	碗		(4.6)	(6.2)	透明釉	焼締	
74	8 T	肥前磁器	瓶(花生)	(8.0)	(9.3)		青磁釉		18c
75	8 T	備前	徳利		(10.9)	(5.6)	明赤褐色		
76	12 T 6 層	肥前系磁器	碗		(5.1)	(6.5)	透明釉		
77	9 T 2 層	石見系陶器	壺か瓶蓋		(4.4)	(5.9)	長石釉		1780~ 1810
78	10 T	肥前磁器	蓋	4.7	(1.3)		透明釉		17c 後半~ 18c 前半
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			重量(g)	色調	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
79	3 T	瓦	軒瓦	24.5	17.3	10.8	1980	来待釉	
80	3 T	瓦	軒瓦	29.2	31.8	7.0	3490	来待釉	
81	3 T	瓦	軒瓦	28.3	25.7	7.9	2440	来待釉	
82	3 T	瓦	軒瓦	28.5	29.7	7.7	2750	来待釉	
83	3 T	瓦	軒瓦	29.7	31.8	7.7	3970	来待釉	
84	3 T	瓦	軒瓦	29.4	31.1	8.5	2920	来待釉	
85	3 T	瓦	鳥糞	28.1	18.0	24.8	1640	来待釉	
86	3 T	瓦	軒丸瓦	17.7	13.3	15.1	1585	来待釉	
87	3 T	瓦	軒丸瓦	8.3	14.1	9.5	605	来待釉	
88	3 T	瓦	軒丸瓦	7.1	13.0	14.8	785	来待釉	
89	3 T	瓦	軒丸瓦	30.8	14.4	14.5	2740	来待釉	
90	本殿所用	瓦	軒瓦	29.8	29.8	5.2	3820	黒釉	
91	拝殿所用	瓦	軒瓦	30.7	30.1	7.5	3730	来待釉	
92	拝殿所用	瓦	軒瓦	29.2	30.0	6.7	4050	来待釉	
93	隨身門所用	瓦	軒隅瓦	28.4	31.4	6.2	3390	来待釉	
94	土瓶所用	瓦	軒瓦	28.6	30.9	6.3	3550	来待釉	
95	土瓶所用	瓦	軒瓦	29.0	30.6	5.8	3900	来待釉	

# 第5章 本年度の試掘・立会調査

## 第1節 平成27年度の調査地点

伝統的建造物群保存地区内や世界遺産指定範囲において、地表面の掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には、隨時立会・試掘調査を実施している。本年度は、立会調査を大森伝統的建造物群保存地区内の竹之内家地点、加藤家地点、大森さくら保育園地点の計3か所で行ない、試掘調査を世界遺産指定範囲内の上市恵比須社地点で実施した。調査地点はFig.15・34・35のとおりである。

## 第2節 上市恵比須社地点の試掘調査

調査地は大田市温泉津町西田に所在する。西田地区は大森町から温泉津町まで延びる石見銀山街道温泉津沖泊道のほぼ中央に当たり、湯里川の河岸段丘上の道路に沿ってできた街村で、宿場町として栄えた町である。集落の成立年代は明らかとなっていないが、大内義興が矢瀬城山に城塞を築いたとされる享禄元(1528)年頃に軍兵相手の商人が営業を始めたと推定されている(多田・明楽1996)。近世においては毎

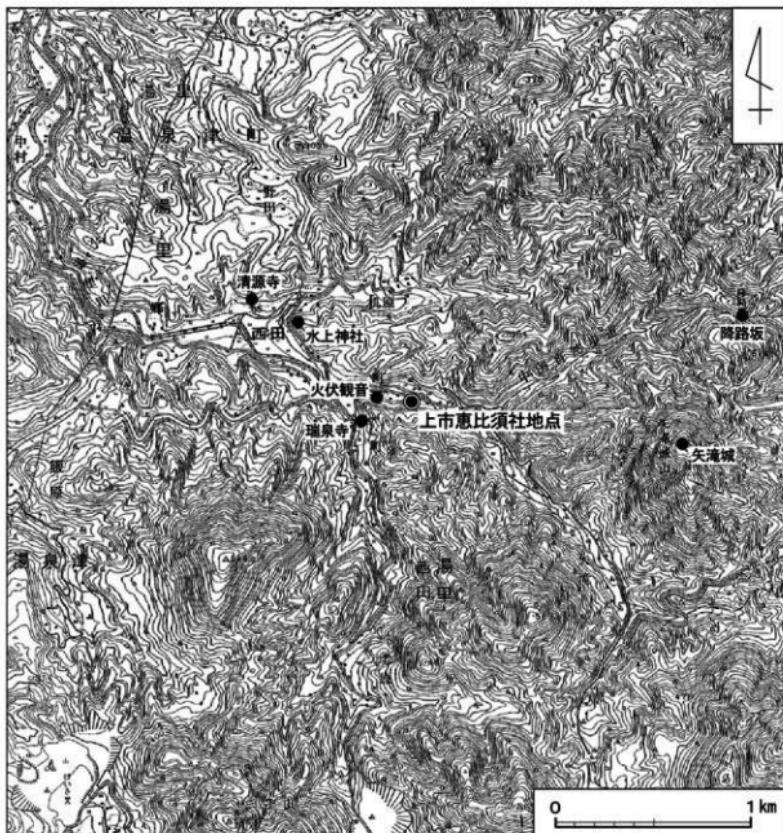


Fig.34 上市恵比須社地点位置図 ( $S = 1/25,000$ )

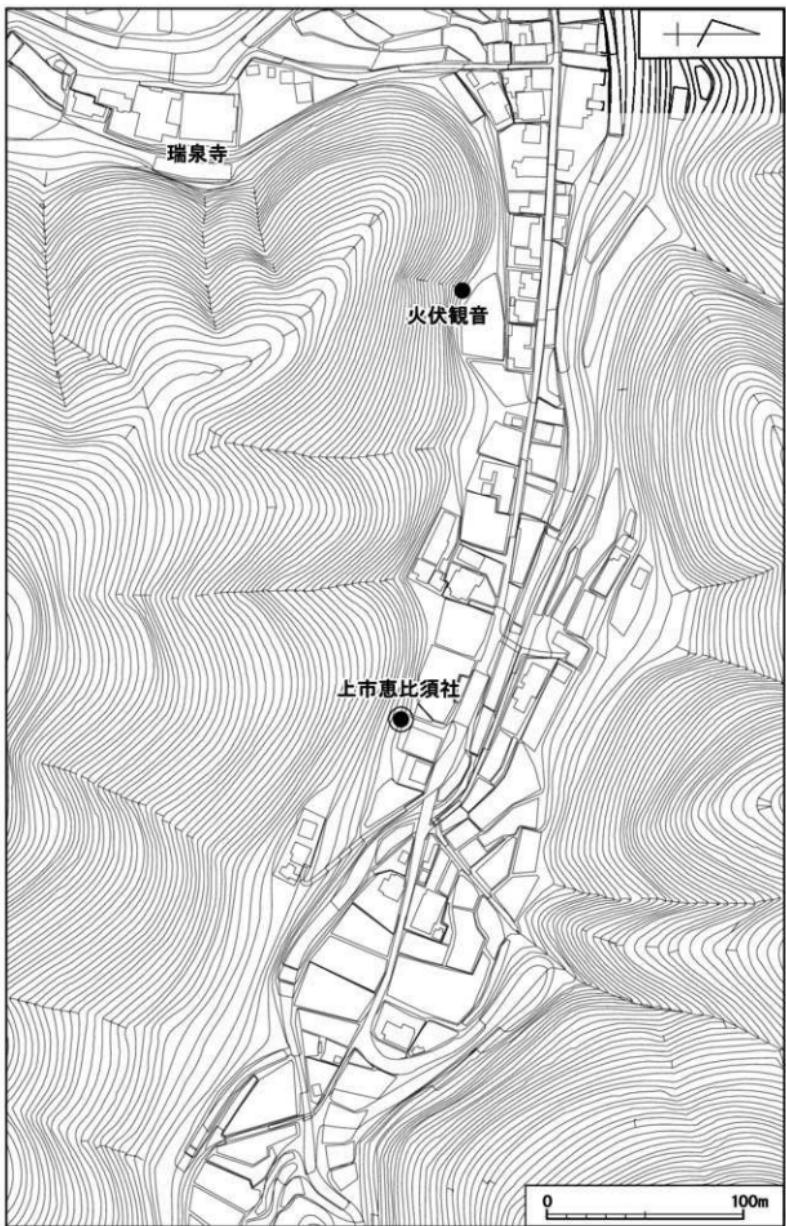


Fig.35 上市恵比須社地点周辺地形図 ( $S = 1 / 2,500$ )

年7月と12月に定期市が開かれていたといわれ、現在も残る「上市」「中市」の地名に当時の繁盛の名残りが見られる。

上市恵比須社は現在の県道201号線沿いで、西田の集落の東端部で降路坂に近い場所に位置する。岩盤の上に建てられた社とされ、地域の人々の信仰を集め神社である。上市恵比須社の社建替に当たって基礎部分を掘り下げる必要が発生したため、それに先立つて平成28(2016)年1月8日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、社が立っていた周辺を整備し、一部を掘下げて岩盤を露出させた。その結果、地表面上では東西の端部に縁を並べて土止めとしていることが明らかとなった。また、東西方向に設定した断面では、岩盤が南に向かって傾斜しており、その隙間に縁や砂質土を詰めて平坦面としていることが確認できた。調査の結果、上市恵比須社が建てられているのは、岩盤ではなく巨大な転石であることが判明した。なお、遺物は出土しなかった。

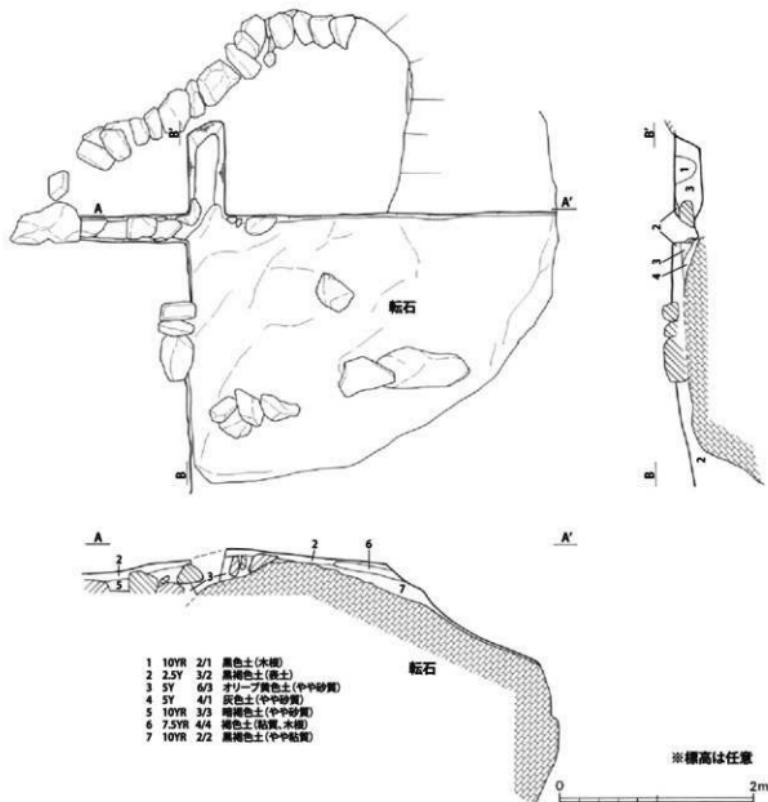


Fig.36 上市恵比須社地点平面図・断面図 (S = 1 / 40)

# 第6章 総括

## 第1節 昆布山谷地区

### 第1項 第5地点

第5地点は昨年度より引き続いての調査となった。今年度は昨年度の発掘調査で検出されていたSX 02の東側にトレンチを設定して調査を実施した。発掘調査により、SX 02の最下部と北端部を除いてほぼ全体の様相が明らかとなった。SX 02に加工された遺構にも時期差があり、南端部の階段状遺構③はSX 02の利用開始時期から加工されているが、階段状遺構①は第1遺構面が形成された18世紀後半以降に加工されたとみられる。また、昨年度の調査によって堆積状況が把握できていたこともあり、各整地面を平面的に調査してきた。第2面では明確な遺構は検出されなかったが、礎石の可能性のある礎が1点検出されており、調査範囲を広げた際の成果が期待される。第3遺構面では一部にユリカスの廃棄が認められた。第1面では製錬活動に関わる遺構・遺物は見つかっていないため、造成の前後では土地の利用方法が変化している可能性がある。

トレンチの下層で検出されたSX 17～19は、その検出状況や埋土からの出土遺物より、炉跡である可能性が高い。第3遺構面の時期には、SX 17～19が検出されたほかに何度も整地を行なった痕跡が見られるなど、活発な利用が想定される。しかし、本年度は調査範囲が限られているため評価を保留し、来年度調査面積を広げた上で遺構の様相などを明らかとしていきたい。

### 第2項 第6・7地点

第6・7地点は本年度新たに設定した調査地点である。本年度は遺構確認のための測量調査を実施した。調査によって岩盤加工遺構と平坦面が検出された。第7地点で検出されたSX 22はSX 21の一部を切り込んで加工されているなど、時期差があることも確認できた。また、SX 21とSX 22は現在の山道からやや離れた場所に位置しているが、道の位置が変わっているのかどうか今後検討する必要がある。

第6・7地点のちょうど中間で検出されたSX 23

は壁面や隅を他の遺構では見られないほど丁寧に整形していることや、奥壁に意図を持って文字もしくは記号を掘り込んでいることなど、これまで本谷地区や昆布山谷地区で検出してきた岩盤加工遺構には見られない特徴を持っている。検出例のない遺構であるため、現状では評価を保留し、類例を待ちたい。

## 第2節 宗岡家地点

平成26年度に引き続き発掘調査を実施した。平成27年度は宗岡家の敷地内でも南側で、主屋と離れに面した庭を第V区として発掘調査を実施した。第V区では宗岡家の庭に関連する遺構は検出されなかつたが、調査区内に設定したサブトレンチ①によって主屋基礎の構築状況が明らかとなつたほか、下層確認トレンチでは土地の利用方法や成因、地割の変遷などが窺われる遺構が検出された。

下層確認トレンチでは多くの硬化面や造成の痕跡が確認され、宗岡家地点の南部は江戸時代初期から幕末に至るまでに活発に利用されていたことを示す資料を得られた。ただし、下層確認トレンチを設定した範囲は元々山本家の敷地であるため、それらの利用痕跡は宗岡家や阿部家とは無関係である。また、地表面より約1.1m下位では敷地境とみられるSW 02が検出された。SW 02は検出された前後の堆積層に含まれる遺物から、江戸時代初期の遺構とみられる。SW 02の検出位置は宗岡家住宅が建つより前にこの敷地を所有していた福本家と山本家の敷地境とも異なっていることから、江戸時代初期から幕末に至るまでに地割が変わっている可能性が高い。また、下層確認トレンチの最下部では硬化面と木片の含まれる層が交互に堆積している部分もあり、道として利用されていたことも想定される。

サブトレンチ①は第V b区西部に幅30cm程度で南北方向に設定した。サブトレンチ①では、主屋から2.4mまでの北半部とそれよりも南の南半部では堆積状況が大きく異なることが確認された。北半部においては分厚い堆積層が確認され、その一部を掘り込んで

主屋の基礎を置き、周囲を礎交じりの埋土で固めていた。南半部では下層確認トレンチと同様に複数の硬化面が検出され、整地や床面の張替など地表面の活発な利用が想定される状態であった。

平成 26 年度の調査では、宗岡家住宅の主屋と土蔵が建てられた際に造成が行われたことが確認されていたが、サブトレンチ①北半部で確認された主屋付近の造成土も宗岡家住宅が建てられた際のものとみられる。サブトレンチ①南半部や下層確認トレンチではそのような造成の痕跡は確認できなかったことから、宗岡家住宅建築時の造成は主屋と土蔵付近までしかなされていなかった可能性が高い。先にも触れたように、宗岡家の敷地は山本内蔵太の敷地の一部と福本乙兵衛の敷地を合わせて現在の縫型になっている。宗岡家住宅の元々の所有者である阿部半蔵が福本家より土地を買入れられて主屋や土蔵を立てた際には、山本家の敷地はまだ購入していなかったため、造成がされなかつた可能性が考えられる。

平成 27 年度の発掘調査により、宗岡家地点の東西方向における土層の堆積状態が窺える状態となった。平成 18 (2006) 年度の発掘調査では敷地内の西部に設定したトレンチにより、宗岡家の庭に隣接する遺構が検出されていたほか、江戸時代初期の堆積層から遺構・遺物が見つかっていた。平成 26 年度の発掘調査では敷地内の東部に下層確認トレンチを設定し、宗岡家住宅の建てられる際に造成が行われており、それ以前は河川による自然堆積によって地形が形成されていることが明らかとなっていた。

今年度の発掘調査では敷地内南部に設定した下層確認トレンチと、Vb 区に設定したサブトレンチ①により、宗岡家の主屋付近と、敷地内南部で利用状況が異なることが確認できた。特に、下層確認トレンチにおいては地表面の整地や張替などの活発な利用が想定できる状態であった。一方で、出土遺物としては江戸時代初期頃と幕末頃のものが中心で、江戸時代中期頃のものはほとんど出土しなかった。このことは平成 18 年や平成 26 年の調査においても同様であった。以上のことから、敷地内の利用頻度には時期差があり、江戸時代初期頃や幕末頃には活発に利用されていたが、江戸時代中期頃は比較的安定していたことと、敷地の

東側は元々川原に近い場所であったが、宗岡家住宅を建てる際に造成されて宅地を括げていたことの 2 点が想定される。

### 第 3 節 豊栄神社地点

豊栄神社地点では、トレンチ調査にも関わらず、多くの成果が得られた。ここでは項目ごとに調査成果を整理し、若干の考察を加えたい。

#### ① 洪水の実態

豊栄神社は昭和 18 (1943) 年の水害で大きな被害を受け、その後本格的な復旧が行われないまま現在に至っていることは本文中で触れたが、その実態も推定できるようになった。

洪水層は南側においてより厚く堆積していることが判明し、7 T、8 T では灯籠と共に玉垣の石材も多数埋没していることも明らかとなった。また、現存する建造物では、土塀や玉垣は北東側の一部が残存し、灯籠も境内の北東側のものが残っている。このことから、洪水の土石流は南西方向から押し寄せ、南西側の土塀と玉垣、灯籠を押し流し、SD 01 をも一気に埋没させたと推測される。SD 01 内に転落している巨石を見ると、土石流の威力がいかに大きかったかが推測できるが、土塀にぶつかったことにより流速が弱まり、主要建物の流失には至らなかった可能性が考えられる。

また、9 T や 10 T では加工された石材がほとんど検出されなかったことから、流失した石材は大半が随身門の西側まで留まっている可能性が高い。

#### ② 墓内の様相

現在ほとんどが流失している玉垣については、拝殿の段を取り囲むように拝殿裏まで存在していたことが明らかとなった。

本殿と拝殿間の構造については、石垣前に幅約 1.3 m の石組みの大溝が存在し、この溝により両者が完全に遮断されていることも判明した。溝の西側には底から約 2 m の石垣が築かれ、石垣上には土塀が築かれている。

この土塀は本殿の周囲を取り囲み、本殿の段は周辺からは容易に進入できない隔離された空間であったことも明らかとなった。

拝殿裏側には、本殿に向かう幅約 2 m の石段が存

在するが、最下段のみ約1.8mと狭くなってしまっており、この部分に本殿と拝殿間通路となる橋が架けられていたものと推測される。

拝殿の北側には玉垣が巡ることが判明したが、その北側には約40cmの段差があり、拝殿側が一段高くなっている構造も明らかとなった。

また、随身門から延びる土塀については北側に約1.2mの切れ目が存在することも明らかとなった。この部分の構造については、北側に社家の居宅が存在することから、両者を行き来する通用口的な施設が存在していたことが推定される。

現在の地盤は、拝殿周囲の石敷きとほぼ同じ高さであるが、洪水前の地盤はこれらより10cm程度は低く、石敷きの方が一段高い構造となっていたことも明らかとなった。

随身門から前側の状況については、遠景ではあるが、明治から大正の頃と思われる古写真が残っている。洪水前の状況を知る貴重な資料で、これを見ると随身門から前の参道には石畳が無く、南側部分も高くなっていないことが判り、9・10Tの調査成果と一致する。拝殿から奥についている随身門から南に延びる土塀なども確認することができる。

### ③石垣

調査で検出したSD01は緻密に石を組み合せた石組みの溝であったが、同様の石垣は本殿裏や、随身門前の石垣でも確認できる。

石材はいずれも白色凝灰岩で、同一の石工によって構築されたものと推定される。石積みの方法等は本文中で述べた通り多角形の切石を組み合わせるが、基本的には成層積み（布積み）の範疇に入ると考えられる。見た目は亀甲積みを意識している可能性もある。

この石積みの特徴をまとめると、①石材を多角形に加工し、各石材が複数面で組み合うよう成層積みの工法で積み上げる。②各石材は緻密に接合され、表面加工は整で行われ、鑿痕を残すが、石材の周囲数cmは幅広の盤で丁寧に仕上げられる。

このような特徴に似た石垣は、大森町内では大森代官所、熊谷家住宅、旧井戸神社、藤田組火薬庫跡など、随所で散見される。これらの石垣は年代が判明しており、古い順に、文化12（1815）年の大森代官所門長屋石垣、嘉永3（1850）年の熊谷家住宅護岸石垣、慶応2年～明治3（1866～1870）年の豊栄神社石垣、明治12（1879）年の旧井戸神社石垣、明治20（1887）年の藤田組火薬庫跡の外壁石積みの順となる。

これらの石垣はいずれも白色凝灰岩を使用して積ま



豊栄神社古写真（明治から大正頃）

れしており、研究が進めば、技術的な系譜をたどれる可能性がある。

この中で、豊栄神社石垣に最も似ているのは旧井戸神社石垣である。構築年代が近いことが理由として挙げられるが、同一の石工によるものと考えられる。

城上神社、羅漢寺など他にも類似性のある石垣はまだ存在しており、こうした石垣の基礎資料を蓄積することによって、当地域の石垣や、石造物の様相を解明する有効な手段となろう。

#### ④豊栄神社所用瓦

調査によって、洪水時に流失したと考えられる瓦が出土している。中には、毛利家家紋が入るものも見られ、豊栄神社で用いられていた瓦と推定できる。

建物も慶応2（1866）年から明治3（1870）年までの間に建てられている事が判明しており、瓦についてもこのとき製作されたと考えられ、年代が特定できる数少ない事例になる。また、建物が現存しており、その所用瓦と比較検討することも可能である。

79は拝殿の所用瓦と同范で、本来は拝殿に葺かれていたと思われる。この文様構成の瓦が豊栄神社の主流の瓦と推定され、本殿でも釉薬は異なるものの同范

の瓦が使用されている。家紋の入っていない瓦は、土堀に使われていたと考えられ、わずかに現存する本殿廻りの土堀に同様の瓦が使われている。

隨身門には、瓦当文様の異なる瓦が使用されており、建築された年代が、本殿・拝殿に数年遅れることから、瓦の発注先を変更したか、同じ業者でも意図的瓦当文様を変更したことが考えられる。

隨身門に取り付く土堀には、94の瓦が最も多く使われており、83・84・95は修繕などで後世に補われた可能性が高い。また、この3種には家紋も入っておらず、大森町内において他の建物でも使用が確認されていることからも首肯されよう。

#### ⑤造成から建物の建築

今回の調査で、拝殿はSD01に後出することが明らかとなった。

長安寺には、本殿・拝殿とも慶応3（1867）年4月の棟札が残り、どちらも慶応3年に建立されたことがわかっている。

当初、石列を検出した段階では拝殿の下層に位置することから、前代の遺構の可能性も考慮したが、石列がSD01と同一遺構と判断されるに至り、SD01



大森代官所門長屋石垣



熊谷家住宅櫛岸石垣



旧井戸神社石垣



藤田組火薬庫跡

が石垣と一体となっており、豊栄神社境内を構成する遺構であることが明らかであるため、両者は極めて近い時間差であったと判断された。

すなわち、社殿建築にあったっては、造成を行い整地されたことが調査結果から明らかとなつたが、まず造成工事の一環として、本殿・拝殿周辺の石垣、溝の整備が建築に先立つて行われ、境内地の整備の後、本殿と拝殿の建築に取り掛かったものと推定されるのである。

長州軍が大森を占拠したのが慶応2（1866）年7月であることから、占拠の直後から取り掛かったとしても、慶応3年4月までの短期間で境内地の造成から社殿の建築まで行ったことになる。

当時の長安寺の境内、建物の配置等は明らかとなつていないが、本堂は嘉永2（1849）年に焼失しており、この時期本堂再建を模索していることから、社殿は本堂とは別の位置に建築されたことが推測される。

随身門は明治元（1868）年に建築されており、主要な建物は毛利元就に「豊栄」の神号が授与される以前であることがわかる。

#### 第4節 まとめ

本年度は昆布山谷地区第5・6・7地点、宗岡家地点、豊栄神社地点の3か所の発掘調査を実施した。昆布山谷地区においては第5・6・7地点のそれぞれで岩盤加工遺構が検出され、昆布山谷における鉱業活動の様相を探る重要な資料が得られた。また、第5地点においては昨年度の調査成果を元に一部を深く掘り下げて調査することによって、土地の利用開始時期や地形の形成に関する情報を得られた。第6・7地で検出された岩盤加工遺構には、これまでの調査で検出されたものにはない特徴がみられ、来年度に計画している調査での成果が期待される。

宗岡家地点においては、当初期待されていた庭に関する遺構は検出されなかったが、サブレンチ①と下層確認トレンチによって、主屋基礎を据える際の掘り込みや、江戸時代初期から幕末に至るまでの土地区割の変遷に関する遺構などが検出されるなどの成果が得られた。平成18（2006）年と平成26（2014）年に実施した調査によって敷地の東部と西部における土

層堆積状態が明らかとなっており、本年度の調査で敷地内南部に設定した下層確認トレンチによって、敷地の東西方向の堆積状態が窺える状態となった。ただし、サブレンチ①の南北断面によって、主屋近辺と主屋から南にやや離れた箇所では堆積状態が異なっていることが確認されたため、来年度の調査においてもトレンチによる下層確認を引き続き行う必要がある。

豊栄神社地点においては、本殿と拝殿を画す大溝や、玉垣の基礎石などの検出により、洪水前の境内地の様子がかなり詳細な部分まで復元可能となった。

また、各トレンチでは洪水層が検出され、災害後の復旧作業で堆積した土砂の除去がほとんど実施されないまま、本殿と拝殿周辺の整地が行われたこと、参道部分のみ土砂が除去されたことなどが明らかとなった。

また、全トレンチで災害前の地表面が確認されたことで、境内地整備の基礎資料を得ることができた。ただ、洪水層内には灯籠や玉垣の石材などが多数残されていることも判明し、整備に当たって、今後の対応が新たな問題として提示される結果となった。

平成22（2010）年度の石見銀山調査活用委員会の場において、調査面積を必要最小限として遺構の損壊を控えてきたそれまでの調査方法に対して、調査の目的を明確にした上で、その手段としての発掘調査方法について「さらに広く、深く」掘ることで目的に沿った成果が期待されることが指摘されていた。平成26年度と平成27年度は「上層で検出された遺構への影響を最小限とした上で深く掘り下げる」ための調査方法を検討し、調査を実施した。具体的な方法としては、まず調査面積を広く設定して遺構の広がりを確認し、その成果を元にトレンチを設定して深く掘り下げるとした。トレンチは、調査範囲内で遺構が検出されなかった部分や、深く掘り下げることで遺構の様相をより明らかとすることが見込まれる部分に設定することとした。その成果はこれまで報告したとおりであるが、昆布山谷地区第5地点においては17世紀前半には利用が始まり、幕末・近代にいたるまでに整地や造成によって地形や景観を変えながら断続的に利用されていたことが明らかとなった。宗岡家地点においては主屋と土蔵を建てた際に造成が行われたことが判明したほか、江戸時代初期から幕末にかけて造成や整地が

何度も行われ、時期によっては宅地境が変わることもあったことが明らかとなった。いずれも石見銀山における往時の生活の様相や土地利用の在り方、景観の変遷を考える上で重要な成果といえる。

これまでの調査では石見銀山の開発が始まったとされる 16 世紀初頭頃の遺構検出には至っていないが、

その足がかりは得られたとみてよいであろう。平成 28 年度以降の調査でも調査状況を見極めながら保存に留意しつつ、「さらに広く、深く」掘る調査方法を採用する方向は継続し、目的に沿った成果が得られるよう調査の進展を図りたい。

#### 引用・参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山道路総合調査報告書』

##### 第 1 冊【道路の概要】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山道路総合調査報告書』

##### 第 2 冊【発掘調査・科学調査編】

島根県教育委員会 2004『石見銀山街道 糸ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』

島根県大田市 2006『史跡石見銀山道路保存管理計画書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山道路発掘調査報告書』I

中田健一他 2005『石見銀山道路発掘調査報告書』II 島根県教育委員会・大田市教育委員会

中田健一・新川 隆 2013『石見銀山道路発掘調査報告書』III 島根県教育委員会・大田市教育委員会

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000～2004『石見銀山道路発掘調査概要』10～14

大田市教育委員会 2006～2015『石見銀山道路発掘調査概要』15～23

新川 隆 2013『史跡石見銀山道路総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史 別編 宿業 2 中世・近世 濱戸系』

江戸道路研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』

九州近世陶磁学会 2006『九州陶磁の編年』

大橋康二 1984『肥前陶磁の変遷と出土分布』『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前器を中心に』理工学社

小野正敏「15～16 世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982

尾村 勝 2014「石見銀山道路昆布山谷地区の土地利用の変遷－文献史料と分布調査成果からみる－」『世界遺産石見銀山道路の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会

古賀弘 1987『江戸の考古学』考古学ライブラリー 48 ニュー・サイエンス社

鶴谷和彦 1994『増出土の銭鉄型と中世後期の模鉄銭生産』『中世の出土銭・出土鉄の調査と分類』兵庫県埋蔵鉄調査会

多田房明・明楽文教 1996『第二章 道の確定と現状 一、温泉津町』『歴史の道調査報告書 銀山街道』島根県歴史

##### の道調査報告書第三集 島根県教育委員会

西尾克己 2013「石見銀山道路出土の在地系陶器・石見焼について（1）」『世界遺産石見銀山道路の調査研究』3 島

##### 根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己 2014「石見銀山道路出土の在地系陶器・石見焼について（2）」『世界遺産石見銀山道路の調査研究』4 島

##### 根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽 日本のこころ 63 平凡社

藤澤良祐 1993『瀬戸美濃大窯の編年』『瀬戸市史 陶磁史編 四』瀬戸市史編纂委員会

守岡正司・新川 隆 2011『陶磁器から見た石見銀山道路』『石見銀山道路テーマ別調査研究報告書』I 島根県教育委員会・大田市教育委員会

目次謙一 2002「石見銀山道路の出土無文銭について」『石見銀山・石見銀山関係論集』島根県教育委員会

矢野健太郎 2014「豊栄神社の成立をめぐって」『世界遺産石見銀山道路の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会

##### 第 6 章 総括

# 図 版

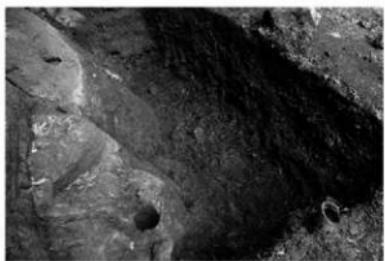




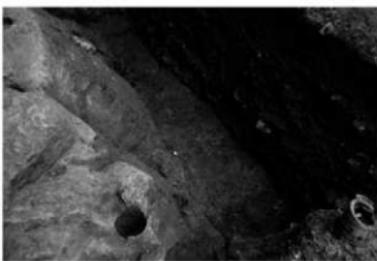
昆布山谷地区第5地点 調査前全景（東より）



同 SX 02 全景（東より）



昆布山谷地区第5地点 第2面検出状況（南西より）



同 第3面検出状況（南西より）



同 第2・3面検出状況（西より）



同 第3面検出状況（西より）



同 第3面検出状況（南西より）



同 第3面検出状況（南西より）



昆布山谷地区第5地点 SD 02-②検出状況（北西より）



同 SD 02-②蓋石検出状況（北西より）



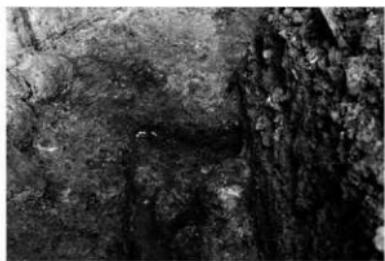
同 SD 02-②ベルト上面（北東より）



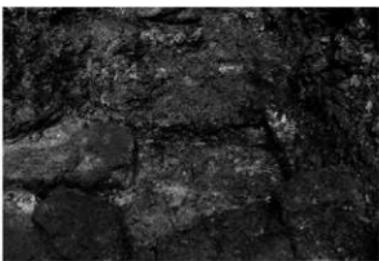
同 SD 02-②ベルト断面（北西より）



昆布山谷地区第5地点 SX 18・19 検出状況（北東より）



同 SX 17 半截断面（南西より）



同 SX 18 半截断面（南西より）



同 SX 19 検出状況（南西より）



同 SX 19 半截断面（南西より）



昆布山谷地区第5地点 東壁断面（南より）



同 東壁断面北半（南より）



同 北壁断面（南東より）



同 東壁断面硬化面（西より）



同 東壁断面ユリカス堆積部分（北西より）



昆布山谷地区第6地点 SX 20 全景（北東より）



同 SX 20 断段状遺構（南東より）



昆布山谷地区第7地点 SX 21・22 全景（南東より）



同 SX 22・23 全景（北東より）



同 SX 22 全景（北東より）



同 SX 23 外観（南東より）



同 SX 23 内部（東より）



宗岡家地点第V区 調査区設定状況（南東より）



同 完掘状況（南東より）



宗間家地点第V区 SW 01 全景（北東より）



同 SW 01 東部（北より）



同 SW 01 中央部（北より）



同 SW 01 西部（北より）



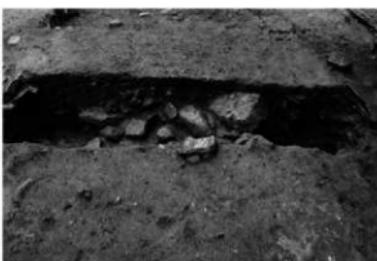
同 東西断面（南東より）



同 東西断面東半（南東より）



同 南北断面南半（東より）



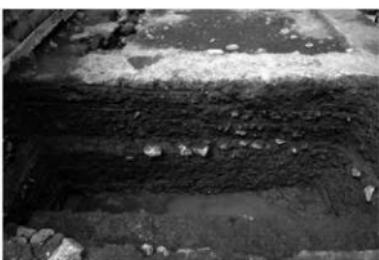
同 南北断面北半（東より）



宗岡家地点第V区 下層確認トレンチ完掘状況（北東より）



同 SW 02 完掘状況（東より）



同 下層確認トレンチ北壁断面（南より）



同 下層確認トレンチ西壁断面（東より）



同 下層確認トレンチ東壁断面（西より）



宗國家地点第V区 SW 02 構築面検出状況（西より）



同 SW 02 上面砂層検出状況（北西より）



同 SW 02 上面砂層検出状況（大写し、北より）



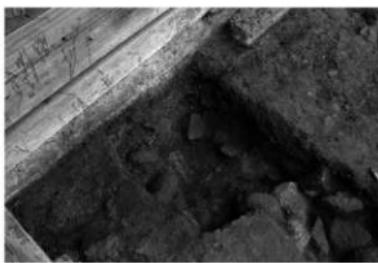
同 サブトレンチ①完掘状況（南東より）



同 サブトレンチ①北壁断面（南東より）



同 サブトレンチ①北部西壁断面（東より）



同 サブトレンチ①北部東壁断面（南西より）



豊栄神社地点 本殿・拝殿（東より）



同 境内地内調査前状況（北より）



豊榮神社地点1トレンチ SD 01 完掘状況（北より）



同 SD 01 南半完掘状況（南より）



同 SD 01 中央部完掘状況（南東より）



同 北部西壁断面（東より）



同 中央部南壁断面（北東より）



豊栄神社地点2 トレンチ SD 01 完掘状況（北西より）



同 SD 01 西壁（南東より）



同 SD 01 東壁（北西より）



同 北壁断面（南西より）



同 南壁断面（北東より）



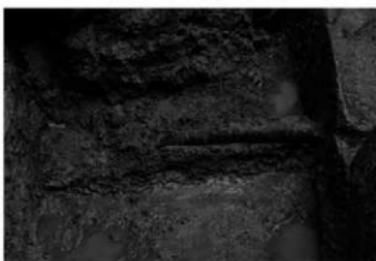
豊栄神社地点3 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 SD 01 完掘状況（北西より）



豊栄神社地点3 トレンチ SD 01 完掘状況（南西より）



同 SD 01 丸太材検出状況（南西より）



同 SD 01 脇木②北端部（東より）



同 南壁断面（北東より）



同 SD 01 東壁（北西より）



同 SD 01 西壁（南東より）



同 SD 01 西壁脇木①（南東より）



同 SD 01 東壁脇木②（北西より）



豊栄神社地点3 トレンチ 完掘状況（北東より）



同 東部完掘状況（東より）



同 硬化面検出状況（東より）



同 石列検出状況（南より）



同 硬化面検出状況（北西より）



豊栄神社地点4 トレンチ 完掘状況（北西より）



同 西壁断面（東より）



豊栄神社地点5 トレンチ 西壁断面（南東より）



同 完掘状況（南西より）



同 玉垣基礎検出状況（南東より）



同 灯籠基礎（北西より）



豊栄神社地点6 トレンチ 完掘状況（北西より）



豊栄神社地点7 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 完掘状況（北東より）



同 西壁断面（南東より）



同 北端部完掘状況（東より）



豊栄神社地点8 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 完掘状況（北東より）



同 北半部西壁断面（東より）



同 玉埴出土状況（北西より）



同 南半部西壁断面（南より）



同 石造物出土状況（南東より）



豊栄神社地点8 トレンチ 作業風景（北より）



豊栄神社地点9 トレンチ 西壁断面（南より）



同 北半西壁断面（北東より）



豊栄神社地点10 トレンチ 完掘状況（北東より）



同 南半西壁断面（北西より）



豊栄神社地点 11 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 東壁断面（北西より）



同 東壁断面（西より）



豊栄神社地点 12 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 西壁断面（南東より）



同 南端部完掘状況（北東より）



豊栄神社地点 13 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 西壁断面（南東より）



同 西壁断面（北東より）



豊栄神社地点 14 トレンチ 完掘状況（南西より）



同 西壁断面（南東より）



同 北端部完掘状況（南西より）



上市恵比須社地点 全景（東より）



同 完掘状況（南より）



同 土層断面（南東より）



同 南部石列（北東より）



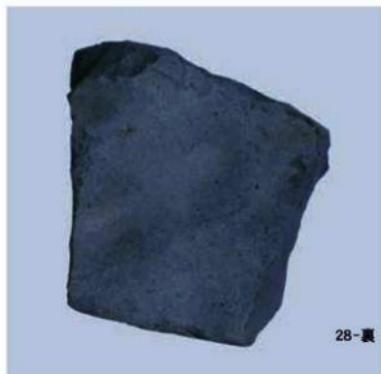
同 作業風景（南より）



昆布山谷地区出土遗物 I



28-表



28-裏

昆布山谷地区出土遗物 II



宗岡家地点出土遗物 I



42



宗國家地点出土遗物Ⅱ



豊采神社地点出土遗物Ⅰ



豊栄神社地点出土遺物 II



同 出土瓦



豊栄神社地点出土・採集瓦



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	いわみぎんざん					
書名	石見銀山 Iwami-Ginzan Silver Mine Site					
ふりがな	いわみぎんざんいせきはくつちようさがいよう					
副書名	石見銀山遺跡発掘調査概要 24					
シリーズ名・巻次	昆布山谷地区・宗岡家地点・豊榮神社地点					
編著者名	山手貴生・新川隆・尾村勝					
編集機関	島根県大田市教育委員会					
所在地	〒 694-0064 島根県大田市大田町大田口 1,111 番地					
発行年月日	2016年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
石見銀山	しまねけんおおだしあおおひらきょう 島根県大田市大森町	32205	A232 ～ 319	35° 5' 30"	132° 26' 30"	2015年5月 ～ 2016年1月
調査面積	126 m <sup>2</sup>					
調査原因	国庫補助事業による学術調査					
所収遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
石見銀山	鉱山遺跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	土石 石炉 溝石	坑 列 跡 石製品	陶磁器 金属製品 石製品	国指定史跡 銀生産遺跡 (1969年4月14日)
	町屋跡					(2002年3月19日、 2005年3月2日、 2005年3月14日、 2008年3月28日)
	寺社跡					追加指定

石見銀山  
Iwami-Ginzan Silver Mine Site  
石見銀山遺跡発掘調査概要 24



—昆布山谷地区・宗岡家地点・豊栄神社地点—

2016年3月

島根県大田市教育委員会  
島根県大田市大田町大田口 1,111 番地  
印刷・製本 急行印刷